
ノーベルにこんにちは

羽村奈留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーベルにこんにちは

【Nコード】

N2127E

【作者名】

羽村奈留

【あらすじ】

『時の王子様編』2027年にノーベル物理学賞を受賞した加藤知子10歳の時の物語です。美形あり、初恋あり、ハプニングあり、そして物語は思いもよらぬ方向へ進行します。一人っ子の加藤知子は何を考え、その幼い瞳には何が映るのでしょうか。こちらは「ムーンチャイルド企画」書き下ろし作品です。

1：時の王子様編の設定資料（前書き）

ネタバレはないので、お気軽にお読み下さいませ。

1：時の王子様編の設定資料

主な登場人物

「加藤知子」

10歳。ショートボブ。一人っ子。独占欲が強い。
平屋の借家育ち。衣類・持ち物などの多くは従姉妹のお下がり。
大人になったある日ノーベル物理学賞を受賞するらしい。

「知子の父」

30歳代。酒が大好き。某有名会社の経理事務をしている。
影の薄い存在だが、いざとなると頼りになる。しかし、それが裏目に出る時もある。

「知子の母」

30歳代。美形大好き。北陸に実姉がいる。
挨拶ができる善い子になるように知子を躾けているようだ。

「山田美里」

10歳。ロングヘア。姉がいる。フリルのついた服を好んで着る。

知子とクラスが違う。

「安田佳枝」

10歳。左右のお下げ。母親の勧めで花柄の服を着る事が多い。
知子とクラスが同じ。成績学年上位。

「相馬（父）」

50歳前後。加藤家の隣の借家に引っ越してくる。イタリア人と

日本人のハーフらしい。

「相馬（息子）」

20歳。身長185cm。イタリア人と日本人のクォーターらしい。

「ドン・ガルネオ」

60歳代。イタリアマフィアのドン。シチリアに点在する島を1つ所有している。

「トロッキオ」

30歳後半。ガルネオの片腕。ガルネオに恩義があり、いろいろと尽くしている。

「三人の男」

ロイ。ベン。アル。年齢不詳。身体能力が優れているらしい。

「生田公雄」

50歳前後。物理学博士。いくつもの特許を持つ大富豪。ノーベル物理学者の加藤知子を恨んでいる。ゲームマニア。

「坂野（女）」

20歳後半。生田公雄とよく一緒にいる。

「カプリツオ」

トロッキオの孫。トロッキオの6番目の娘から生まれる。

ノーベル物理学者の加藤知子の経歴

1998年	誕生。	
4月13日(月)。	岐阜県岐阜市の病院で生まれる。	体重3'2
40g。	血液型A型。	
1999年	1歳。	
2000年	2歳。	
2001年	3歳。	
保育園入学。		
2002年	4歳。	
2003年	5歳。	
2004年	6歳。	
2005年	7歳。	
小学校入学		
2006年	8歳。	
2007年	9歳。	
2008年	10歳。	
今回は、	ここの物語です(ファーストインパクト)。	
2009年	11歳。	

2022年	24歳。	できちゃった結婚。
2021年	23歳。	大学院生となる。
2020年	22歳。	
2019年	21歳。	
2018年	20歳。	
2017年	19歳。	大学入学。
2016年	18歳。	
2015年	17歳。	
2014年	16歳。	高校入学。
2013年	15歳。	
2012年	14歳。	
2011年	13歳。	中学校入学。
2010年	12歳。	

2023年 25歳。

2024年 26歳。

2025年 27歳。

2026年 28歳。

新相対性時空移動理論を学会に提出。博士号を取得。
タイムマシン試験機により物体の時空移動に成功。

使用された物体は油性ペンのキャップ。
タイムマシン技術の特許を取得。

2027年 29歳。

ノーベル物理学賞を受賞。

2028年 30歳。

国際科学アカデミー時空移動研究所を設立。場所はガルネオ島。
時空移動研究チームの総責任者となる。

2029年 31歳。

2030年 32歳。

日本国立研究所の所長に就任。

時空移動研究のみをしたい理由から知子は所長就任を何回か辞退している。

2：女神の婿養子になりたいっす

夜空は今日も晴れていた。

3人の男は今日のような月夜の晩がとても嫌いだった。

服装は3人とも上も下も黒。白い所が見当たらない真っ黒な姿は夜の背景にピッタリとはまり、何もまっとなっていない顔が宙に浮かんでいるように見える。

ズボンの左右のポケットに両手を入れた男が空を見上げる。

「雲1つ無い満月を喜ぶのは、狼と天文学者くらいのもんだ。やっぱり神様は、俺たちの味方になっちゃあくれない」

「淋しい事を言うなよ。ベン」

呟くように言った男はポケットからタバコを取り出して口にくわえる。ライターで火をつけようとするが、ライターはカチカチと音を立てるだけで火がつかない。

「チッ。火の神様が意地悪をしやがる」

アタッシユケースを持っている三人目の男が、自分のライターに火をつけてタバコの前に出した。

「兄貴、俺のを使って下さい」

「有難うよ、アル」

男はタバコに火をつけると胸いっぱい煙を吸い込んで、口と鼻穴からゆっくりと煙を出した。

三人の男の前には太いビルがそびえ建っている。ビルは塀に囲まれ、その頑丈そうな塀が、中にあるビルを守りながら、ビルを見上げている三人の男を威嚇^{いかく}し、男たちの行く手を阻^{はば}んでいる。

塀の外は何も無いただっ広い草原。所々にある監視塔がビルの周りを明るく照らして監視をしている。

ビルの玄関前には太い道が門まで伸びていて、門には太い鉄格子でできた扉があり、そこから道は外へと伸びていた。

三人の男は門の外の道の上に並んで立ち、月の光に照らし出された鉄格子の扉を見ていた。

真ん中にいる男がタバコを吸っている。

右端の男はポケットに手を入れたベン。

アタッシェケースを持ったアルは左端に立っている。

タバコを持っている男が言う。

「ハードボイルドな俺にとって、夜空にいる月の女神の微笑みは眩^{まぶ}しすぎるぜ」

ポケットに両手を入れたベンが言う。

「ロイ。俺なら、月の女神を誘惑するね」

アルが冗談混じりに言う。

「兄貴。俺は、逆玉の輿で月の女神の婿養子になりたいっす」

「その顔で婿養子だと。バカじゃないのか、お前は？」

ロイは口から煙を出しながら言うと、短くなったタバコを高く上げて、振り向くことなく後ろへ投げ捨てた。

ベンはポケットから手を出して振り返る。

「ロイ。タバコを捨てちゃあダメだぜ。罰金もんだ」

アルも言う。

「そうっすよ。センサーに引っかかったら、オレたち捕まってしまうぜ」

ロイはポケットから目出し帽を取り出して被る。

「なあに、見つかったら逃げればいいんだ」

ベンも目出し帽を被る。

「奴ら、逃げてもしつこく追いかけてくるぜ」

アルも目出し帽を被った。

「まっ、捕まっても、オレはニコチン検査に引っかからないからい

いけどよ」

アルのニコチン話を聞いて、真ん中で喫煙をしていたロイは気を悪くしたのか、少し乱暴な口調で言う。

「つべこべ言つてないで、早く門を壊せ」

なぜか右にいるベンも口調が荒い。

「そうだ、早くしろ。お前が門を壊すのをオレたちは待っているんだぞ」

アルは渋々歩き出した。

「本当に兄貴たちは、勝手な事ばかり言うんだから」

アルは、アタッシュケースを地面に置いて、ポケットから手の平サイズのカプセルを取り出す。カプセルをひねりカプセルについているメモリを合わせると門に向かって投げた。カプセルは地面に落ちたあと門へと転がって行く。

三人は同時にゴーグルをつける。まるで訓練された者のように。

ベンが聞く。

「時間は？」

アルが答える。

「30秒後」

ロイが言った。

「30秒は、遅いんじゃないのか？」

「兄貴、この前の時、20秒じゃ早いって言ったじゃないですか」

ロイとアルが向き合つと、ベンが二人の間に入った。

「言い合いをしても始まらんだろ」

言い切った時、門は大爆発に見舞われた。

道路にいた三人は吹っ飛んで地面に転がる。

ベンが叫びながら立ち上がる。

「バカヤロー、火薬多すぎだ」

ロイも叫びながら立ち上がる。

「ニコチンをとにかく言う前に、お前の火薬をどうにかしろ。早死にさせる気か」

アルも立ち上がった。

「頑丈な門だから火薬を多めにしろ、と言ったのは兄貴たちじゃないですか」

ロイとベンは言い返した。

「俺たちが怪我をするほど火薬を多くしろとは言つとらん」

「そうだボケ」

二人の兄貴はアルを残して壊れた門へ走り出す。

「兄貴、あんまりだ。3日もかけて作った手榴弾なのに」

残されたアルも二人を追いかけて走り出した。

3：次は俺の出番か

同じ体系に同じ黒い姿。場所を入れ替わり立ち代りで走り出したら、傍目には誰が誰だか分からなくなってくる。

だが、役割分担はきちんとされているようで、手榴弾を投げるのはいつもアルで、必ずあとの二人を兄貴と呼ぶ。

手榴弾は玄関も壊し、三人に立ち憚^{はば}る扉をも壊していく。

中は廊下と壁と扉だけで表札も何も無い。

ビルの警報装置が作動し、警報音を聞いた警備員が走り出す。

三人の男は、エレベーターを無視して通り過ぎ、その先にある階段を上って行く。

途中、出会った警備員を殴り倒して気絶させ部屋に連れ込み、警備員の服を剥^はぎ取って着替える。

目出し帽を取り警備帽を被れば、ロイとベンとアルは立派な警備員に見えてくるから不思議だ。

ゴーグルを隠して警備員に紛れて移動すれば、追われる事もなくなる。

目的地の見取り図は頭の中に叩き込んである。

三人の男は平然とした様子で目的地の部屋に到着した。

アルが目の中の扉に触り、ポケットから取り出したカード型の機械を扉に宛てがって言う。

「兄貴、この扉は俺の手榴弾でも無理だ」

「だったら、次は俺の出番か」

ベンはポケットからハンドライトを取り出す。

スイッチを入れて、ゆつくりとメモリを回していくと、ライトの光が白から赤に変わっていく。

赤い光は扉を照らし、もう一つのスイッチを押せば赤い光は細い光線となり、光線は扉の上を這って動き、扉に切れ込みが入っていく。

赤い光線が1周して最初の切れ込み跡にたどり着いた時、扉はズレてから床に倒れた。

三人の男は扉の中に入って行く。

その奥にまた扉があるが、三人は入ってすぐに立ち止まった。床にラインが引いてあるようにきちんと整列をする。

右端のロイが胸ポケットからタバコを出して口にくわえて言う。

「赤外線トラップだ」

三人のゴーグルには無数に張り巡らされた赤外線が見えているよ

うだ。

真ん中のベンがハンドライトの赤い光りを照射してロイのタバコに火をつける。

「赤外線に触れると、更にでかい警報音が鳴るか、俺たちが死ぬか」

左端のアルが言う。

「ここまで来て、死ぬのはゴメンですぜ」

アルが左端に立つのは決まっているようだ。

ロイは煙をゆっくりと吐き出す。

揺れる煙に赤外線が映り、網目状に張り巡らされている赤外線も揺れ動いているように見える。

煙が薄くなり赤外線が見えなくなった時、ロイはタバコを前に投げ捨てた。

瞬間、閃光が目の前を走り、タバコはあっという間に燃え尽きる。

赤外線センサーが物体を感知すると、壁の光線銃が顔を出して瞬時に感知した場所を特定し、光線が撃ち込まれる仕組みのようだ。

ベンは口の端を歪めて苦笑した。

「このシステムは、タバコ好きのようだ」

ロイはタバコの箱の中味を見ながら言う。

「それは困った。残り一本しかないから、かわいい娘^こ以外は渡したくないんだが」

アルは体を揺らして言う。苛立っているようだ。

「兄貴、早くして下さいよ。警備員が来たら、まずいっすよ」

ロイはタバコを懐に入れると、変わりに銃を2丁出した。

「せっかちな男はもてんぞ」

2丁ともベレッタM92。

銃は両方とも手入れされていて黒光りしているが、表面の細かい傷が多く目に付く。

その2丁のベレッタを両手に持ち、まず赤外線の出所に撃ち込んで赤外線システムを壊していく。

自動システムが作動し光線銃が顔を出せば、撃たれる前に光線銃を撃って破壊していく。

暫くロイと警備システムとの撃ち合いが続き、勝利したロイは銃を懐に入れからタバコを取り出した。しかし、タバコは吸えない。

ベンがハンドライトの柄を、ロイの手に載せているからだ。

「ロイ。残り一本のタバコは、仕事を終えてからだ」

「チツ、仕方ねえな」

ロイは面倒くさそうに舌を鳴らしてからタバコを懐に入れた。

左端で待っていたアルは、体を揺らしながら足を出して前に進む。

「全く、なんで俺はこんな兄貴たちについてきたんだろう」

真ん中のベンも歩きながら言う。

「金以外にないだろ、普通」

「そうだ」

右端のロイも歩きながら言った。

三人は奥へと入って行く。

手榴弾では壊せない扉。網目状に赤外線が張り巡らされた通路。下手に歩けば光線銃で狙い撃ちにされる。一体、そんな厳重な警備の奥に何があるというのだろうか。いや、三人がすんなり入れるような場所には何もないのかもしれない。

三人が歩く通路は一本道。狭くて扉すら見当たらない。

アルは、胸中の不安を膨らませて、それを隠すようにアタッシュケースを胸に抱いて、おどおどとした表情で言う。

「兄貴。本当にこの先にあるんですかね？」

ベンは左手をポケットに入れて、ハンドライトを持った右手を前後に振って歩きながら言う。

「あるから行くんだろ」

狭い通路の先は、吸い込まれそうなくらい真っ暗で何も見えない。だがその闇が、空間の広さを意味している。

ロイはその闇を見ながら懐の銃に手をかける。

「どうしたんですか、兄貴？」

ロイは問われても答えない。無言で銃を出す。そして銃を構えてからは言う。目をギリギリとさせて。とても嬉しそうに。

「傭兵の俺が生き残ってきた理由。それは……」

「それは？」

聞きたがるアルの横で、ベンがハンドライトから細く赤い光を出す。光りが当たった床は焦げてジューと音を出しながら煙を上げる。

「答える必要はないだろ。お前も傭兵なんだから」

「俺さっぱり分からないっすよ。兄貴たちみたいに傭兵長くやってないから」

ロイは走り出す。闇に向って。

「じゃあ、お前は死ぬだけだ」

ベンも闇に向って走る。

「これは言葉で言っても分かるもんじゃないからな」

残されたアルは身震いしながらも小走りで二人の男に続く。

「なんで俺は、あんな二人と組んじまっただらう」

前を走る二人の男は不規則に蛇行しながら闇に向って行く。

闇は静かに二人の男を待ち、男たちが闇に飛び込んだ時、闇の中を無数の光線が飛び交った。

4：ペレッタを両手に

通路で一人走るアルは叫ぶ。

「兄貴！」

光線はまだ闇の中を飛び交っている。

「こういつ時、俺はどうすればいいんだ……」

アルは、アタッシュケースを手放し、懷から手榴弾を取り出して両手に持つ。

「あんなに暗いのに、どうして戦えるんだ？」

怖くて汗がどんどん噴き出してくる。でも戦わなければ殺される。それが傭兵の定め。

「兄貴。兄貴。くっそー、俺も、俺も、やってやる！」

アルは闇の中に飛び込んだ。すぐに頭の上を光線がかすめる。反射的に床に転がり込み、更に一回転してから、身を低くして手榴弾を持った両手を振り上げて構えた。

「この野郎。てめえら、俺の手榴弾で全員ぶっ殺してやる！！」

アルが大声で叫んだ時、カチツと音がして辺りが急に明るくなった。天井の照明が光っている。

アルは眩^{まぶ}しさに目を細めて、手榴弾を持った手を額^{ひたい}に当てて庇^{ひか}を作る。

周りにロイとベンはいない。いろんな姿形をした機械が見える。

床には警備員の死体。死体はざっと数えても20以上はある。

2丁のベレッタを両手に持ったロイが機械の間から現れて歩いて来る。

「遅いんだよ。バアーカ」

ハンドライトを持ったベンがロイの隣に並ぶ。

「終わってから来るな。ボケ」

「あにきい」

手榴弾を持ったアルは脱力して床に尻をつけて座り込んだ。

きつと警備員との戦いは激しいものだっただろう。

だが、並んで立っているロイとベンの表情は、清々しい笑顔に満ちている。

たった今20人以上を殺した傭兵とは思えないほどに、さっぱりとした表情をしている2人を、床に座り込んでいるアルは、まだ落ち着かない息を吐きながら見続ける。口の中に入ってくる無意味な汗が、なんとも言えない苦さをアルの舌に伝えた。

体育館ほどの広さがある室内に、機械はある一定の法則で並んでいる。その並びが何を意味しているかなんて、三人の傭兵は知らない。傭兵たちは、雇い主の依頼に従って言われたとおりに動くだけ。

ベンは機械の一つに触れる。

「まずは年数のセットだ。何年だ？」

アルは立ち上がって爆弾を懷に戻しながら言う。

「2008年っす」

ボタンを押して言われたとおりの年数をセットする。

表示された年数も確認して間違いがない事を確かめる。

「セットしたぞ」

ロイは床に落ちていたアタッシュケースを拾い、アタッシュケースの表面についた埃ほこりを払いながら歩く。

「こいつを箱の中に入れる」

箱といっても、日本の茶室ほどの大きさがある。壁は金属でできているが材質は何か分からない。ユニットハウスといったほうが早いかもしれない。

そこにアタッシュケースを入れてドアを閉めた。ハンドルを回してしっかりと閉める。

アルは箱の外壁を触ってその感触を確かめてからドアの窓ガラスに額をくつつけて中を覗く。

「兄貴、本当にこれがタイムマシンなんですかね？」

ベンが確認ついでに、別の窓からタイムマシンの中を覗く。

「でなければ、雇い主は俺たちを騙した事になる」

「だったら俺たちも過去へ行きましようよ。ねえ、兄貴？」

火のついていないタバコをくわえたロイが言う。

「ダメだ。お前も雇い主の話を聞いただろ。人を飛ばすのは無理だつて」

「そうだ。人が乗れるなら、とつくの昔に雇い主が過去へ行ってるだろ。普通」

ベンは言ったあとに、普通と付け加える事が多いようだ。それはベンの口癖か。

ロイは、並んでいる機械に次々と触れていき、雇い主から指示されたとおりにスイッチを順番に入れていく。

「おい、タイムマシンから離れる。作動させる。膨大なエネルギーがそっちへ行くぞ」

「兄貴、急いで離れるっすよ」

「あいよ」

ベンとアルは、年数が表示されている機械へ移動する。

機械のパネルはとてもシンプルにできている。

数字を入力する場所のほかはオンオフのスイッチしかない。

その機械から隣の機械へ、また隣の機械へと太いコードが伸びて繋がっている。

きつとこの広い室内にある機械全部にコードは繋がっているのだろう。

タイムマシンは室内の中央にあり、タイムマシンの周りをコードで繋がった機械が囲み、それが輪となって幾重にも広がっている。年数を入力した機械も多少離れているとはいえ、そのタイムマシンの傍らにあった。

ロイは全ての機械のスイッチをオンにすると年数が入力してある機械に戻ってきた。ロイのタバコにはまだ火がついていない。

「兄貴、火いるっすか？」

差し出されたライターの火に手を翳す。^{かざ}

「いや、いい。このタバコに火をつけるのは、タイムマシンを見送ってからだ。仕事が終わったら恰好良くハードボイルドで決めたいからな」

タバコを吹かしていないのに、なぜかロイの機嫌はいい。

「そうつすね。へへっ」

断られたアルも機嫌よく笑顔でライターを懷に戻した。

5：仲良く三人同時押し

ベンは数字が表示されているパネルに手をつく。

「で、誰が発射のボタンを押すんだ？」

「そりゃあ、決まってるだろ」

ロイは、パネルの上にあったベンの手をボタンの上に載せる。

ベンは意外だと喜ぶ。

「俺？ いいのか俺が押しても？」

「何を勘違いしている」

ロイはベンの手に自分の手を重ねる。重ねてから首を動かして、黙って突っ立っているアルに手を重ねると合図を送った。

アルは自分に指をさして言う。

「兄貴、俺もいいんですか？」

ロイとベンは同時にハモツて言う。

「当たり前だろ。お前もメンバーなんだから」

「あにきい」

アルは突っ立ったまま鼻をすすって鳴らす。

「泣いてんじゃねえよ、バカ」

「早く手を置けって、ボケ」

アルは嬉しそうに二人の手の上に自分の手を置いた。

「俺、兄貴たちに一生ついていくっす」

「気持ち悪い事言ってんじゃねえよ」

「この前、そう言っただけでトイレにまでついて来ただろ。お前は」

なんだかんだと言いながらも二人の兄貴はアルが大事なようだ。

アルも二人の兄貴との腐れ縁を今さらながらに感じて嬉しそうだ。

「えへへっ」

「泣きながら笑うな。バカ」

「この変態野郎」

そして、ボタンは押された。

ロイは、くわえているタバコを小刻みに揺らして言う。

「今、ボタンを押したのは誰だ？」

ベンは首を横に振る。

「俺は押してねえ。お前か？」

「兄貴、俺も押してないですつて。三人の手の重みでボタンを押してしまったんじゃないですかね？」

ロイとベンは顎を落とした。

「なにに！ 俺の……、ハードボイルド人生に傷が……」

「仲良く三人同時押しの手合が、ここぞという時に崩壊するとは……」

嘆いている二人の兄貴＋きよんとしているアルの周りで、室内にある全ての機械は動き出し個々に青い光を帯びる。

光は外側から中へと円を描いてコードに沿って移動していき、渦巻きキャンディの渦そつくりの光のデザインが浮かび上がり、螺旋らせんとなった光の触手が中心にあるタイムマシンに触れた時、タイムマシンを中心に渦は背を伸ばして高くなり青い光の竜巻となって立ち上がった。

光の渦の中にいた三人の傭兵は、口を開けて身の回りで起こっている不思議な現象に見とれている。

「なんて綺麗なんだ」

「美しい」

「俺、生きていて良かったっす」

風圧はないようで、感嘆している三人の頭髪はなびいたりしていない。ただし、三人の体は、頭から金粉を被ったように煌き、それは金色の煙となって少しずつ竜巻に巻き込まれていく。

「兄貴、これなんすか？」

アルは手を見せて言う。アルの手は既に指の第一関節が消えてしまっている。今もアルの指から金色の煙が立ち昇り竜巻に吸い込まれている。痛みは全く感じないようだ。

「どういう事だ？」

ロイがくわえているタバコも金色の煙になって竜巻に吸い込まれていく。

「俺たちやバインじゃねえのか？」

そう言うベンの頭の上半分は消えて、残っている顔から金色の煙が湯気のように立ち昇り竜巻に吸収されていく。

床にある警備員の死体も金色の煙となって消えていく。

竜巻は光りながら回転運動を続け、三人の男の体が全て金色に光る煙に変わった時、機械の外側から青い光がなくなっていき、光の渦は中心にあるタイムマシン上の竜巻だけとなり、その竜巻もタイムマシンに吸い込まれ、竜巻の背丈は低くなり、青く光る竜巻はタイムマシンと共に消え去った。

6：美少女戦士

事の一部始終をシステムは鮮明に録画していた。

竜巻が消え去った映像が映し出されているモニターを、椅子に腰掛けた白衣の男が見ている。

頭に白髪が混じった男の胸には名札があり黒字で「生田公雄^{いくたきみお}」とプリントされている。50歳前後に見える。

生田は画像を巻き戻して、また青く光る竜巻が発生する現象を見始める。きつと何回も連続で見続けているのだらう。

生田は尻の痺^{しび}れを感じてか、椅子に座り直して肘掛けに手を置いてから鼻から息を出した。

「またご覧になっているのですか、生田博士？」

生田に声を掛けたのは女性。生田と同じ白衣を着ている。どれくらい長いのか分からないが、その長い頭髪を束ねてねじってあげて解けて落ちないようにピンでとめてある。年齢は20後半だろうか。

生田は肘掛けにあった手に力を入れてゆっくりと立ち上がった。

「実験が失敗に終わったんだ。失敗の原因追究のため、何度も見直すのは当然だろ」

生田は歩いてコーヒーマーカーに手を伸ばす。

女性は生田の横に並び、生田より早くデカンターを取り出して、生田の目の前でカップにコーヒーを注いだ。

「だからといって、根を詰められてご病気にでもなったら」

女性は生田にコーヒーが入ったカップを手渡す。

「坂野君、有難う。そこまで年を取ったつもりはないんだが」

生田はコーヒーを口に含んでから、また続けて言った。

「私は悔しいんだ。大学在籍中に物理学の博士号を取得し、その大
学も首席で卒業し、卒業後に書いた論文は世界に認められ、その論
文を元にシステムを考案開発し、特許も取り、巨万の富を築いた私
が、今では世に忘れられ、一介の博士扱いだ」

生田がカップを置いた机の上には、分厚いハードカバーの本が一
冊ある。著者の名前は「加藤知子^{かとうちこ}」

生田は本を持ち上げる。

「新相対性時空移動理論。加藤知子。加藤知子。加藤知子。ノーベ
ル物理学者、加藤知子」

生田の、本を持っている手が力んで震えている。眼球は血走って
今にも毛細血管が切れそうだ。

「私と同期だったこの女の大学時代の成績は、下から数えたほうが
早いくらいだったんだ。なのに、新相対性時空移動理論でノーベル
物理学賞をとったとたん、国の要人扱いだ。今では日本国立研究所

の所長兼、国際科学アカデミー時空移動研究チームの総責任者。お陰で日本国立研究所の所長の地位を失った私は、世間に笑われどれほど酷い扱いを受けたか」

助手の坂野は椅子を引いて生田に座るように促す。

「生田博士、そんなに興奮してストレスを溜められてはお体に障ります」

生田は口から息を吐きながら坂野の顔を見る。

美人というほどではないが坂野もそこそこ端正な顔立ちをしている。上目づかいで生田を見る坂野の表情は、興奮する生田を心配していた。

生田は本を机に置いて坂野が掴んでいる椅子に腰掛けた。

「どうすれば、この女を超える事ができるんだ」

ハードカバーの本の表紙の端に加藤知子の顔写真がある。笑顔で映っている加藤知子は眼鏡をかけている。年齢は50前後だろうか。その加藤知子もまた、美人過ぎることのない普通のごくありふれた顔立ちである。

巨万の富を築き、欲しいものはなんでも手に入れる事ができる生田が、なぜこの女性ノーベル学者をライバル視するのだろうか。

「相対性時空移動理論は、先に私が唱えたんだ。なのに、この女が新相対性時空移動理論を学会に出して、ノーベル物理学賞を」

生田は拳を机に置いて、更に手を握り締める。

「なぜこの女が考案開発したシステムだけ、タイムトラベルが可能なんだ」

坂野は自分のカップにコーヒーを注ぎながら言う。

「生田博士もタイムトラベルシステムを完成されていらっしやるじゃないですか」

「私のタイムトラベルシステムは、まだ物体を100%完全なままでは飛ばせん。特に人体へ影響が酷くてな、体の細胞が分子分解を起こして時間移動のエネルギーになっちゃう。今回行った実験でも、人間そっくりに作られた有機ロボットとはいえ、1体数億はする軍用の傭兵ロボット3体と、30体以上の警備ロボットを失ってしまったんだ」

「また有機ロボットを使って、実践型戦略シミュレーションゲームで遊びながら、タイムトラベルの実験をしたんですね。前回のメインキャラクターは美少女戦士でしたが、今回のメインキャラクターはどういう設定に……」

生田の鋭い眼光が坂野を捉える。

坂野は、生田に対して言うてはいけない事を言ってしまったと思い、急いで口元を手で隠した。次に生田が怒鳴るかと思いい覚悟を決めるが、生田は首をうな垂れてしまう。

「仕方ないだろ。毎日実験ばかりしては、さすがの私も飽きて

くる」

たび重なる実験の失敗に生田の心身は疲れているようだ。

坂野は生田の机に歩み寄って、その机にカップを置く。

「今回、実験に用いたアタツシケースはどうなりましたか？ また、分子レベルで崩壊したんですか？」

生田は頭を持ち上げる。

「どうだろうな。映像ではうまくタイムワープして消えたように見えるが」

会話をしている生田の部屋に、突然若い研究員が入ってくる。若い研究員の手には書類がある。

「生田博士、実験の分析結果が出ました」

若い研究員は加藤知子の本の横に書類を置く。

生田は書類に目を通す。

若い研究員の表情は嬉しそうだ。

「実験後、空間の残存物を計測分析した結果、やはりいつもの如く有機ロボットと思われる分子の存在がありました。ですが、アタツシケースの分子の存在は見当たりませんでした」

生田の表情から笑顔がこぼれる。

「有難う。よく調べてくれた」

坂野も笑顔になる。

「よかったですね。生田博士」

生田は立ち上がって、若い研究員の退室を見送る。

「アタッシューケースは無事にタイムワープしたんだ。これで加藤知子を超えられる。今回の私の理論が正しければ、ノーベル物理学賞の受賞者は私ということになるはずだ」

「生田博士」

「坂野君」

生田博士は坂野と嬉しそうに握手を交わした。

7：ガルネオ島

広がる珊瑚礁。揺れるサファイア色の海。

ここはイタリア共和国、シチリア自治州にある、孤島。

孤島の名前は、ガルネオ島。

世界五大魔王の1人と謳^{うた}われるマフィアのドン、ガルネオが所有する島である。

島にある全ての砂浜は、ガルネオのプライベートビーチ。

島に生えている椰子の実も全てガルネオのもの。ガルネオの許しなく椰子の実をとって食べてはいけない。

平地には一階建てだが広大な土地を利用して作られた白い別荘があり、別荘内は召使いと思われる男女が行き来している。

広い庭には手入れされた芝生が一面を覆い、丸いプールもあり、プール際の女神像が持つ壺からは水が流れ落ち、常にプールにはきれいで清潔な水が満ちている。

そんなガルネオ島は今日も晴れていた。

ドン・ガルネオの一日は、庭が見渡せる部屋での朝食から始まる。

ガルネオの室内にいる時の服装はなんでもありで、ガルネオは周りの視線など全く気にしない。頭の天然パーマも鼻の下のヒゲも手

入れ前の状態で、ガルネオ本人は恥じる様子もなく、太った体を揺らしてのんびりと優雅に歩いている。

今日もガルネオはパジャマ姿で朝食を食べにリビングに参上した。召使いから渡された朝刊を、指輪が沢山ついた手で受け取る。

どの指輪にも、ガルネオの親指の爪より大きな宝石がついている。赤はルビー、青はサファイア、緑はエメラルド、そしてダイヤモンド。白は真珠とオパールといったところだろうか。

極彩色な手は新聞を広げてガルネオの顔を隠す。

ガルネオが朝刊を読んでいると、召使いが朝食を持ってくる。

朝食はいつも決まった内容。

ヴェネチアングラスに入った冷えた牛乳。もちろんガルネオ島で飼育されている牛から搾^{しぼ}ったものだ。

銀の卵置きに載っている温かいゆで卵。これもガルネオ島で飼育されている鶏が産んだ卵である。

緑黄色野菜がいっぱいのサラダ。やはりガルネオ島の畑で栽培されたものだ。

最後に丸い器に入れられたコーンフ레이크。これだけはイタリアの首都ローマで購入している。

なぜコーンフレークだけが、ガルネオ島産でないのか？

それは 印のコーンフレークが一番健康によいとガルネオの母親が生前に言い残したからだ。

マフィアのドンといえど、ガルネオは60を過ぎた今でも母親の言いつけを守っているのである。

最初、ガルネオは朝刊を読みながら片手でコーンフレークに牛乳をかける。それをろくに混ぜもせずスプーンですくい口に入れて噛み砕く。

次にゆで卵の上半分をスプーンですくうようにして二つに分け、スプーンに載った殻つきの白身は捨ててしまい、顔を出した半熟の黄身だけを食べる。

事件はその時に起こった。

突然、庭に光る竜巻が発生したのである。

青く光る竜巻は移動せずに体をくねらせて腰だけを振っている。

この異様な光景を、ガルネオは新聞から顔を出して黄身が載ったスプーンを持ったまま見守る。

竜巻が発生する時に必ず現れる黒い雲は空にはない。雲一つない青空が広がっているのである。

そもそも、イタリアの気候で竜巻が発生するのは珍しく、ガルネオ島という孤島で青く光る竜巻が発生する事はありません。

この光る竜巻事件はガルネオ島の歴史始まって以来の怪事件だった。

光る竜巻は成長してどんどん太くなり、ガルネオ自慢の白い別荘が飲み込まれると、ガルネオが覚悟を決めた瞬間に突如として消え去った。

ガルネオは立ち上がる。両手にあった朝刊とスプーンは床に落ちる。スプーンに載っていた半熟の黄身は床の上で平ぺったくなっている。

青く光る竜巻が発生した庭が気になって、ガルネオは両手に何があったのか忘れているのだ。

「あれはなんだ？」

ガルネオの口から出る言葉は生粋きっすいのイタリア語。

庭を目指して歩くガルネオは、自分がしゃべったのにも気づいていない。

大きなガラス窓の向こうには、見たこともない金属の塊がある。

ガルネオはパジャマ姿でガラス窓を開けて、素足で庭に下りた。

手入れされた芝生に、ガルネオの足の裏を傷つけるものは何も無い。

金属の塊に触ろうとするガルネオを、ガルネオの片腕であるト口

ツキオが止める。

「ガルネオ様、お待ち下さい。先に危険がないか確認をしますので」
トロツキオの年は30後半。細身ですらりと伸びた身長は180センチ以上あり、体の太いガルネオとは対照的だ。

「これは神の仕業だ。^{しわざ}でなければ、天国にいるママからの贈り物かもしれない。それをほかの者に任したとあつては、このガルネオの沽^こ券^{けん}に関わる」

ガルネオはゆっくりとトロツキオの手を遠ざけるが、トロツキオはガルネオから離れようとしない。

走り出した子分がガルネオより先に金属の塊に触れて、何も無いですと首を横に振ってトロツキオに知らせる。

ガルネオは、トロツキオが子分を見た瞬間にトロツキオを押し退けて歩き金属の塊に手の平をつけた。金属は仄^{ほの}かに温かい。手の平を滑らせて金属の表面に沿って歩き、半周もしないうちにドアに行き着いた。

ガルネオはドアにあるガラス窓を覗く。中にはアタッシュケースがある。アタッシュケースが気になって、ドアを開けようとするが、それもやはりトロツキオが止める。

「もしもの事があるといけませんので」

「大丈夫だ。どけ、トロツキオ！」

今度のトロツキオは、ガルネオに怒鳴られてもどかなかった。ガルネオの両肩を掴んで行く手を阻はばんでいる。

そうこうしているうちに子分がドアのハンドルを回して開けて中に入り、アタツシユケースを取り出した。

ガルネオはトロツキオの体の横から顔を出してアタツシユケースを見る。

トロツキオは、ガルネオと一緒に動いてガルネオの顔の前に自分の顔を移動させる。

「ガルネオ様、もし爆弾でも入っていたら」

ガルネオの銀色の瞳は、トロツキオの琥珀こはくいろ色の瞳を睥む。

「くどいぞ、トロツキオ。これは神の仕業だと言っただろ」

ガルネオはバスケットの選手のように体を左右に揺らしてフェイントをかけてトロツキオの陰から飛び出した。太った体からは想像がつかない早業で子分が持つアタツシユケースに手を掛けて、ロツクを外し、なんの警戒心もなくアタツシユケースを開けた。

8：金色の銃

中には幅が2センチくらいの金色の棒が並んで入っている。表面は凸凹でこぼこしていて真ん中に繋ぎ目がある。数は全部で10個。その上にA4サイズの封筒があつた。

ガルネオは封筒を手に取り、中身を出した。A4の用紙の上を滑って一枚の写真がガルネオの手に載る。写真には一人の少女が写っている。

「なんだこれは？」

ガルネオは写真をトロツキオに手渡す。

「ただの写真画像です。太陽に透かして見ても、なんの仕掛けもありません」

ガルネオはA4の用紙を見る。

「俺が知ってる文字じゃねえ」

それもトロツキオに渡す。

「これは英語ですが、俺も読めません」

ガルネオはほかのA4用紙を掻かき分けて見ていく。

「これも読めん。これも、これも、これもだ。なんだってんだ、畜生！」

ガルネオは手を振り上げて空に向かって叫ぶ。

トロツキオは、ガルネオが見ていたA4用紙を一枚一枚手に取って見た。

「日本語。中国語。フランス語。イタリア語。お！これなら読める」

トロツキオは、芝生に唾を吐いて苛立っているガルネオを呼んだ。

「ガルネオ様、読めるのがありましたぜ」

ガルネオは振り向いてそのA4用紙を手にとった。子分が駆け寄りガルネオに老眼鏡を渡す。

ガルネオが読んでいるA4の用紙には、プリントアウトされたイタリア語でこう書かれていた。

このアタッシュケースがファミリーが住むガルネオ島に届く事を祈る。

ガルネオ島で暮らすドン・ガルネオに未来からの贈り物を渡そうと思う。

ケースに入っているのは全てレーザー銃。

10丁ある。

製造価格は10億アメリカドル。

1丁の価格だ。

弾丸の補充も充電もしなくていい。

半永久的に使える。

そのレーザー銃である人物を殺して欲しい。

名前は加藤知子。日本人。

写真のとおり今は10歳の子供だが見縊^{みくひ}るな。

その娘は将来、大人になった時に、ガルネオ島に研究施設を建設する。

当然、島の所有者であるドン・ガルネオは刑務所行き。

ファミリーも全員刑務所暮らし。

ドン・ガルネオは、未来の記録では獄死となっている。

気づいたかもしれないが、これは未来からの手紙である。

そしてレーザー銃も未来で製造されたもの。

信じる信じないは、銃を手にとって判断して欲しい。

用紙の裏には少女の居所と思われる住所が明記されている。

ガルネオは顔を上げた。黙って手紙をトロツキオに渡す。

アタツシケースに手をつ突っ込んだガルネオの横で、手紙を読み終えたトロツキオは声を上げる。

当然、生粋のイタリア語で。

「マジかよ。未来からだなんて信じられん」

トロツキオは、身震いをして天に向って祈りだす。

ガルネオは金の棒を1つ摘まんで持ち上げた。太陽の光りを反射して輝く金の棒は、ガルネオの手で煌^{きらめ}いている指輪といい勝負だ。

しかし、引っ張り上げられ全身を現した金色に輝くものは、S & WM39にそっくりの物騒な銃だった。表面が全て金色のため、見た目はおもちゃ屋で売っているプラスチックの銃と変わらない。持

った時の重量も軽過ぎる。

「これは本当にレーザー銃なのか？」

ガルネオは銃口をプールの女神像に向けて、照準を合わせた。引き金を引く。

レーザー銃はチューンという音のあと、銃口から赤い光線が飛び出す。

赤い光線は女神像に当たり、女神像の水瓶に直径10ミリの穴が開く。穴からは勢いのない水がこぼれ壺の表面を伝って雫^{しずく}となって下に落ちていく。

撃ったあとの反動は全くない。撃った時の衝撃で手が痺^{しび}れたりもしない。

姿形はS&WM39。銃口から飛び出るのはレーザー光線という不釣り合いなものが、真正正銘のレーザー銃なのだ。

トロツキオは祈るのをやめて、撃たれた水瓶を見ている。

ガルネオは小走りで女神像の所へ行き、水瓶に開いた穴を見た。

穴の入り口は焦げており、反対側にまで貫通している。反対側の穴も、もちろん焦げている。

ガルネオは両手で金色の銃を持つ。太陽光を浴びて神々しく輝く金色のレーザー銃。

「これが未来の銃。なぜだか分かんが、未来の奴が俺を助けるために届けてくれた、金のレーザー銃」

ガルネオは未来人に選ばれたのだ。少なくともガルネオは、自身を島の救世主だと思っている。事の次第を他界した母親に伝えるために、力と恐怖の象徴である金色のレーザー銃を空に掲げる。^{かが}そして大声で叫んだ。

「マンマ・ミーン！！！！」

と。

9：青色の水

2008年。4月半ば。

日本の空は今日も晴れていた。

その日本のほぼ真ん中に、加藤知子^{かとうちもこ}は住んでいる。

場所は岐阜県。

関が原の戦いで加藤清正が武勇をあげた地域として有名である。

そのためなのかは分らないが、岐阜県がある東海地方は実に加藤姓が多い。

知子は10歳になるまでに、家族親類縁者、血の繋がらない者も含めて、いろんな加藤さんを見て育った。

テレビ番組でも、俳優の加藤さん、医師の加藤さん、スポーツ選手の加藤さん、と様々な著名人^{さまざま}を眺めてきたから、それぞれの加藤さんがどんな人なのか自然と頭に入っている。

そんな毎日を過ごしている知子は、大人になったある日、自分がノーベル物理学賞を受賞する加藤さんになるなんて全く思っていなかった。

ある男に出会うまでは。

知子の一日は、納豆をかき混ぜる事から始まる。

箸もお椀も家族揃って同じ柄。どれが自分のものなんて決まっていない。

おかずはイワシの煮付け。昨日の夕飯の残り。

その隣はハウレン草のお浸し。スーパーの見切り品で母が買ってきたもの。

味噌汁はワカメが入った赤出汁。家計に余裕があるとタマネギが加わる。

朝食のメニューを見ても、とてもノーベル物理学賞を受賞するほど、脳に栄養がいつているようには思えない。

知子は朝食を終え、歯磨きを済ませて学校へ出かける。

背負っているランドセルは、従姉妹のお下がり。

知子の父は、加藤姓の親戚縁者がいっぱいいるので、服でも勉強机でもゲームでもお下がりが知子に回ってくるのだ。

お陰でおこずかいを使わずに済むという利点はあるが、友達と並んで歩く時、傷が多い自分のランドセルが、まだ艶が残っている友達のランドセルの横に並ぶのは恥ずかしい。親に新品を買ってもらえる友達が羨ましいとさえ思う。でも、知子が卑屈になるのは短い間だけ。教室でクラスの仲間と遊んでしまえばなんてことはない。

授業中は至って普通。知子が優等生という訳でもない。読めない漢字もあるし、計算だって間違える。理科の実験なんて男子に任せ

つきり。こうして知子の1日の学校生活は過ぎていく。

下校も決まった時間に帰る。塾には通っていないので寄らない。

一緒に帰る友達は2人。一人は安田佳枝。やすたよしえ 同じクラスだが学校の近くに家があるので、すぐに別れてしまう。もう一人は山田美里。やまだみさと クラスが同じだったのは1年生の時だけ。帰る方角が同じなのでクラスが違ってもずっと一緒に帰っている。

美里はフリルのついた服を好んで着る。今日はシャツの袖口とスカートの裾に白いフリルがついている。すそ

「体育のなわとび嫌い。50回飛んだら、足がだるくなっちゃった。明日筋肉痛になっちゃう」

長い髪。手足の細い美里はお嬢様タイプ。4年1組の美里のクラスは体育でなわとびをしたようだ。

「それ最悪。2組はまだ跳び箱だから、なわとびの授業になったら私も筋肉痛だ。イヤだあー」

知子は4年2組のようだ。ショートボブにブラウスとミニスカートを着ている姿は普通の女の子に見える。

帰り道の会話はもっぱら授業内容の情報交換。

知子は美里との会話を楽しみながら、青葉に紛れて咲いている遅咲きの里桜の下を歩いて行く。

通り過ぎる家は2階の一戸建てが多い。たまに畑や田んぼもある。

少し視線を彼方に向ければ、河の堤防がありその上で犬の散歩をしている人が見える。都市近郊にありがちな風景だ。

そして、知子が美里と別れたあとにたどり着く自分の家は、庭付き平屋の借家だったりする。3LDK。知子は一人っ子。自分専用の部屋は無い。

知子は、いつも何事もなく我が家へたどり着くのに、今日に限っては、自宅まで残り約100メートルという所で呼び止められた。

若い男に。

「あの、すみません」

後ろから声を掛けられて、知子は振り返る。

知子の目に一番に飛び込んできたのは、見上げるほどに、そう今までに見た背の高い人よりずっと高いだろうと思う青年の姿だった。

知子の脳内にある「ギネスブック知子版」の記録が更新されデータが書き替えられている間、青年を見上げている知子の口がゆっくりと開いていく。

次に知子の目に入っただのは、青年の青い瞳。知子は青年の青い目をじっと見る。

知子は、この青色をどこかで見た事があると思い、それがいつで、どういうものだったのか、記憶の底を探っていく。

そう、あれは白い筆洗い箱の中の、青色の水。青い絵の具がつい

た絵筆を一番最初に洗った時のように、青色が水に溶け込んで、でも水は少し透きとおっていて筆洗い箱の底がちょこっただけ見える。青年の青い瞳は、そんな青い水のようにだ。

10：王子様

生まれて初めて生で見た外国人。知子の開いた口は空気を吸い込む。

青年は、動かなくなった知子を見て、困った表情をしながら持っていたメモ用紙を知子に向けた。

「道に迷ってしまつて。この近くだと思っただけで分かるかな？」

青い目の青年の口から出た言葉は、外国語訛りがいこくごなま無しの日本語。

日本語をしゃべる外国人が出たあゝ、と心の中で叫び口で呼吸をしながら驚いている知子は、目の前に出されたメモ用紙を見た時に口が閉じた。

メモに書かれた地図の下に住所が日本語で書いてある。住所から矢印が伸びて地図の画をさし示している。

地図が示している場所は知子が住んでいる場所だった。

「あ、私んち」

言ってから知子は気づく。

「でも番地が違う。それ、うちの隣だ」

知子の心の中に疑問が浮かぶ。この外国人は、なんでうちの隣に行きたいのか？と。

疑問を抱きつつ、とりあえず知子は素直に教えた。指をさして。

「あそこだよ。離れてるけど見えるでしょ」

約100メートル離れた先を、あそこと言われただけで分かるほど、青年はこの土地勘がないようで、知子が指さした場所を探しているのか、遠くを眺めて頭が揺れている。

知子にもそれが伝わり、

「私も行くから一緒に行けばいいよ」

知子はランドセルを揺らして歩き出した。

少し歩いてから、知子は青年がついて来ているか振り返って、青年の存在を確かめる。

知子と目が合った青年は足を少し早めて知子の隣に並んだ。

会話はなく、でも知子は隣を気にして横目でチラリチラリと青年を見ながら歩く。

青年の頭髮は黒い。肌の色は、日焼けの違いはあるものの、ほぼ知子の肌と同じ色。顔もアジア系。目が青いところを除けば、背の高い日本人といった印象だ。

髪型は耳たぶが見えるショートヘア。カジュアルなシャツに綿スボン。その上に春用の上着を着ている。

知子の頭の中をジャニーズの青年が通り過ぎて行く。

どのジャニーズの青年も一部分が似ているが、なんかちょっと違う。

じゃあ、誰なのか？

青年の正体は謎のまま、知子が次に引っ張り出してきたのがデイズニールランドで見た王子様だった。

知子の脳の中で、隣を歩く青年の姿が、デイズニールランドで踊っていた王子と重なっていく。

眠り姫の王子様。シンデレラ姫の王子様。白雪姫の王子様。

ここで知子の脳内の画像が停止した。そして結論にたどり着く。

異国情緒を漂わせて歩く青年は、白雪姫の王子様みたいだと。

急に知子の足取りが淑やかになる。口から出る言葉はいつもと同じだが、話し方も上品になってくる。

「もう少しで地図の所に行けるから」

「そう、よかった。道を聞いたのが近くに住んでいる君で幸運だったよ」

青年が白い歯を見せて笑顔で言った瞬間、10歳の知子の胸に恋の矢が刺さった。

そして忘れていた疑問が色の濃いものとなってまた浮上する。な
んでうちの隣に行きたいのか？

好きな男の事はどんな些細な事でも知りたい。

10歳の知子は、不審者かもしれない青年に、何の疑いも無く聞
いてしまう。

「うちの隣になんの用なの？」

「ああ、そうか。そうだったね」

青年は思い出したように言う。

「僕は引っ越して来たんだ」

青年の答えはよくある平凡なものだった。

だが、知子は心の中で飛び上がるほど喜ぶ。知子の喜びは自宅の
門に到着してからも続く。知子は人差し指で青年の家を教える。

「あのね。地図の番地の家なんだけど、右側の家で、手前の家じゃ
なくて、あっちの家だから」

別れ際なのにまだ王子と話せるのがとっても嬉しかったりする。

「うん、右側のあっちの家だね。分かった」

青年は知子の家の門の前を通って行く。青年の家は知子の自宅を
通り越した次の家だ。青年は隣の家の門の前で手を振って知子に道

案内のお礼とさよならを言った。

知子も手を振って答える。

「またね」

青年への「またね」は社交辞令無しの本音。下心も大いにあったりする。

11：極上の中年紳士

知子が機嫌良くスキップして玄関に入ると、玄関の中にまた別の男が立っていた。

知子の母は玄関先で正座をして男と話していたが、帰って来た知子に気づいて、視線を知子に向けた。

「あ、おかえり」

母は早速目の前にいる男に言う。

「この子は、うちの娘の知子です」

突然でも紹介されたら必ずしなければならない事がある。

知子は母に躡^つけられたとおりにお辞儀をする。

「こんにちは」

「こんにちは」

振り返って挨拶をした男も目が青かった。しかも青年と同じ日本語。

身長も先ほどの青年と同じくらい高い。年齢は自分の親より年上そうだが、腹は出ていなくてスマート。綿ズボンをはいてカッターシャツをラフに着こなしている姿は、青い目が手伝って極上の中年紳士の雰囲気漂っている。

もう知子は先ほどの青年で免疫が^{めんえき}できているので、目の青い人を見ても驚きはしないが、代わりに心の中に淡い期待が^{ふく}膨れあがる。

その知子の期待に母が答える。

「知子、こちらはお隣に引越してみえた相馬^{そうま}さん」

みえたと言うのは、東海地方特有の方言で、いらっしゃったと同格の意味になる。

母が正座している横にきちんと包装された箱がある。中味はタオルだろうか。

相馬は引越しの挨拶に来たようだ。

母は更に続けて説明をしていく。

「相馬さんの奥様は、おばあちゃんの看病で実家に行ってみえて、今は息子さんと二人暮らしなんですって」

「息子と二人暮らしといっても、妻の母が入れる老人ホームが見つかるまでの間だけです」

相馬は知子に説明をしてから、知子の母に向き直って頭を下げた。

「妻が不在で何かとご迷惑をお掛けすると思いますが、どうか宜しくお願い致します」

「こちらこそ宜しく」と母が頭を下げているうちに、知子は靴を脱

いで上にあがった。それでも相馬の身長のほうが高い。髪の色は青年より茶色がかっている。顔も日本人離れしていて、明らかに外国人だと分かる。

相馬は頭をあげて「バイバイ」と知子に手を振ってから玄関を出て行った。

母は立ち上がりながら知子に言う。

「ハーフなんですって」

「ハーフ？」

「あの人のお母さんがイタリア人なの。お父さんは日本人。国籍も日本。それで青い目なのに、苗字が相馬なのよ」

知子はランドセルを下ろすのも忘れて、隣人の話を始めた母にくっついて、台所まで歩いて行く。

「ねえ、そうまさんの名前は？」

母はハッと気づいた表情をする。

「あ、聞いてないわ。もしかするとカルロとか、サルヴァトーレとか、向こうの国の名前かもしれないわね」

母は先ほどの中年紳士の事を言っているのだが、知子の頭には青年の姿しかない。

白馬に跨^{またが}った白雪姫の王子様。名前は相馬カルロ。もしくは相馬

サルヴァトーレ。

知子は、あの青年に合わない名前だと思った。

青年の名前が分からないまま、知子の妄想は膨らんでいく。

白雪姫の姿をした知子は、身に降りかかる不幸にもめげず7人の小人と健気に暮らしていくが、悪い魔女に毒を飲まされて知子姫は倒れてしまう。

そこに王子の姿をした青年カルロが登場。知子姫はカルロ王子に助けられ、カルロ王子と見つめ合い、手を取り合った時、

「知子、宿題は？」

母の声が聞こえ、知子は現実に取り戻された。台所に立っている知子の目に、使い古されて表面が茶色に変色した冷蔵庫が映る。そう、ここは借家。7人の小人もいない。

青年王子が引っ越した隣の家も、同じ大家が管理している借家。やっぱり相馬家にも使い古された冷蔵庫があるのだろうか。

姫でもないだたの小学4年生の知子は、家に帰って来たら宿題をやらなければならない。知子は母に視線を移す。

「ある。漢字を10個、暗記するのだけ」

「だったら、そんな所に突っ立ってないで、早く宿題をやりなさい」

「はぁーい」

知子は暖簾のれんを潜って隣の部屋へ移動した。

テレビとちゃぶ台と、背の低い本棚がある部屋。

知子はランドセルを下ろして、中から国語の教科書を出してちゃぶ台の上で開く。

畳の上にある新聞紙の近くにあった折り込み広告の裏を見て、何も印刷されていないのを取り出すと、そこに漢字を書きながら暗記を始めた。

漢字の暗記は集中すれば2、3回書いただけで頭に入ってしまう。この頃からノーベル物理学者としての素質があつたのかもしれない。

30分もしないうちに漢字を10個覚えてしまった知子は、書き込まれた漢字の隣にひらがなで「そうま」と書いた。

また知子の脳内に疑問が浮かぶ。「そうま」は漢字でどう書くんだろう？ と。

とりあえず本棚の辞書を引っ張り出して調べてみる。

そうま【相馬】福島県北東部の市。姓氏のひとつ。

辞書とは便利なものだ。

そして知子は広告の裏に「相馬」と書き込んで青年の苗字も暗記してしまった。

12：重要な事

次の日。

岐阜県の空は、少し曇っていた。

4月の半ばなので、曇っていても暖かい。

朝、知子は学校へ行くために家の門を出た。ちょうど隣の家でも門が開く音がする。

相馬さんちの門の音が、である。

知子の足は止まり、膨れ上がってくる期待を胸に、知子は隣の家の門を見た。

知子の期待通り、青年が門を閉めているところだった。

手にはビジネスバッグ。服装はネクタイをしたスーツ姿。ショートヘアの頭髮は整髪剤をつけているのか艶々^{つやつや}としている。

知子の王子様はビジネスマンのようだ。

青年は、知子に気づいて近づいてきた。

「おはよ。昨日は有難う。助かったよ」

憧れの青年を見上げている知子は、昨日より大人っぽい姿の青年を前にして、緊張して動かなくなった。

それでも出会った最初は必ずやらなければならない事がある。

「おはよう」

知子は朝の挨拶をした。

青年は知子の隣に並び、ランドセルを背負った知子を見下ろす。

「これから学校みたいだね。行く方向も僕と同じみたいだから、途中で一緒にいこうか？」

青年王子からの願ってもない申し込みである。

「うん」

知子は一緒に歩き出した。

今日の青年からはいい香りがする。知子の鼻の穴は大きく開き、青年の香りを何回も吸い込む。

10歳の知子の頭は、デオドラントという言葉は浮かばない。香水か、それとも整髪剤の香りか。

しかし、いい香りに酔っている場合ではない。少し先には友達的美里が待っている。そのほかの近所の子供もいる。

朝の登校は所定の場所に集合してみんなで学校へ行かなければならない。

青年と二人つきりで歩ける時間は制限つきなのだ。

知子は歩きながら青年を見上げた。

「名前なんていうの？」

集合場所に着く前にこれだけは聞いておかなければならない。

今の知子にとって青年の名前を聞く事は、自分の将来に繋がる、
そう思うほど重要な事になっている。

「僕は、智」

「さとる……さん」

知子の同級生にも同じ名前の男子がいるので一応名前の文字も分かるが、王子はイタリアの混血児なので名前がイタリア文字なのか漢字なのか聞いておかなければならない。

「漢字？」

「うん、漢字。知るの下に日付の日がつく漢字だよ」

「そうなんだ」

4年生の知子はまだ習っていない漢字だが、智の説明でなんとなく想像がつく。

カルロでもサルヴァトーレでもなかったのだ。

しかし、悠長に漢字の想像をしている場合ではない。足は進み集合場所に近づきつつある。

知子は次の質問をする。

「彼女いるの？」

これが一番重要なかもしれない。

智は遠くを眺めるようにして言う。

「今はいない。付き合った人は何人かいるけど」

知子は心の中でガツポーズをとった。これで知子の恋心に勢いがつく。もう門で智に出会った時の緊張感はない。知子の質問は次々と続く。

「何歳なの？」

「20歳」

「身長はなんセンチ？」

「185。でも、測ったの1年前だから変わっているかもしれないけど」

「なんの仕事をしてるの？」

「それは……」

智が答えようとした時、美里の知子を呼ぶ声がした。

知子と智は、呼ばれた方角を見る。

そこは登校する時の集場所。美里は知子に手を振っている。

時の流れは無情なもので、知子の緊張がほぐれてやっと会話がで
きるようになった時に、知子は集場所に到着してしまったのだ。

13：おばちゃんたちの日常会話

美里が知子のところに走ってくる。

「知ちゃん、おはよう」

美里は今日もかわいいフリルがついた服を着ている。そのかわい
い姿で智にお辞儀をする。

「おはようございます」

「おはよ」

当然、智は美里にも、王子の笑顔で挨拶をする。

例え相手が恋のライバルだとしても、出会ったら必ずしなければ
ならない事がある。

「美里ちゃん、おはよう」

知子は、笑顔で智を見上げている美里に挨拶をした。

智は体の向きを変えて言う。

「じゃあ、僕はこれで。知子さん、またね」

「うん、またね」

智は知子に手を振り、知子も手を振って智が歩いて行くのを見送

った。

智の後ろ姿が遠くなってから、美里が瞳をキラキラとさせて知子に詰め寄る。

「あの人、誰？」

知子は、やっぱり美里は恋のライバルだと思いながら答える。

「隣に引っ越してきたお兄さん」

知子は、恋のライバルに青年の名前は教えない。

それでも美里は興奮する。

「あの人、カッコイイ。彼女いるの？」

知子はそれも教えたくないと思いながら答える。

「付き合っていた人はいるらしいけど、詳しくは知らない」

「やっぱり元カノがいるよね。あんなにカッコイイんだもん」

美里はため息混じりで、離れて小さくなっていく智の背中を見つめながら言った。

「どこの国の人？」

知子は、やっぱり青い目に気づくよね、と思いながら答える。

「日本人。あの人のパパがハーフなんだって」

「じゃあ、あのクォーターね」

姉がいる美里は、その姉の影響もあり、知子よりませている。

「どこに勤めてる人？」

「知らない」

従って男を見る目も知子とは違う。

「年は？」

「20って言ってた」

「思ったより年上なんだ」

これで美里の興奮はなくなり、美里は静かになった。

「出発するぞー」

6年生のまとめ役の男子が、登校するために周りで遊んでいるみんなを呼び集める。

知子は美里と歩きながら、なぜ美里が静かになったのか、さり気なく聞いてみた。

「なんで年上だとダメなの？」

「だって、私が20になったら、あの人は30で。私が30になったら、あの40だよ。今はカッコイイかもしれないけど、年を取ったら10歳離れたオヤジになるんだよ。ダメに決まってるじゃない」

ませている美里の考えは現実的だ。

それでも知子は、智が40になった姿を想像する。智が40になった姿は容易に想像できる。玄関で会った智のパパを思い浮かべればいい。智が40になったら極上の紳士になる可能性が高い。

知子はメンデルの法則を用いて、智の姿が将来極上の紳士になるという結論に至る。なのだが、10歳の知子はメンデルの法則を知らない。

なぜ知子はメンデルの法則を用いたのか？ それは「子さんはお母さん似、夫さんはお父さん似」といった、おばちゃんたちの日常会話のお陰だったりする。

無意識に学者の法則を用いる知子。姉の影響でませた考えを持つ美里。

考え方の違う二人が、ずっと先の未来まで親友としてこの三次元世界で一緒に存在できるのも、相対性理論の1つなのかもしれない。

14:どう書くの？

数日たったある日。

岐阜県の空は、どんより曇っていた。

多少寒さは感じるが、長袖を着ていれば寒さは防げる。

知子は授業が終わったあと、美里と一緒に同じクラスの安田佳枝の家に上がりこんで遊んでいた。

宿題はもう済ませてある。

遊ぶといってもただの雑談で、話題は知子の隣に引っ越してきた相馬智についてだった。

安田佳枝は、左右にある肩につくつかないくらいのお下げを揺らしながら話す。

「目の青い人、学校の門の前も通って行くよ。あの人、カッコイイよね」

佳枝の服装は花柄が多い。母親の勧めらしく佳枝も好んで着ている。下はスカートだったりズボンだったりと日によって違う。

今日は裾が膝下まであるスカートをはいている。

隣に座る美里はきょうもフリルのついた服を着ている。長い髪が顔の前にこないように、頭につけているピンがかわいい。

「20歳なんだって」

美里の説明に佳枝はちよつと驚く。

「大きい人だから30かと思った」

「近くで見ると童顔だから10代に見えるって。会話も子供っぽかったよ」

美里はそんなに智と話していないのだが、さも知っているように話す。

佳枝は興味津々に聞く。

「え、話した事あるの？」

「うん、あるよ。だって、知子の隣に引っ越して来た人だから。知子、目の青い人と一緒に歩いて集合場所に来るもん。ね、知子？」

王子智の話は美里のペースで進んでいる。

美里と佳枝の二人から見られ、二人の目がいろいろ知りたがっているようで、知子は身構えながらうなずいた。

「うん。私が会ったのは2、3日前だけど、引っ越してきたのは1週間くらい前って、ママが言ってた」

今日、佳枝の家に招かれたのは、智の情報を聞き出すのが目的だったのかと、知子は気づいた。

その作戦を立てたのは美里だろうか。

佳枝は、智に興味があるようで、早速知子に質問を始める。

「名前知ってるの？」

「うん、相馬さん」

「どう書くの？」

佳枝に聞かれて、知子は自分のノートの端に漢字で書いて見せた。

佳枝は静かに驚く。

「変わった名前だね。初めて見た」

美里も「相馬」の文字をじっと見て言う。

「竜馬は知ってるけど、相馬は初めてだわ」

竜馬と言われて、知子は気づく。

「あ、違う違う。相馬はね苗字。名前は……」

知子は迷った。青い目の王子の個人情報をも、目の前のライバル姫2人に教えるべきかどうか。

「まだ知らない」

知子は教えなかった。

佳枝は考える。

「じゃあ、名前はなんていうんだろ。リチャードかな。ウィリアムかな」

佳枝は、知子の母と同じ事を考えるが、口から出てくるのはイギリス王子の名前だったりする。

それを知らない知子は、リチャードとウィリアムの名前は智に似合っていて恰好いいと心の中で喜び、言った佳枝を博識だと思い尊敬した。

イギリス王子の事はニュース番組でたまに放送されているので、佳枝が本当に博識なのかは分からないが、佳枝は学年で上位に入るほど成績がいい。

佳枝の家で智中心の雑談を楽しんだ知子は、夕方になった事もあり、帰る事にした。

帰り道にする美里との会話は、美里の姉からの情報ということもあり、聞いているだけでも楽しい。

「お姉ちゃんから聞いたんだけど、今の生徒会長、彼女がいるんだって」

「本当なの、それ？」

「うん、5年1組の女子だって」

「へえ」

ただし、情報の信憑性は低い。

もっぱら学校の事を話し、美里と別れたあとは、一人で自宅まで歩く。

その距離、ご存知のとおり約100メートル。

知子の家は、帰りながら眺めると右手側になり、智の家より手前にある。

智が好きな事もあって、自分の家より奥にある智の家に視線がいつてしまう。

借家同士の境界線はコンクリートの塀でできている。塀は知子の背丈より低く、知子は相馬家の庭を覗き見る事ができる。

相馬家の庭はその塀に沿ってツツジの木が植えられている。ツツジは以前住んでいた人の趣味によるものだ。

約100メートル離れていても、知子の目には相馬家のツツジの木がちゃんと見える。

知子が智の家を見ながら歩いていると、智の家の玄関前にある庭で、人影が動いている事に気づいた。

ツツジの木の間に見え隠れしている茶髪の頭は、智のパパのようだ。

知子は、もしかするとパパと一緒に智がいるかもしれないと思い、足を早めた。

智のパパは軍手つけて、立ったり座ったりしながら何かをしている。

何をしているのか気になるし、智にも会いたい。しかし、それだけの理由で相馬宅へ行き、いきなり敷地内に踏み入っては変に思われてしまう。

知子はとりあえず自宅へ行く事にした。相馬家の家も庭も見ずに、全く何も気づかない振りをして、自宅の門を開けた。

15：王様

「知子さん、おかえり」

低音の聲がする。智のパパの声だ。

どうやって声を掛けようかと考えていた知子にとっては、嬉しい低音の響きだ。

さんづけで呼ばれるのも、お嬢様扱いを受けているようで心地よい。

知子としては智がいなくて残念だが、極上の紳士、智のパパと話すのもいいと思い、笑顔で返した。

「ただいま」

さっそく知子は堀越しから相馬家の庭を覗く。

智のパパが何をしているのか、知子としては興味があるからだ。

「おじさん、何やってるの？」

しかし、智のパパの次の言葉は、知子が望んでいたものではなかった。

「おじさんか……」

しかも智のパパは、あまり嬉しそうじゃない。

知子は今になって気づく。おじさんと呼んではいけなかったと。

知子が焦ってどうしようかと考えていると、智のパパは目尻を下げて、急ににこやかな表情をして言った。

「知子さん。私の名前は、相馬・ジョゼフ・圭介です。圭介さんと呼んで下さい」

智のパパは、智より名前が1つ多くついていた。

「圭介さん……」

今度の知子は、名前が1つ多い圭介に驚いて、次にの言葉が浮かばない。

知子が困っていると、圭介は庭に咲いていたパンジーの花を1つ千切って、堀越しに知子に手渡した。

「この花は、知子さんのように綺麗でかわいく咲いているので、差し上げます。お近づきのしるしです」

知子はパンジーの花を受け取る。

「ありがとう」

知子の手にオレンジ色のパンジーが渡る。

極上の紳士から花を手渡された知子は、お姫様気分を満喫し有頂天になる。

知子が笑顔になったので、圭介はしゃがんで庭の土をいじりだした。

圭介は、庭のパンジーの手入れをしていたようだ。

知子は塀に身を乗り出して聞く。

「どうして圭介さんの名前は、ジョゼフがあるの？」

「それは、私の母がイタリア人だからです。母は私を産んだ時ジョゼフとつけたかった。日本人の父は圭介とつけたかった。だから、私の名前は相馬・ジョゼフ・圭介なのです」

圭介は、いじっていた土を手早く均す。なら

「知子さん、ちょっと待っていて下さい」

スコップなどの道具を片付けて、圭介は軍手から手を抜く。軍手を振って土を落として、道具の上に置いてから、知子に向き直った。

圭介は、智と同じ青い瞳で知子を見る。

圭介の目尻にシワがあるが、それでも圭介は極上の紳士で日本人離れた品のある顔立ちをしている。

差し詰め圭介は、王様だろうか。

「知子さん、もう少しだけ待っていて下さい」

圭介はそう言うと、家の中へ入って行った。

なぜ待っていないなければならないのだろうか？

予想外の展開に、知子は大きな？マークを頭の中に浮かべていると、圭介が皿を持って家から出て来た。

皿の上にはカットされたマーブルケーキがあり、埃が被らないようにラップがかけてある。

「私が焼いたチョコのマーブルケーキです。おうちの人と食べて下さい」

知子にとって思いがけない収穫だった。

「ありがとう。おじつ、圭介さん」

今後は絶対におじさんと呼んだらいけないと、知子は思った。

圭介からまた何かをもらうために、そして智王子に会うために。

「圭介さん、ケーキ作れるんだ。凄い。私のママ、作れないよ」

子供は、恨みも罪悪感も無く、自分の親の無能さを隣人に伝える時がある。その親に育てられた自分の印象をも悪くするとも知らずに。

圭介は少し笑い間を取ってから説明をする。

「妻は今おばあちゃんの所にいるから、料理するのは私が智にな

るのです」

だからといって、ケーキは普通作れないと知子は思った。

圭介と別れ、圭介が家に入るのを見送ってから、知子は自宅に入って母親にマーブルケーキを渡した。

母は皿を動かして、マーブルケーキを上から横から眺める。

「まあ。これを相馬さんが」

母が驚くのも無理はない。普通、日本人の男はケーキを焼かないからだ。

「もしかして、そのお花も頂いたの？」

「うん」

「もらってばかりで悪いからお礼ついでに何かお返しをしないといけないわね」

知子がパンジーを適当なコップに生けているうちに、母はケーキの上のラップを捲^{めく}る。

「夕食前だけど、これ食べてみようか？」

「うん」

知子は母の横に並びマーブルケーキを見る。

皿の上にある、カステラのように四角いケーキ。卵色のスポンジ部分にチョコレート色の渦がある。

母親は真っ先にケーキを食べる。

「うん、おいしい。相馬さん、ケーキ焼くの上手ね」

知子もケーキを食べる。チョコの風味があり思った以上にしつとりとしていておいしい。

「うん、おいしい」

キング圭介は、どうやってこのケーキを作ったのだろうか。

知子はオレンジ色のパンジーを見ながら、圭介のケーキを作る姿を想像しているうちに、ある事を思い出した。

「そういえば、ママ。相馬さん、相馬・ジョゼフ・圭介っていうんだって」

「ジョゼフなのね。なんて恰好いいのかしら」

母は、マーブルケーキに続いて、名前の収穫にも喜ぶ。

きっと今の母の心にはジョゼフしかないだろう。

知子は、そんな母の姿を見て、パパがかわいそうだ、と思った。

こうして、朝は智と一緒に出かけ、帰ってくれば圭介が庭にいたりする。

知子は、青い目の隣人とそんな毎日を送るようになり、そして5
月がやってきた。

16：上機嫌の鼻歌

薫風くんぷうがすり抜けていく季節。日本では5月を皐月さつきと呼ぶ。五月と書いてさつきと呼ぶ時もある。

5月2日、金曜日。

岐阜県の空は、今日も晴れていた。

南の方角。空の彼方には、入道雲らしき姿がある。夏は間近に迫っているようだ。

知子は汗がつたう頬を赤らめて帰って来た。今日も圭介が作ったおやつを手を持っている。

「ママ、またくれた。梨のパイだって」

母は、知子の汗を見て言う。

「また庭でジョゼフさんとしゃべっていたの？」

「うん」

「知ちゃんジョゼフさんと仲がいいわね」

母は言うが、知子としては智と仲良くなりたいと思っている。

「いつもいつも、もらってばかりで悪いから、たまにはうちの夕食に招待しようか」

母は台所の洗い場に手を入れて、そこから毛ガニを持ち上げて知子に見せた。

「ママ、凄い。毛ガニだ」

母も母なりに頑張って作戦を考えていたようだ。

母が狙っているのは、圭介か、それとも智か、もしかすると両方なのか。10歳の知子には知る由もない。

母はいつもより多めの野菜を刻みながら言う。

「もうね、ジョゼフさんには、今夜の夕食にご招待するってお話しであるの」

策略家の母は、知子より先に圭介と会話をしていたようだ。

「知子には料理の準備を手伝って欲しいから、早く宿題を片付けね」

「はぁーい」

知子にとつても、2人のライバル姫から邪魔されずに、智王子と一緒にいられる絶好のチャンス。知子は喜び勇んで隣の部屋に駆け込んだ。ランドセルを置いて、いつものちゃぶ台に宿題を広げる。

今日の宿題は算数。授業で習ったとおりに割り算の筆算を解いていく。いつもはのんびりやる宿題も今日に限っては早い。応用問題もあっさり解いて、知子は母がいる台所へ行く。

知子が母の隣に並んで立った時、母親は一番大きな鍋を出して毛ガニを煮込んでいた。知子の母もヤル気満々のようである。

知子もヤル気満々で、母の手伝いをしてテーブルに器を並べていく。

そうこうしているうちに時は流れ、知子の父が帰って来た。

「ただいま」

「パパ、おかえり」

父はごく普通のサラリーマン。某有名会社の経理事務をしている。

「あなた、おかえり」

母も言う。

父は首元のネクタイを緩めながら、テーブルに並べられた器の数が、いつもと違う事に気づいた。

「なんだ？ 子供の日のお祝いにしては、ちょっと早いんじゃないのか？」

母はにこやかな表情で言う。

「今日、お隣の相馬さんをご招待したのよ」

「は？ なんで？」

父は何も知らなかったようだ。父の存在は忘れられていたのか。

「今日、姉からの毛ガニが届いたの。6匹入っていて、ちょうどいいから、お隣も呼ぼうと思って。ほらだって、知子がいつもお世話になっているじゃない」

姉とは、北陸へ嫁に行った母の实の姉の事である。

「確かにそうだが……」

父は、知子の事でなぜ野郎2人をうちに招かなければならいのか、と不服そうな表情をしている。

母は父の背中をポンと押す。

「パパの大好きなお酒も買ってきてあるの。明日は土曜でパパの会社も休みだから、お隣さんとどれだけ飲んでも構わないわよ。だから、早く着替えてきて」

「そうか　じゃあ、軽くシャワーでも浴びて汗を落とすか」

父は、酒飲み友達が増えるチャンスかもと、気が変わり、喜んで隣の部屋に荷物を置きに行った。酒が鰯腹たうぶく飲めるなら、野郎2人が増えるくらいどうって事ないらしい。

父が風呂に入っている間に、母が作る料理が順番にテーブルに並んでいく。

料理を並べているのは知子である。

茹で上がった毛ガニ。サラダ。酒のつまみ。どれも彩りよく並べられていて、見ているだけで食欲がそそられてくる。それに付け加え、茹でた毛ガニのうまそうな匂いがするから腹の虫が騒ぎ出して、それを宥めて諭すのが大変だ。

しばらくして、風呂場から父の上機嫌の鼻歌が聞こえてくる。

母は、その鼻歌に耳を傾けながら知子に言った。

「知ちゃん。パパ、そろそろお風呂から出てくるみたいだから、ジヨゼフさんたちを呼んできてくれる？」

「はぁーい」

知子は手伝いの手を止めて、玄関へ走って行く。途中、鏡を見て髪型と服の乱れがないか確かめる。チェックOK。知子は玄関を出て隣へ走った。

塀から覗く事しかできなかった相馬家の庭に入る。圭介が手入れしているパンジーが綺麗に咲いている。

知子はパンジーを横切って相馬家の呼び鈴を押した。

「はい」

ドアの向こうで圭介の声がする。

例えば相手がドアの向こうにいても言わなければならない事がある。

「こんばんわ」

知子は服の乱れを直しながら声を出した。

「知子さん、入っただい」

圭介の声だ。圭介の招きに応じて、知子は中に入った。入ってすぐの左にある棚の上に、細工が施された綺麗なガラスの置物がある。隣に置いてあるポプリからはよい香りもする。

奥からキング圭介が歩いて来た。極上の紳士は、今日も綿ズボンにカッターシャツをラフに着こなしていて恰好いい。

「息子が今準備をしているから待っててね」

智は家に帰ってきているようだ。

「うん」

今日の智は、どんな服装だろうか。

17：パズル

最近は朝しか会っていないのでビジネススーツ姿の智しか知らない。

知子がお行儀良く待っていると、その智が廊下に顔を出した。

「父さん、ごめん。今シャワーを浴びたばかりだから先に行つてくれる？」

「智、まだ準備をしていないのか」

圭介が体の向きを変えて智の所へ歩いて行く。

智王子は肩にバスタオルをかけて、トランクス一枚の姿で廊下に現れた。

智の胸の筋肉は盛り上がっている。腹も線が縦横に入って肉が盛り上がりはつきりと腹筋だと分かる。肩についている筋肉も凄い。腕も足もスポーツ選手並みの筋肉がついている。

それでいて、185センチの身長は、智の体型をスマートに見せてしまう。一体何をどうしたらああいう筋肉がつくのだろうか。

10歳の知子でも普通じゃないと分かるほど、智王子は筋肉質でスマートな体型をしていた。

圭介と智は肩を並べて話しているため、なんの話をしているのか、知子の耳まで届いてこない。

知子がつまらなそうに立っていると、圭介が振り返って知子を見た。

「知子さん、智は準備に時間がかかるようなので、私と先に行きましよう」

圭介は歩いて来て、知子がいる玄関に足を下ろした。靴を履く。

「智さんは？」

知子は一番の目的である智の事を聞く。

「髪を乾かして、服を着たら来ると言っていましたので、すぐに来ると思いますよ」

圭介は、知子の手を握る。圭介の手は大きくて温かい。

「智にも、私の母であるイタリア人の血が流れています。イタリアの男は女性を大切にします。身だしなみにも気をつかいます。きっと、知子さんと知子さんのご両親の前では、きちんとしていたいのでしょう」

圭介はウインクをする。

「だから智は、身だしなみに時間をかけているのですね」

知子は圭介のウインクを受けて心のときめきを覚えた。だが智といる時ほどの激しいときめきはない。そう感じながら、知子は圭介と一緒に玄関を出た。

父以外の人と手を繋いで歩くのはちょっと恥ずかしい。しかも夜道で、相手は先ほどウインクをした青い目の極上の紳士ときている。その圭介の青い瞳は街灯の光りを反射して夜に煌く宝石のようだ。

圭介は加藤家の玄関に來ると、知子の手を放した。代わりにドアノブを握り玄関ドアを開ける。

「こんばんは」

母が顔を出す。

「こんばんは、ジョゼフさん。さあ、上がって下さい」

「失礼します」

圭介は加藤宅に上がった。

知子も圭介に続いて家に上がる。

リビングのテーブルには風呂上りの父がいて、座ってビールを飲んでいゐる。

圭介は改めて父に挨拶をする。

「こんばんは、知子さんのパパさん。こうして直接お会いするのは初めてですね。相馬・ジョゼフ・圭介と申します」

父も挨拶をする。

「どうも。知子がいつもお世話になっているそうで」

父は圭介を椅子に案内して座らせ、グラスを渡し、そこにビールを注ぐ。

知子が黙って圭介を見ていると、母が鍋から毛ガニを出しながら言う。

「知ちゃんも立ってないで、座ったら？」

「うん」

知子は圭介の隣に座った。

圭介は父を見てビールが入ったグラスを持ってにこやかに話をしている。

「いえいえ、お世話になったのはこちらのほうでして、道に迷っていた息子を知子さんが案内してくれたのです」

「うちの知子が。そうだったんですか」

父の頭の中で、なぜ野郎2人を家に招かないといけなくなったのか？ の真相を究明するパズルが完成していく。

母は無意識にそのパズルを手伝う。

「それでね、パパ。ジョゼフさんが毎日のように知子に手作りの洋菓子をくださるようになったのよ」

「それはそれは。もらいづめで何のお返しもなく、申し訳なかったですね」

「いえそんな、お返しっていうほど大したものは作ってないんですよ」

嬉しそうに笑う父の前で、圭介は一気にビールを飲み干した。

「おいしい」

「ジョゼフさん、飲める口ですね。だったら、どんどん飲んで下さい」

父は圭介にまたビールを注ぐ。

「パパさんも、飲んで下さい」

圭介も父にビールを注ぐ。

母は圭介に茹で上がった毛ガニを出す。

「姉が送ってくれた毛ガニです。どうぞ遠慮なく食べて下さいね」

「これをお姉さんが。ほう、おいしそうな毛ガニですね」

圭介は毛ガニに手を伸ばした。

大人3人は酒の場で楽しそうにしている。

キング圭介はビールを飲むばかりで、知子に見向きもしない。

知子は仕方なく黙って毛ガニの甲羅を外す。

カニの分解は、母の姉がよくカニを送ってくれるので、幼い頃から一人でできる。

知子は大人3人の会話を聞きながら、甲羅の裏についているカニ味噌を食べた。

カニ味噌はおいしいが、一人で食べているとなんだか味気ない。

母が相馬家を夕食に招待するというので、きつと楽しい夕食になると思っていたが、実際は3人の大人から切り離された、知子にとってはおっぴろげな一人の寂しい夕食時間となっていた。

18：グランプ

毛ガニ。別名オオクリガニ。

全身に剛毛が生えているのは、硬くない甲羅を守るためらしい。

肉食性。天敵はオオカミウオやタコ。

人間以外にも天敵がいるようだ。

毛ガニが主役の夕食は半ば進み、知子の両親と圭介は酒が入って酔っ払っていた。

知子の母は酔った勢いもあり、父の横で話をしながら相馬家の情報収集に躍起になっている。

父は酒飲み友達ができたので嬉しそうにビールを飲んでいる。

圭介は、両親に好意があるようでビールを飲みながらリップサービスに勤しんでいる。

知子は、両親も、キング圭介も話し相手になってくれないので、一人で毛ガニを食べていた。

カニ味噌は食べてしまったので、次は毛ガニの足を折り、足の中にある身を食べようとするが、なかなか上手に食べれない。

いつもは母がカニの足を割ってくれて、カニの身を食べやすくしてくれるのだが、今は圭介との会話に夢中になっていて、知子の毛

ガニの足を割ろうともしない。

知子はあとで母に頼めばいいと思い、サラダに箸^{はし}を伸ばした。

今夜のサラダはスライスポテトのマヨネーズ和え。刻んだハムとスライスしたタマネギが入っていて一応サラダもおいしい。

知子が一人でサラダを突いていると、玄関のドアが静かに開いた。

「こんばんは」

智の声である。

知子は椅子から飛び降りて玄関へ走った。

玄関下にいる智は、それでも知子より背が高い。

「智さん、いらっしやい」

知子は喜んで智を招く。

王子智は風呂上りというのもあって上下同じ柄のスポーツトレーナーを着ていた。

手には大きな皿があり、中には焼けたピザがある。

知子はピザを覗き込んで見る。

「ピザだ」

智は知子のかわいい反応を見て鼻から笑いを漏らす。

「ふふふ。僕がピザの生地を作って焼いたんだよ」

「凄い」

智の手作りは初めて見る。

ベースはトマトソースとチーズ、上にベーコンとオニオンとバジルが載っているシンプルなピザだ。

智は知子にピザを見せながら、靴を脱ぐと中に上がった。

知子は智の横について歩く。

リビングに入って智はもう一度言う。

「こんばんは。夕食にお招き下さり有難うございます」

母は早速鍋から毛ガニを出す。

「智さんいらっしやい。どうぞ座って」

智は母にピザを渡す。

「これ、みなさんで食べて下さい」

「あら、おいしそうなピザ。智さんの手作り？」

「ええ」

智は照れながら返事をする。

「パパ、智さんが焼いたんですって」

「おお、そうか」

「初めまして、知子さんのパパさん」

「初めまして。智君、なんかもらってばかりですまないね」

「いえいえ、あとこれ。父さん」

智はもう片方の手に持っていたビンを圭介に渡した。

「おお。智、あったか。よしよし」

圭介は知子の父にビンのラベルを見せながら言う。

「パパさん。これはグラッパという、イタリアの酒です」

父は太めのビンを珍しそうに見る。

「グラッパ？ 見た事も、聞いた事もないな」

「じゃあ、試しに飲んでみて下さい」

圭介は、父と母にグラッパを振る舞う。

知子はそんな圭介や父と母を見ながら椅子に腰掛けた。

智は知子の隣に座る。

「毛ガニか、おいしそうだね」

「うん、おいしかった」

王子智は知子の相手をしてくれるようだ。

しかし大人とは勝手なもので、やっとできた知子の話し相手を奪おうとする。

「智君も飲まないか？」

父は酔いながら手招きをする。

「もう、パパ。そっちで飲んでてよ」

知子は王子智を守るために、実の父を牽制^{けんせい}する。

智は笑顔で父に答えた。

「いえ。僕、実は酒が飲めないんですよ」

「もうすっかりとした大人じゃないか。そんなはずないだろう」

「いえ、本当に飲めないんですよ。パパさん」

智が断っていると、圭介が間に入った。

「息子が酒が飲めないというのは本当です。だから、パパさんと飲みましょう」

「そうか。なら仕方がないな」

父は圭介がグラスに注いだグラッパをゴクリと喉のどを鳴らして飲んだ。そのあとすぐに咽むせてせきて咳き込む。

「アルコールの度が高くないですか、これ？」

圭介は自分のグラスにグラッパを注ぐ。

「多少高いかもしれませんが。35度くらいありますから」

圭介は平気な顔をしてグラッパをゴクリと飲んだ。

智は知子にピザを手渡す。

「知子さん、今日は元気ないね。何かあったの？」

「ううん。カニが硬くて食べるのが大変だったから疲れただけ」

知子は、智がいなくて寂しかったから元気がないの、と素直に甘えられない。とりあえず智からもらったピザを食べる。

焼けたチーズが香ばしく生地は餅々としている。

智が焼いたピザは、一人で毛ガニを食べていた知子の傷心を癒していく。

「おいしい。智さん、ピザ作るの上手だね」

「そう？ 有難う。ピザの作り方は母さんが教えてくれたんだ」

知子は考える。祖母の看病のため実家に帰省している智の母はどんな人だろうと。

知子が智の母を想像しながらピザを食べていると、智は自分の毛ガニを食べながら、知子の毛ガニにも手を伸ばす。

「さつき、疲れたって言うていたから、知子さんの毛ガニも解^{ほく}してあげようか？」

王子智は、知子がさつき言った言葉を覚えていた。

「え、いいの？」

「もちろん」

智は、知子が見ている前で知子の毛ガニを解し始める。

知子の目にはもう智しか映ってはいない。横で酒を飲んで騒いでいる大人3人の声も聞こえない。

目の青い智は、解^{ほく}した毛ガニを知子に手渡した。

「智さん、毛ガニの身を取るのも上手だね」

「上手ってほどでもないよ。知子さんも僕ぐらいになればできるようになるさ」

一仕事終え智はまたピザを食べる。智のピザを食べる仕草も恰好いい。

知子はずっと智を見続けていた。

19：アルフレッド・ノーベル

智は知子の目の前でよく食べた。自分で焼いたピザの上に、器用に母のサラダを載せて食べる。一人で皿の半分のピザを食べたところで、智の食べるスピードは急に遅くなった。

知子はお茶を入れて智の横に置く。

「お茶だよ」

「有難う」

智はお茶を飲む。お茶を飲み干してから智は知子をじつと見た。

席が隣同士という至近距離から、智王子の青い視線を浴びて、知子は急に畏^{かしこ}まる。

「知子さん、お願いがあるんだけど、いいかな？」

青い目で見つめられてお願いをされたら断れない。知子はコクリと頷く。

「知子さんの部屋を見たいんだ。いい？」

「私の部屋、無いよ」

知子の返事に、智は少し驚いた表情をする。

「じゃあ、どこで勉強をしているの？」

「あっちの部屋」

知子は隣の部屋を指さした。

智は知子が指さした暖簾のれんの向こうを見る。

「見てみたい。いい？」

「いいよ」

知子は立ち上がった。

母が気づいて声をかける。

「あら、知子。食べないの？」

「うん、もういい」

言って知子は暖簾を潜る。

「智さん、もう少し食べたら？」

「いえ、沢山食べたので、ちょっと休憩します」

智もにこやかに断って知子のあとに続いた。

隣は居間。テレビと背の低い本棚と、知子がよく使うちゃぶ台がある。そのちゃぶ台の上に知子の算数の教科書とノートが載っていた。

急いで割り算の宿題をして、母の手伝いにはいったので、教科書とノートを片付け忘れていたのだ。

知子は恥ずかしくなって、開いて置いてあるノートを急いで閉じた。

智はちやぶ台に手をついて畳に直接座る。

「へえ。知子さん、ここで勉強をしているんだ」

智は算数の教科書を手にとって開いて中を見る。

パラパラとページを捲り、それを途中で止めて、知子の前で開いて見せた。

「これ、知子さんが書いたの？」

知子が見ると、授業中に遊び半分に書いたブタの絵があった。しかもブタの絵はうまくない。

教科書に絵を描いて遊ぶ時は授業中が多い。真面目に勉強をしていないのを知ったら、智は知子の事をどう思うだろうか。だからと言って友達が描いたと嘘をついたらもっと智に嫌われるかもしれない。

知子は仕方なく首を縦に振った。

「うん」

「ブタさん、かわいいね」

智の思いがけない誉め言葉に、知子の顔は真っ赤になった。

学校で佳枝や美里と描いた絵を交換して見比べていた時は楽しくて笑っていたが、王子智に見られるととても恥ずかしい。

「知子さん、ノートも見せて？」

智は言うが、ノートにはもつといろいろ描いてある。知子は悩んだ。更に恥ずかしい絵を見せなくてはならないのかと。

「もしかしてダメ？」

智のお願い事は、甘い調べとなって知子の鼓膜を震わす。

知子はちゃぶ台の前で人生の岐路に立たされた。ノートを智に渡すか、それとも断るか。知子のノートを握る手が震えてくる。

頑張つて考えても、10年しか生きていない知子は饒舌な断りの言葉が思いつかず、知子は鼓膜に響く智の甘い声の誘惑にも負けて、手を横に動かして智にノートを渡した。

智は赤面している知子の顔を見て、にっこりとしてノートを受け取り、表紙を捲って知子を書き取った算数の授業内容を見た。智の口から品のよい笑い声が漏れる。

「フフフ。ノートのほうが絵がいっぱいだ。どれもかわいいね」

知子のノートの中は、先生が説明した算数の授業内容が書き写し

であるが、その周りには動物の絵やアニメキャラクターの絵がいくつも書き込まれていた。

智はゆっくりと次のページを捲って見ていく。

「これがノーベル学者の子供時代のノートか」

智はノートの中味を全て確認し、最後のページに描かれている絵も堪能たんのうしてから、知子にノートを返した。

「見せてくれて有難う」

知子はノートを受け取る。ノートを持ったまま智の顔をじっと見た。ノーベル学者の子供時代のノート。それはどういう事だろうか。知子の頭には大きな？マークが浮かんでいた。

智は次の催促さいそくをする。

「知子さんのほかのノートも見てみたいけど、いいかな？」

智が喜ぶのでほかのノートを見せてもいいが、智が言ったノーベル学者の事が気になり、知子は口を開いた。

「ノーベル学者って何？」

智の顔色が変わる。だがすぐに智は笑顔になる。

「ノーベル学者か……」

智は考え込んで、すぐに答えない。

「ノーベル学者はね……。知子さんが分かるように、どうやって説明したらいいのかなあ」

智は「えつとねえ」と考えながら知子の顔を見た。

智の青い目が知子の顔をじっと見つめる。

知子はこんな時も王子智の青い瞳に吸い込まれそうになり、智に見とれてしまう。

智はとびっきりのいい笑顔を知子に向けると、ちゃぶ台に手を置いて立ち上がった。

「ちょっと待ってね」

智は暖簾を潜ってリビングに戻る。

リビングでは、3人の大人が酒を飲んで酔っ払っている。

智は圭介の肩に手を置いた。

「父さん。ノーベルの事、知子さんにどうやって説明しよう？」

酒を飲んで笑っていたキング圭介から笑顔が消えた。

「どうしてノーベルの話を。何を話したんだ？」

「話したのはノーベル学者の事だけ。まだ何っていうほど話してない。だからどう説明しようかと思って」

真顔で顔を見合わせる智と圭介。

知子の両親はグラッパを飲んで上機嫌になっている。

「ノーヘルでバイクだあー」

「いやーん、パパ。警察に捕まっちゃう」

父と母は今別世界にいる。

知子は智が戻ってこないの、何をやっているのかと思い、暖簾を潜ってリビングに戻った。

リビングに現れた知子を、智と圭介は無言で見る。四つの青い目は、全く表情がない。

知子はその四つの青い目を怖いと思った。

「智さん？」

不安な表情をして知子が智を見上げると、圭介の顔が急に優しくなつて、知子にノーベルについての説明をした。

「ノーベル学者はね、アルフレッド・ノーベルという偉い人が作った賞からきていて、その賞は毎年世の中のために世界で一番頑張った人に贈られる賞なんだよ」

キング圭介の顔は全く酔っていないように見える。

知子は、ノーベルはとても偉い人で、いっぱい頑張った人がノーベルから賞をもらうらしい。というのを記憶する。目の前に差し出された情報を、知子の脳は漠然と記憶した。といったほうが近いのかもしれない。知子は黙って頷いた。

20：反省

圭介は知子の顔を急に見て立ち上がる。

「長居し過ぎた。智、そろそろ帰ろう」

「そうですね、父さん」

バイクの運転のマネをして遊んでいた父が圭介を見る。

「ジョゼフさん、もっとゆっくりして言って下さいよ」

母も圭介を引き止める。

「パパもあ言ってますし、そんなに遠慮なさないで」

「ご好意は嬉しいのですが、夜も遅いですし、知子さんもそろそろ寝ないと」

両親と話している圭介の後ろを、智は無言で歩いて玄関へ向う。

知子は智の横に並んで歩いた。

「ねえ、智さん」

「ん？」

智は知子を見る。

知子は智ともつと話をしたいと思う。でも、何を話せばいいのかわからない。今の知子は、急に帰ると言い、歩き出した智の笑顔が欲しかった。

「また、遊びに来てね」

「うん。知子さん、そんなに寂しそうな顔をしないで」

今はとても優しく接してくれる智王子。

その智の表情がノーベル学者の話をしたとたん消えてしまったのはなぜだろうか。キング圭介の表情も。

知子はとても不安でたまらなくて、玄関を下りようとした智の手を掴んだ。

「だって、明日は土曜日で智さんと一緒に学校に行けないから」

「ゴールデンウィークが終わったらまた一緒に学校へ行けるじゃないか。明日だって庭で会うかもしれない。父さんとは毎日会っているでしょ?」

「そうだけど」

智は知子の手を放して玄関に下りた。靴を履く。

圭介も後ろからやって来て知子の横を通り過ぎて行く。

「知子さん、ご馳走様でした。また明日会いましょう」

圭介も玄関で靴を履く。

「うん」

知子は寂しそくに智と圭介を見送って手を振った。

智と圭介が出て行ってから、母が知子を呼ぶ。

「知ちゃん。毛ガニが2つ余ったから、相馬さんちに持って行ってあげて」

「はい」

また王子智に会える機会が到来する。知子は毛ガニが入ったボウルを受け取ると玄関を下りた。靴を履いて家を出て、小走りで相馬家に行く。

相馬家の玄関前にたどり着いた時、ドアの向こうから圭介の声が聞こえてきた。

「小学生相手に何をやっているんだ？」

「分かってるよ。だから、こうして反省してるじゃないか」

智の声もする。

夕食の途中で抜け出して隣の部屋で遊んでいたから、圭介が智を叱っているのだろうか。

知子は、一緒に遊んでいた自分も同罪だと思い、急いで玄関ドア

を開けた。ノックもなしに。

会話をやめて知子に注目する圭介と智。二人は靴も脱がずに玄関に立っている。

知子はドアを開けてすぐ目の前に立っていた二人に驚いて硬直した。

智の手はベルトを掴んでいる。

そのベルトには金色に光る金属が差し込まれている。光る金属は知子がよく知っているものだった。

テレビドラマでよく刑事や犯人が持っている。おもちゃ屋にも売っている。同級生の男子から借りて遊んだ事もある。

知子が知る金色の金属は、銃だった。

21：おちゃらけ

なぜ智が金色の銃を持っているのだろうか。

智を庇^{かば}おうと思っていた知子は、金色の銃に気を取られて、智の手の下で揺れているベルトを凝視してしまう。

智は知子に向き直りベルトを後ろに隠した。

圭介が歩いて、智と知子の間に立つ。

「知子さん、どうしましたか？」

圭介の体で智が隠れてしまっただけに見える。知子は横に少し移動して智を見る。

「知子さん、どうしたのですか？」

圭介の声に、知子はまた圭介の顔を見る。

「あの……その……」

圭介は笑顔だが、知子がどう見ても、圭介の青い瞳は笑っていないように見えない。

そして圭介の後ろにいる智は顔すら笑っていない。

知子は二人の様子に怯^{おび}えながら、毛ガニが入ったボールを差し出した。

「これ、ママが。二人で食べてって」

圭介はボールを受け取った。

「ママさんに、有難うと伝えて下さい」

「うん」

知子が頷いても智の表情は硬いままだ。

「じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみ、知子さん」

知子は圭介の声を聞いたあと、ドアを閉めて、急いで相馬家を飛び出した。自分の家に駆け込む。

あの二人の異様な雰囲気は何だったのか。智はなぜ金色の銃を持っていたのだろうか。ベルトの中に銃が入っていたという事は、刑事ドラマのように智はベルトを体のどこかに巻いて、銃を身につけていたのだろうか。

息を切らしてリビングに来た知子を、酔っぱらった両親が迎える。

父は今も上機嫌で酔っていて、呂律が回っていない。

「お隣の相馬さんはいい人だったな」

母は酔っ払いながらも後片付けをしている。

「でしょう、パパ」

知子は強張った表情をして父にしがみついた。

「どうした、知子？ 手が冷たいな。外にいたから冷えたか？」

父は酒が入って赤くなった手で知子の手を包んで温める。

「パパ、あの人たち、銃を持ってた。金色の」

銃を持っていたのは智だけなのだが、知子には名前を口にして言うほど心に余裕がない。

「じゅう？」

父は知子の手を撫でながら言う。

「うん。刑事が持つてる銃」

「金色の？」

「うん、金色」

父は急に笑い出す。

「それはなあ、知子。モデルガン、だ」

父は、からかい半分に口を大きく開けて最後の「だ」を強調して言う。

父が知子の心情に気づいているのか知らないが、酔っておちゃらけている事もあって、知子を笑わせようとしているようだ。

「でも、パパ。刑事みたいに銃がベルトに入ってた」

「銃を入れるベルトもガンショップで売ってる、ぞ」

父はまた、最期の「ぞ」を強調して言い、知子から笑いを取ろうとしている。

「もう、パパ。ちゃんと聞いてよ」

「ちゃんと聞いてるだろ」

父は少し不機嫌になった。知子が笑って相手をしてくれないのがつまらないからだ。

まだ残っている酒のつまみを口に入れ、口をもぐもぐと動かしながら言う。

「モデルガンが好きな人はな、刑事のマネがしたくて、刑事みたいに本物そっくりの銃を身につけて遊んだりしているんだ。銃が金色なのもそうだ。客の気を引くために本物には無い色で鍍金めっきして売るんだ。だから、お隣の相馬さんが持っている銃の事で騒ぐんじゃないの。分かった？」

知子はおもちゃの銃を貸してくれた同級生の男子も銃を入れるベルトを持っていたのを思い出して、コクリと頷いた。

「分かった、パパ」

「うん、宜しい」

父は知子の頭を撫でた。

本当に父の言うとおりなのだろうか。だったらなぜ智はベルトを後ろに隠したのだろう。王子智がなぜ、そんな事を……。

風呂に入っても、歯を磨いても、知子の脳は答えを求める。答えは辞書にも百科事典にも載っていない。

夜が深まり、知子は布団に入る時間になっても、智と圭介の笑っていたいなかった瞳と、智が持っていた金色の銃の事が気になって、玄関に立っていた圭介と智の姿がずっと頭から離れなかった。

22：黒い服

その日の夜。

岐阜県の夜空は今日も晴れていた。

月が出ていないので、辺りは普段より暗い。

知子は布団に入ってから、智と金色の銃が気になってなかなか寝付けないでいた。

なぜ王子智は、金色の銃を持っている時、笑顔がなかったのだろうか。明日の智は笑顔で会ってくれるだろうか。

知子の頭の中に、いろいろな不安が交互にあがってくる。どうか智王子が笑顔で会ってくれますように。知子は小さな胸で何回も祈りを捧げる。

そうして何度も祈りを捧げているうちに、知子は眠りについた。

知子が寝静まっても、智は起きていた。

ルームライトをつけず、薄暗い部屋の中で青い目を光らせて立っている。

その瞳に感情はなく、静かに視線を走らせて、智は隣の部屋へ歩いて行く。

タンスに手をかけ、中から大きなスーツケースを出して蓋を開け

る。

中には黒い服とベストがあり、蓋の内側には様々な装備品が固定して入れられていた。

ベストは防弾チョッキだろうか。

智はスポーツトレーナーを脱いだ。鍛えられた智の肉体がシルエツトとなって暗い部屋の空間に浮かぶ。

智は黒い服を着る。黒い布は智の肌にピッタリとくっついて服の上からでも筋肉質な体がかがえる。

次に、室内なのに底の厚いブーツをはく。畳を踏んでブーツのはき具合を確かめながら、ベストを着る。

今度は金色の銃が入っているベルトに手を通し肩から提げる。銃の位置は左脇の前。銃が動かないように反対側の肩にもベルトをかけて銃を固定する。

それから、しゃがんで蓋の内側についている様々な装備品を取り出して身に付けていく。

バタフライナイフ、手投げナイフ、ハンドライト、千枚通し、ピアノ線。

金色の銃以外、風変わりな装備はなさそうだ。

智は皮手袋を手にはめた。口から息を吐きながら皮手袋が抜け落ちないように手首のベルトを締める。両方の手首のベルトを締め終

わると歩き出した。

「父さん、準備は？」

圭介の青い瞳が智を見る。

「もうすぐ終わる」

見ると、圭介も同じ姿をしていた。

加藤家の前の道を、酔っ払いが千鳥足で歩いて行く。

その酔っ払いの後ろを、黒い影が横切る。

酔っ払いは気配を感じて振り返った。誰もいない。

「なんだあ、畜生。縁起でもねえ」

酔っ払いは見えない何かに叫ぶと、また前を向いて歩き出した。

酔っ払いの影が遠くなり消えた頃、物陰から黒い服に身を包んだ者が出てきた。

1人、2人、3人……。

黒い覆面をしていて顔が分からない。

次々と出て来て加藤家の門の前に集まる。

集団から一人だけ出てきて玄関前の庭に入る。危険がないのを確

認して、仲間を呼びながら先に進んで行く。

集団は合図を受けて加藤家の庭に入る。そのまま進み玄関ドアを
開んだ。

一人がしゃがんでドアの鍵穴に細い金具を差し込む。その作業は
巧妙でほとんど音がしない。

ドアの鍵が開くと、別の者がドアノブを握り静かに開けて音もな
く入って行く。

リビングのテーブルの上には、中味の減ったグラッパがまだ置い
てある。そのグラッパのビンに、暖簾を潜って隣の部屋に入って行
く集団の影が映る。

隣の部屋にはちゃぶ台とランドセルがあるだけで誰もいない。

近くの襖ふすまを開ける。奥では知子の両親がぐっすりと眠っている。

もう一つの襖を開ける。その奥に知子が寝ていた。

23：ドアップ

集団は知子を囲み、一人がしゃがんで布団を捲る。

知子はぐつぐつと眠っていて起きない。

『この子がノーベル物理学者の加藤知子なのか』

聞き慣れない言葉。

『こんな幼い子を殺したくないな』

それはイタリア語。

『殺さなければ俺たちは務所暮らした』

声は全員男。

『仕方ないだろ。運命とはこういうものだ』

黒い服の間から金色の銃が出てくる。

金色の銃口が知子に向けられた。

その瞬間、ちゃぶ台で音がして、眩いばかりの閃光が走った。

『なんだ、この光は！？』

部屋にいた男たちは全員目が眩んで周りがよく見えないようだ。

知子の部屋に、新たな黒い服装の男が現れて、部屋にいた男たちを殴り倒していく。

『誰だ？』

『何が起こっているんだ？』

『よく見えん』

慌てふためく男たちは次々と倒されていき、黒い服装の男は最後の一人を倒すと知子を見下ろした。

全く息が乱れていない。覆面もしていない。それは智だった。

智は腰を下げて畳に片膝をつける。

「知子さん、起きて下さい」

向こうの部屋では、黒い服を着た圭介が両親を起こしている。

知子は体を揺すられて目を開けた。

ドアップの智の顔が見え、青い瞳が知子を見ている。

「智さん？ え？ 何？ どうしたの？」

知子は、夢を見ているのか現実なのか、判断ができていない。

「知子さん、起きて着替えて下さい」

「え、着替える？」

10歳の知子にも恥じらいはある。智さんが見ている前で着替えるの？ パジャマの下、下着だよ。見たいの？ 今の知子はそれが一番聞きたい。

「早く逃げないと。急いで着替えて」

智は、知子を抱きかかえて布団に座らせた。

智に体を起こされて、ようやく知子は畳に倒れている黒服の男たちを目にする。畳には金色の銃が落ちている。

知子はビクリして智にしがみついた。その智の左脇にも、革袋に入った金色の銃がある。知子は怖くなって智から離れた。

倒れている男たちは覆面をしているので表情が分からないが、目が日本人の色をしていない。中には智の瞳と同じ色の男もいる。

「知子さんの服はどこ？」

智は近くのタンスから引き出しを開けていく。

ちゃぶ台がある部屋を挟んで向こうにある部屋では、圭介に起こされた両親が怯えて^{おび}畳に座り込んでいる。

知子は、勝手に人のタンスを開けて衣類を探している智の姿に怯える。王子智が泥棒に見えるからだ。

じゃあ、畳に倒れているその他大勢は、仲間割れで喧嘩をして負けた人たちなのか。うちはそんなにお金持ちだったのか。

知子の頭の中に浮上した大きな？マークは、いろいろな疑問を従えて、知子の頭の中を通り過ぎていく。

24：白いスーツ

「知子さん、時間がありません。僕たちは、すぐに逃げなければならぬんだ。早く！」

強い口調の智の声に動かされて、知子は立ち上がった。

「私の服はここ」

知子はまだ何が起こっているのか理解できていない。知子が今の状況を把握するために考えながらタンスの引き出しを開けると、智が中から服を出した。

「ズボンを。それと長袖の服」

「えー、スカートがいい」

王子が例え泥棒だったとしても、智と一緒にの時はかわいい服がいいに決まっている。

「走って逃げるのにスカートは邪魔だから」

「でも……」

知子は渋って着替えようとしなない。

圭介は時計を見ながら言う。

「智、連絡はしたのか？」

「出る時したじゃないか。父さんだって見ただろ？」

「時間はとくに過ぎている。なんで助けが来ないんだ？」

「分からない。聞こうにも通信が繋がらないんだ」

苛立^{いらだ}っている智と圭介の声が飛び交う。

王子とキングは何をそんなに苛立っているのだろうか。

不運にも知子が抱いたその疑問だけはすぐに解けた。

家に侵入者が駆け込んでくる音がする。

今度の侵入者はビジネススーツを着ている。覆面もしていない。

頭髪の色も違う。瞳の色も違う。スーツの色もまちまちで人数が揃うとカラフルだ。

手には全員、短機関銃FN P90。赤い照準光が智と圭介の眉間に光る。

智はすぐに両手をあげた。圭介も両手をあげる。

最後に白いスーツの男が現れた。スーツと同じ生地で作られた白い帽子を被っている。顔は外国人。智のように日本人の血が混じっているようには見えない。男は手にある金色の銃口を知子に向けて口を開いた。

「ボオナセーラ、トモコ」

現れた男はトロツキオだった。トロツキオはにやけながら続けて言う。生粋のイタリア語で。

『随分うちもんを痛めつけてくれたな。兄ちゃんよ』

智は何も言わない。

『ここでお前に落とし前をつけてやりたいが、ガルネオ様は全員生かしたまま連れて来いと仰せだ』
おお

トロツキオは金色の銃口を玄関へ向ける。

『外へ出る！』

イタリア語で言っても、知子には分からない。トロツキオは動かない知子を見てもう一度言った。

『早くしろ！！』

智は手を上げたまま言う。

「知子さん、外へ行きましょう」

「うん」

知子は智の服を掴んで一緒に歩き出す。

畳に倒れていた黒服の男が、仲間に揺さぶり起こされて1人、 2

人と起き上がる。

『この野郎!』

智は、起き上がった黒服の男に横からいきなり殴られた。

「智さん!」

知子は、よろける智の体を支える。

『ふざけた事をしやがって!』

智は首の後ろを叩かれて、体を屈めたあと、畳の上に倒れた。

「智さん、智さん」

知子が呼んでも智は反応しない。

トロツキ才は、知子の頬に金色の銃口をくつつけた。

『騒ぐな! かわいい頬つぺに穴を開けたくないだろ?』

知子は頬に当たった冷たい感触を感じてトロツキ才を見る。顔の真横に金色の銃が見える。知子は恐怖で全身を強張らせた。

「知子さん、静かに。お願いですから」

圭介が言う。圭介の後ろにいる父と母はパジャマ姿で怯えながらも無言で首を振って知子に騒がないでと合図を送っている。

知子は口を閉じた。

『いい子だ。さすがノーベルの卵』

知子の耳はノーベルだけを聞き取る。トロツキオの瞳の色は琥珀色。目の色は違うが、トロツキオも智が言ったノーベルを口にしたのだ。

知子の脳がその理由を考えようとした瞬間、トロツキオは知子が着ているパジャマの襟首を掴み、引き摺るようにして知子をちゃぶ台のある部屋へ連れ出した。

智はまだ畳に倒れている。

「智さん」

トロツキオは知子の口を手で塞ぐ。知子を片腕で抱きかかえて連れて行く。

『外で騒いでもらっては困るんでね』

智の姿は一瞬にして知子の目の前から消えた。知子はトロツキオによって外へ連れ出されたのだ。

外にはほかにも大勢の外国人がいる。

『いいか。何事も無かったように、部屋の中を片付けておけ。日本の警察に見つかって国際問題にでもなったら厄介だからな。鍵もかけておけ。いいな！』

トロツキオは周りの連中に言うと、抱きかかえた知子と一緒に車に乗り込んだ。車の色は黒。

車のドアが閉まると同時に知子はトロツキオの腕から解放された。

知子に乗せた車は走り出す。

知子は窓に手をつけて外を見る。

父と母が銃を突きつけられながら車に乗り込んでいる。圭介は他の車に乗るように強制的な誘導を受けている。

父と母が乗った車と、圭介に乗せた車は、知子が乗っている車について走り出した。

「おじさん、誰？」

『黙れ、くそガキ！ 俺は子供が、大っ嫌いなんだ！！』

トロツキオが金色の銃を知子に突きつけて怒鳴るので、知子は後ろに飛びのいて口を閉じた。車のドアが背中当たって痛い、銃を向けられていては痛いとも言えない。とりあえず知子は分かったという意味でトロツキオに頷いた。

『そうやって最初から大人しくしてれば、俺もお前を見て苛々せずにすむんだ』

トロツキオは銃を引いて前を向いた。

今もトロツキオが何を言っているのか全く分からない。

車の中は香水の匂いが充満している。更にトロッキオは知子の隣で葉巻を口にくわえて火をつけた。

独特の葉巻の煙の匂いが香水の香りと入り混じって、知子は慣れない匂いで吐きそうになり手で口を押さえた。

車は岐阜県を南下して愛知県名古屋市へ向って走って行く。

東の空は細い三日月が顔を出している。昇ったばかりの三日月は赤みを帯びていて大きい。その大きな三日月をバックにして、街の夜景が星屑となって流れていく。

車は2時間近く走り、今度は高速道路に入った。一気に加速して走って行く。

智はどうなったのだろうか。

高速道路の防音壁の間からたまに見える夜景は綺麗だが、智が生きているか心配で、知子の頭の中には畳に倒れた智の姿ばかりが浮かんでいた。

25：火星

知子に乗せた車は名古屋港に到着した。

その後ろに、両親が乗った車と、圭介が乗った車、あと黒い集団が乗った車が次々と到着する。

波止場には大型クルーザーが数隻あり、静かに揺れていた。

知子はトロッキオの指示で車から降りた。トロッキオに抱きかかえられて車に連れ込まれた事もあって、知子はパジャマ姿の素足。

夜のアスファルトは冷たく、知子の足の裏を冷やしていく。更に冷たい夜風がパジャマの中にまで吹き込んできて寒い。

知子は唇を震わせ歯を鳴らしながら両方の腕を擦って体を温める。

後ろを見れば、父と母、圭介も車から降りて歩いている。黒服の集団も続々と黒い車から降りてくる。

その中に智の姿はなかった。

『来い！』

知子はまたトロッキオに襟首を掴まれた。そのまま強引にクルーザーへ連れて行かれる。

歩く知子の足の裏に砂利が減り込む。知子は痛みで顔を歪ませながら歩く。泣き出せばトロッキオに怒鳴られ銃を向けられる。知子

は半泣きになりながら足の裏の痛みに耐えた。

クルーザーに來るとトロツキオは軽々と知子を抱え、クルーザーの乗員に知子を手渡す。

知子の視界は黒く揺れる波を最後に目まぐるしく変わり、知子は今どこにいるのかが分からない。

白い壁が見えて次に鼠色の絨毯じゅうたんが見えたと思った時、知子は下におろされた。

鼠色の絨毯じゅうたんがある狭い部屋。絨毯はふわふわとしていて足の裏を優しく包んでくれる。風もなく暖かい。部屋にあるものといったらベッドが1つと簡易キッチンくらい。

そばにいる乗員の顔は怖い、トロツキオのようにすぐに怒鳴って銃を向けたりはしない。だがその優しさも束の間で、乗員は知子を船室に入れると、外から鍵をかけた。

知子は走ってドアの前に立つ。「助けて」と叫びたいが、銃を向けられるのは怖い。そっとドアに触れ窓を覗くが、外は闇しか見えない。

一人つきりになってしまった知子。聞こえてくるのはクルーザーのエンジン音のみ。たまに大きく揺れるのは、波のせいだろうか。

知子はベッドに腰掛けて毛布にくるまった。

どうしてこんな事になってしまったのか訳が分からない。なぜうちに外国人の集団が來たのか。どうして智と圭介は黒い服を着てう

ちにいたのか。畳に倒れた智はその後どうなったのか。

トロツキオから解放され、金色の銃からも解放された知子は、今やっと涙が出てきた。

「パパ、ママ。怖いよー。会いたいよー」

知子は嗚咽おえつを漏らしながら泣く。

しばらくすると外で足音がする。足音は徐々に大きくなって誰かが近づいてくるのが分かる。

知子は毛布を口に当てて押し黙った。

歩いてきたのは乗員。乗員も外国人だ。まだ若い。

乗員は、知子がいる部屋のドアノブを握る。ガチャガチャと鍵を開ける音が大きく響く。ドアを開けて毛布にくるまって寝ている知子に近づく。

知子は毛布の中で目を開けていた。寒くもないのに体が震えてくる。

自分はどうなってしまっただろう。智のように黒い服の人たちに殴られて叩かれるのだろうか。

恐怖が体中を駆け巡り、今では智の心配より自分の心配をしている。

乗員は知子の毛布を剥はぎ取った。

知子の眼はしっかりと開いて乗員の顔を見る。

『来い！』

乗員は知子の腕を掴んだ。10歳の知子の体は腕を掴まれただけで浮いてしまう。

「腕が痛いよ」

乗員は痛みで顔を歪めている知子をベッドから引き摺り下ろした。腕を掴んだまま外へ連れ出す。

外は名古屋港にいた時より強い風が吹いていて寒い。絨毯もない外の床は凍るように冷たくて、知子の足の裏はすぐに冷えて、痺れと痛みを感じる。このまま冷たい所に立たされていたら、きっと霜焼けになってしまうだろう。

クルーザーの周りには大海原。おおつなばらそばに停泊しているクルーザー以外は、どこにも灯りらしきものが見当たらない。あるとしたら、夜空の三日月と星くらいか。

乗員は無線で連絡を取りながら、その夜空を見ている。一体何が始まるというのだろうか。

大海原の星はよく見える。天の川もとても大きく見えて空の端から端へと続いている。天の川の近くで一際目立って輝く赤い星がある。知っている人ならすぐに分かる火星なのだが、知らない知子は震えるように輝いている赤い火星を不思議な思いで見つめた。

その火星の近くで知子は点滅する赤い光りを見つける。規則的に点滅する赤い光りは明らかに人工的なものだ。10歳の知子でもそれは分かる。

乗員はその赤い光りを見つけると、空に向けて閃光弾を打ち上げた。

点滅する赤い光りは、飛行機についている衝突防止灯。しばらくして飛行機のエンジン音が知子の耳に届く。飛行機は閃光の周りを旋回すると海面に着水した。

26：予定

海面に機体の腹をつけて浮かんでいる飛行機。

知子は、海に浮かんだ飛行機を生まれて初めて見た。

普通なら子供心に「飛行機が海に浮いている」と感嘆するのだが、乗員に腕を掴まれている知子はそんな余裕を与えてもらえず、乗員は黙って知子を甲板の端へ連れて行く。

クルーザーはエンジンを低く轟かせて、ハッチを開けた海面上の飛行機に横付けした。

知子は乗員に抱きかかえられる。抱きかかえられたのは2回目だ。今度はトロッキオではない。知子は、この人は乱暴な事はしないだろうと思っていると、乗員は知子を投げた。

「わっ」

一瞬の浮遊感のあと、知子は飛行機の乗員に受け止められた。乗員は恐怖で体を小さくしている知子を機内へ連れて行き、知子を機内の後方に下ろした。

床に座り込んだ知子は歯をガチガチと鳴らしながら震えている。

次にトロッキオが機内に乗り込んで来る。

知子は震える口を止めるために奥歯を噛み締めた。トロッキオは絶対に子供に優しくしない。車内で金色の銃を向けられてからトロ

ツキオには気をつけなければしないと記憶している。知子はトロツキオと目が合わないように体を横に向けた。

その知子の耳に飛行機のエンジン音がまた届く。飛行機はほかにもあるようだ。

外はどうなっているのだろうか。両親と圭介は元気なのか。智は無事なのか。知りたがる知子の目の前で、トロツキオはハッチを閉めた。

知子に乗せた飛行機は海面から飛び立つ。機体は大きく傾き、知子の体は滑って機体の壁にぶつかる。飛行機は大きく旋回しているようだ。

トロツキオは知子に背を向けてシートに座り葉巻を吹かしている。ここで泣いたらまた銃を向けられる。知子はそう思って身を侵食する恐怖感に耐えた。

飛行機は東から赤い味を帯びて徐々に白んでくる空を移動する。空全体が白んだ頃、飛行機は空母の上空を飛行し、旋回したあとに空母に着陸した。

知子は乗員に連れられて飛行機から下ろされる。夜時は見えなかったが飛行機には車輪がついている。どうやら水陸両用飛行機のようだ。

その水陸両用飛行機が移動したあと、また同じ飛行機が着陸する。その飛行機から知子の両親が降りてくる。両親は、トロツキオの子分から身振り手振りで知子の所へ行くように指示を受けて歩き出す。

途中、両親は知子を見ながら小走りになる。

「知ちゃん！」

「ママ！」

母は知子を抱き締めた。父も知子を抱き締める。

「知子、無事だったか？」

「うん。パパ、怖いよ」

次に圭介が機体から降りる。疲れた表情の圭介は何も言わずに知子の近くに移動する。

また飛行機が着陸する。一体何機あるのだろうか。

その飛行機から黒い服の人々が降りる。

その何人目かに智が降りた。知子は智をじっと見る。智の左脇にあった金色の銃はベルトごとなくなっていて、智の左頬はアザになっている。アザは知子の目の前で殴られた時のものだ。それは間違いない智だった。

智は移動して圭介の横に並んだ。

圭介は小声で言う。

「殺されたと思ってた」

「僕もね」

圭介と智の会話を聞いて、知子の父も話して大丈夫と思ったのか、父は小声で圭介に言う。

「ジョゼフさん。あなた方の黒い服といい、あの人たちの黒い服といい、これは一体どういう事ですか？」

父の声は小さいが目は噛みつかんばかりに怒っている。

圭介は溜息混じりに答えた。

「話せば長くなりますが、簡単に申し上げると、私と智は未来人で、この時間に生きる知子さんを助けに来たのです。酔い潰れて皆さんがぐっすり眠っているうちに速やかに事を終わらせる予定だった、と申し上げたほうが正確なのかもしれません」

「はあ！？ 未来人??」

父は、そんな戯言たわごとには騙だまされないぞと、威嚇いかくま交じりの声を上げる。

今度は智が言う。

「あの、パパさん。僕はSPなんです。知子さんの身辺警護のために未来から来たのですが、未来で何かがあったようで、連絡しても増援部隊は来ないし、僕のほかにも未来の銃を持っている……」

智は両手をあげて口を閉じた。

トロツキオが会話に気づいて智に金色の銃を向けたからだ。

『「こそこそと何を話している？ 逃げる相談か？」』

トロツキオの言葉は何回聞いても何を言っているのかさっぱり分からない。と知子は思う。

27：ファミリー

圭介は口を開いた。トロツキオを興奮させないように静かに言う。

『せめて、この家族に、今どいう状況なのか説明をさせてくれ。

彼らは、何が起きたのか分からなくて、とても困惑している。お前たちだってファミリーを大切にするだろ？』

圭介の口から出た言葉はイタリア語だった。

トロツキオは銃を圭介に向ける。

『お前、イタリア人か？』

圭介は条件反射で両手をあげる。

『いや、日本国籍だ。母はイタリア人だが』

『だったら、これだけ説明しろ。黙っていれば殺さない。ってな』

『わかった』

圭介の返事を聞いても、トロツキオは銃を下ろさない。

圭介はトロツキオの銃を見ながら、知子たちに言った。

「黙って従っていれば、殺さないそうです」

父はそれを聞いても圭介に言う。

「知子に身辺警護が必要だなんて信じられない。これは何かの間違いだ。ジョゼフさん、あの人に私たちを家に帰すように説明してくれませんか？」

言った直後に、トロツキオは父に銃を向けた。

「ひええ」

父は悲鳴をあげて両手をあげる。父の反応は、智と圭介と比べるのかなりの違いがある。

ごく普通に生活してきた父と、SPとして訓練を受けた智たちとの差だろうか。

トロツキオは琥珀色の瞳で父の反応を見て苛立ちを募らせる。

「こいつは、黙れと説明しても分からんのか？」

圭介も両手を上げながら言う。

『待ってくれ。今それを説明しているところだ。もう少し待ってくれないか？』

圭介はトロツキオの銃を見ながら言う。

「パパさん、黙って下さい。彼らは日本語が分からないので、私たちの行動に過敏に反応します。彼らをあまり刺激してはいけません。お願いだから」

銃を向けられては言う事を聞くしかない。父は口を閉じて何回も頷いた。

それでトロツキオはやつと銃をさげた。

滑走路が広がる空母の上。裸足で立たされている知子は、踏み締めている冷たい金属が滑走路だという事に気づいていない。

知子たちは歩かされ、別の小型飛行機に乘せられた。

飛行機はすぐに飛び立ち空へ向う。

飛行機の機体が傾き旋回している時に窓から見えた巨大な船が先ほどの空母で、知子はその上にいた事を知った。

銃と飛行機と空母を所有する見知らぬ外国人たち。それでいて彼らは軍服ではなくビジネススーツを身にまとい、空母とはとても不釣り合いな恰好をしている。

訳も分からず銃を向けられ、これから何が起こるのか分からないが、知子はやつと家族と一緒にいる事ができて、とりあえず心地着いた。

知子たちは機内の隅へ行くように誘導を受ける。近くで銃を持った外国人が見張りをしている。

知子は母の腕に掴まって腰を下ろした。隣に智が座る。智は知子と眼が合うとアザのある顔でにっこりとした。

こんな時になぜ智が微笑んでくれるのか分からないが、智の隣に座った圭介も知子と目が合うとにっこりしてくれる。

今の王子とキングの笑顔は優しい。

言葉が交わせない分、表情で大丈夫だよと知子に伝えようとしているのだろうか。

知子は二人の笑顔が何を意味しているのか分からなかったが、王子智とキング圭介の笑顔に釣られて、知子も少しだけ微笑んで笑顔を返した。

落ち着いてくると子供の好奇心が先立って、知子の瞳は狭い機内を見渡す。

壁と床は全部エンジ色のコール天の生地で覆われていて素足でも温かくて気持ちがいい。

少し離れた場所に、ソファーに腰掛けたトロッキオがいる。知子たちを監視するために体の前面を知子たちに向けている。

トロッキオの前にあるテーブルには、ベルトに差し込まれた金色の銃が置いてあり、トロッキオはそこで葉巻を吹かしながら酒を飲んでいた。

金色の銃を持っていたのは、智とトロッキオと知子を殺そうとした黒服の男の3人。あとの銃は刑事ドラマや映画と同じで、みんな黒い短機関銃を持っている。

トロッキオが葉巻の灰を灰皿に落とすたびに、ビジネススーツの胸元が開き金色の銃が見え隠れする。という事は、テーブルの上の金色の銃は、智が持っていた銃だろうか。

知子の頭脳は拉致された理由を探してぐるぐると回転して動く。

智とトロツキオの口から出た「ノーベル」という言葉。

圭介は、世の中のために世界で一番頑張った人に贈られる賞だと言っていたが、それが拉致とどういう関係があるのか。

知子の心の中に夕食の時に聞いた智の声が蘇る。智は確かに知子のノートを手にとって言った「ノーベル学者の子供時代のノートか」と。

知子と思う。未来の自分はノーベル学者なのか。でも違うかもしれない。知子は答えを求めて智を見た。

智は落ち着いた表情で周囲を観察している。

周りには短機関銃を持った見張りがいるので、知子は智に答えを教えるて声にして聞くことができない。

そのうちに智はじっと見つめる知子の瞳に気づいて、首を動かして知子を見た。

アザのある智の顔を見ているうちに知子は辛くなって涙を流す。王子の頬にあるアザは、少なくとも自分のせいだったのだから。声を出す事が許されない今、どうやって智に謝ればいいのだろう。

智は突然泣き出した知子を見て何かなんだか分からず動揺しているようだ。

知子の母がそれに気づいて無言で知子の頭を引き寄せて胸に抱き
知子をあやす。

知子はひたすら母の胸で泣き続けた。

28：女神像

小型飛行機は一度パキスタンのイスラマバード国際空港で補給をしてイタリアの孤島ガルネオ島へ向った。

知子と両親は疲れて眠っていたため飛行機が一度着陸した事に気づいていない。それを知っているのは起きていた圭介と智だけ。

日本からイタリアのガルネオ島まで約12時間。空を移動して小型飛行機はガルネオ島に到着した。

知子は母に体を揺らされて目を覚ました。

智と圭介はすでに立っていて知子を見下ろしている。

母は腰を上げて中腰になり、知子を先に立たせてから立ち上がった。

飛行機はいつの間にか着陸していて機内の窓から何本かの木が見える。

トロツキオの子分に誘導されて飛行機を降りると、窓から見えた木の先にコバルトブルーの波を揺らして広がる海が見えた。

知子は連れられて車に乗る。今度はトロツキオでなく父と母が一緒にいる。

知子が車の窓から外を見ると、圭介と智が乗り込んだ車にトロツキオが乗り込むのが見えた。

知子としては両親と車に乗れて安心なのだが、すぐに銃を向けるトロッキオと乗っている王子智とキング圭介が心配で仕方がない。

車はそんな知子の思いを乗せて走り出した。

道路はあるが標識も信号も何もない道。その道はずっと先のガルネオ自慢の白い別荘へ続いている。

途中牧場を通り過ぎる。知子は牧場にいる牛が全てガルネオのものとは知らない。次に通り過ぎる畑も。

車は10分ほど走りガルネオの別荘に到着した。

玄関前はロータリーになっていて、ロータリーの中心には噴水があり水を噴き上げている。

知子の乗る車は玄関に横付けされ、知子は車から降りた。

玄関前の階段の左右に女神像が立ち、知子を見下ろしている。女神像の表情は優しく、来訪者の知子を歓迎しているように見える。

知子は白い別荘を見て思う。1階建てのホワイトハウスみたいだと。

智と圭介も車から降りて、知子の横に並んで立つ。

トロッキオが後ろから現れて知子たちを通り過ぎて行き、それから背中を押された知子たちがトロッキオのあとに続いて階段を上った。

トロツキオは扉を開けて中に入る。知子たちも中に入った。

中はバリアフリーで玄関との段差はない。広い間取りは玄関内というよりエントランスといったほうがいいかもしれない。

同じ服装の人が数人知子たちとすれ違い、無表情で知子を見ていく。ガルネオに飼われている召使いなのだが、知子にその知識はない。

知子は自分のパジャマ姿と、靴をはいていない裸足を気にして、召使いと目が合わないように下を俯いて歩いた。

トロツキオは真っ直ぐ歩いて行き、目の前の扉を開けて入っていく。知子たちも誘導されるがままに歩いてその中に入った。

明るい部屋。庭が一望できる大きな窓ガラス。壁に沿って置かれた高価そうな棚。棚の中と上には調度品が飾りのように置かれている。

庭は海まで続いているかと思うほどの芝生が一面に広がり、テラスの近くにある丸いプールには透明な水が静かに揺れていた。

テーマパークのような家。これが知子の第一印象だった。

その家主のガルネオはパジャマ姿で大きなテーブルに一人座って朝食を食べている。両手の指全部に大きな宝石がついた指輪をしている。場合によっては一本の指に指輪が3つ填まっていたりする。

知子たちはそのガルネオの前に一列に並んで立たされた。加藤家

は全員パジャマ姿。父と母は靴をはいているが、抱かれて家を連れ出された知子はまだ裸足のまま。智と圭介は黒い服装のままである。

ガルネオは牛乳がかけられたコーンフ레이크を口に入れて、唇を牛乳で濡らして白くさせながら知子を見た。

『その娘、写真より幼いな』

ガルネオはにやつきながら知子を頭の上から足の先まで見ている。

知子はガルネオの銀色の瞳が怖くて母にしがみついた。しかし、子供の好奇心で怖いもの見たさにガルネオの顔を見てしまう。

ガルネオは60歳くらいのオヤジだが、丸顔に天然パーマの巻き毛と鼻の下にあるヒゲ面がスーパーマリオに似てなくもない。

それとは対照的な細面のトロツキオは、ガルネオのコーンフ레이크が入った器の横に、ベルトに入った金色の銃を置いた。

『ガルネオ様、あの男がこれを持っていました』

『何!』

ガルネオはトロツキオがさした指の先を見る。その先には智がいた。

29：ブローニング・ベビー

ガルネオはフキンで口元を拭いてテーブル上の金色の銃を手取る。銃のグリップを握り近くの壺に狙いを定めて引き金を引いた。

銃口から赤い光線が出て壺に穴が開く。

知子も、父も母も金色の銃が普通の銃でないのを知る。

ガルネオは横目でトロツキオを見る。

『1丁だけか？』

『はい、1丁だけです。ほかはナイフやライトなどで、大した物は持っておりませんでした』

ガルネオは銃を反対の手に持ち替えた。

『こいつは俺たちが持っているレーザー銃よりシンプルでスマートだ。あいつから話が聞きたい。日本語ができる奴を呼べ』

『それはありません。あの男二人はイタリア語が話せます。先ほど車の中で確認をしました。なあ、そうだよな？』

トロツキオはガルネオに説明をしたあと、智と圭介の両方を見る。

『ああ』

『ええ』

智と圭介は返事をした。

ガルネオは金色の銃を前に出して聞く。

『この銃をどこで手に入れた？』

圭介が答える。

『別に手に入れるってほどでもない。お前たち全員が銃を持っているように警察も軍人も普通に持っている』

『普通に持っているだど！？ マフィアもか？』

『マフィアも。多分。見た事はないが』

圭介の返事を聞いてガルネオは立ち上がった。パジャマの裾を捲すそをめくる。出っ張った腹のパジャマズボンのゴムに金色の銃が差し込まれている。ガルネオはそれを抜いて圭介たちに見せた。

両手にある銃はどちらも金色だがガルネオの腹にあった銃は少し大きい。その大きいほうの銃を圭介たちに見せた。

『これは10億アメリカドルもするそうだ。こっちの小さいのはいくらだ？』

圭介と智は顔を見合わせる。10億アメリカドルの高額に驚いているようだ。

智がガルネオに言う。

『小さいほうは2000アメリカドルくらいだったと思う』

『2000アメリカドルだと!!』

ガルネオは素っ頓狂な声を上げて続けて言う。

『俺をからかうんじゃない。こいつはレーザー銃だ。そんな安くねえだろ。ああ?』

ガルネオは銃を振り最終的に智に銃口を向けた。

今回の智は手を上げずに銃口を見ている。

圭介はガルネオに言う。

『大きいほうのレーザー銃は旧式だ。S & W M 39をモデルにアメリカ軍が開発した当初のもので製造数はとても少ない。だから高額なんだと思う。小さいほうは、その後ブローニング・ベビーをモデルにして開発された量産ものだから、価格はそれよりずっと安い』

ガルネオの眉毛がピクリと動いた。

『お前、ひょっとして未来から来たのか?』

圭介は頷く。

『ああ。未来から来た』

ガルネオは大きく頷く。

『ほう。どうやって来た？』

圭介が答えないのでガルネ才は銃を突きつけてもう一度聞く。

『どうやって来たか答えろ！』

それでも圭介が答えないので、ガルネ才は知子たちに銃を向けた。

30：特殊合金

知子と両親は震え上がって身を寄せる。

智が顔色を変えて切羽詰った表情で説明を始める。

『タイムマシンで来た。でもタイムマシンは無い』

ガルネオは銃口を智に向けた。

『なんでだ？』

『悪用されたら困るからだ』

『嘘をつくな。どこかに隠してあるんだろ？』

圭介が言う。

『嘘じゃない。本当にタイムマシンはない』

ガルネオは知子に銃を向けた。

『言いたくなるようにしてやる』

智は血相を変えて言う。

『本当にタイムマシンはないんだ。未来の法律で、過去にタイムマシンを保管する事は禁じられているから』

ガルネオは智の必死の説明に納得した。

『そういう事か。未来の法律で決まっているなら仕方ないな』

ガルネオは知子に照準を合わせる。

知子は怖がって母にしがみついている。

圭介の声が急に大きくなる。

『待て、その子を撃つな』

『タイムマシンが無いなら、もうお前たちに用は無い。この娘も生かしておく俺の島がなくなる』

『待て、撃つんじゃない』

圭介は叫び続ける。

『その子はタイムマシンの設計者だ！』

圭介が叫んだ直後、辺りはシーンと静まり返った。

圭介は肩で息をしながらガルネオを見ている。

知子は声を荒げたキング圭介を初めて見た。イタリア語が分からない知子は、圭介がなぜ必死になっているのか分からなかったが、圭介の叫び声を全身に受け、勇ましいキング圭介の姿が知子の脳裏に焼きついたのはいうまでもない。

ガルネオは手首を動かしてレーザー銃の銃口を天井に向けた。

『今、なんて言った？』

圭介は息を荒くしながら言う。

『その子は、タイムマシンの設計者だ。その子を殺せばタイムマシンは存在しなくなる。タイムマシンが存在しなければ、タイムマシンに乗って来た私たちも2008年のこの時間に存在しないし、そのレーザー銃もお前の手から消えてなくなる』

『なんだ？ 話が見えん。この娘は将来、俺の島を乗っ取るんじゃないのか？』

『正確に言えば……』

圭介が言いかけた言葉を智が止める。

『言ったらダメだ。マフィアに言ったら未来が変わってしまう』

『うるさい、小僧！』

ガルネオは両手にある二つのレーザー銃を智と知子に向ける。

『撃つな！ 言うから撃つな』

圭介はまた叫ぶ。息を整えガルネオが持っている大きさの違う両方のレーザー銃を見ながら言う。

『正確に言えば、この島に時間移動の研究施設が作られ、大人にな

ったあの子がタイムマシンを設計し、その設計を元にタイムマシンが作られるんだ』

圭介の頬に汗が伝う。

『それに、そのレーザー銃の金属部はタイムマシンの内壁と同じ特殊合金が使われている。その特殊合金の開発を依頼したのも未来の子だ』

31：安全

『ほづ』

ガルネオはレーザー銃を下ろした。嬉しそうにトロツキオを見る。

『今の聞いたか、トロツキオ？ あの娘がタイムマシンの設計者だ』

『はい、聞きました』

ガルネオはとり憑かれたように笑い出す。天井を見て笑うガルネオの声が部屋中に響き渡る。

『がははは。こんなに笑ったのは久し振りだ』

ガルネオはまだ笑っている。笑いながらトロツキオにレーザー銃を見せる。

『お宝は、こいつじゃねえ』

トロツキオは信じられないといった素振りをして言う。

『なんでですか？ その未来の銃を武器商人に売れば巨額の資金が懐に転がり込みますぜ』

『だがレーザー銃は新しく手に入ったこの銃を合わせて全部で11丁。売っぱらうにしても数に限りがある。俺たちもこの銃は使いてえ。だがよ、あの娘をうまく育てれば、俺たちの言うがままにタイ

ムマシンの設計をして、あわよくばレーザー銃の設計もする。あの娘は生きている限り金蔓かねづるを生み続けるんだ」

トロツキオはガルネオの意見に反して首を横に振る。

「ガルネオ様。俺たちは、あの娘が大人になるまで待たなければならぬんですか？ イヤですぜ。その銃を売って金をファミリーで山分けにしましょう。そうすれば俺たちは全員遊んで暮らせますぜ」

ガルネオの表情が急に険しくなり、トロツキオに怒鳴った。

「うるせえ。俺が決めた事に口答えをするな。孤児だったお前を育てたのは誰だ？ 俺だろ、トロツキオ。お前はあだその恩を仇で返すっていうのか？ ああ？」

「いえ、そんなつもりは……」

「だったら、黙って俺の言う事を聞け。いいな！」

「……はい、分かりました」

トロツキオの返事を聞いたガルネオは召使いに叫んだ。

「おい、こいつらを部屋へ連れて行け。地下室じゃねえぞ。分かるな？」

トロツキオが言う。

「ガルネオ様、そんな事をしたらこいつら逃げますぜ」

『心配ない。ここは離島。そう簡単に逃げられやしねえ。それにこいつらを逃がすほどドン・ガルネオの子分はバカじゃないだろ?』

『そうですか……』

ガルネオは引き続き召使いに言う。

『とりあえずだ、こいつらのパジャマ姿をなんとかしろ。あと、娘の裸足もな。飯も食わせる。栄養不足で頭が悪くなったら金が入らなくなるからな。がはははは』

ガルネオはまた笑い出す。

『未来は俺が変えてやる。研究施設も建ててやるさ。このドン・ガルネオが』

ガルネオは太った体を揺らしてパジャマ姿で踊りだす。

『世界征服も夢じゃねえ。タイムマシンも、レーザー銃も、全部俺のものだ』

知子の目に悪魔の姿をしたスーパーマリオ、ガルネオが映り、そして思う。この人はワリオだ、と。

ガルネオの笑い声は気味悪く、しゃべるたびに口から飛び散る唾つばが汚らしい。

両親も、気違いのように騒ぎ出したガルネオを怯えた目で見ている。言葉が分からないから尚さら怖いのだ。

召使いが知子たちを囲む。

圭介は知子たちに声を掛ける。まだ圭介の額の汗は乾いていない。

「パパさん、ママさん、知子さん。もう大丈夫です。身の安全は保障されました」

安全と聞いて父が真っ先に言う。

「ジョゼフさん、これはどういう事ですか？」

圭介は、ガルネオがそばにいたのであとで、という意味を含めて視線をガルネオに向ける。

ガルネオは、近くにいた女の召使いの手を取って一緒に踊っている。

「パパさん、とりあえず彼らに従って移動しましょう」

「分かった」

知子たちは召使いに連れられてリビングを出て行く。

最後に、知子の耳に嬉々として踊っているガルネオの奇声が届いたところでリビングの扉は閉められた。

32：時差ボケ

今日は5月4日。

イタリアの孤島。ガルネオ島は今日も晴れていた。

シチリア自治州にあるガルネオ島は、イタリアの南に位置しているだけあって、5月の日差しは暑く感じる。

気候は日本と似ているが、湿度が日本より低いため、空気がサラッとしていて肌に心地よい。

知子は今朝、圭介から今日が5月4日だと聞かされてビックリした。なぜなら、知子は2日過ぎの5月5日だと思っていたからだ。

知子がそう思うのも無理はない。知子が拉致されたのが5月2日の夜。厳密に言えば深夜を過ぎているので、5月3日の三日月が地平線から顔を出す時刻になる。

三日月が昇る時刻が深夜2時半くらい。車で岐阜県から名古屋港まで移動し、名古屋港からはクルーザーで移動し、水陸両用飛行機で空を飛び、大海原のどこに停泊していたのか分からない空母に着陸し、空母にいた時は朝陽が水平線にあったのを知子は記憶している。

日の出の時刻は5時くらい。5時頃に小型飛行機で空母を飛び立ち、あとは朝陽と一緒に空を移動してイタリアに来たのだ。

途中、飛行機は補給のためイスラマバード国際空港に着陸したの

だが、知子は眠っていたので気づいていない。

その眠っていた時間を知子の体は2日過ぎたと判断をして、知子自身もそう思っていたのだ。

地球の裏側へ海外旅行をした事がある人が必ず経験する時差ボケを、10歳の知子は今経験していた。

知子は起きたばかりのベッドの上で指を折って寝た回数と過ぎた日を確認する。どうしても経過日数が合わない。

昨夜、圭介からイタリアと日本は時差があるという説明を受けているのだが、知子はまだ理解しきれていなかった。

パジャマは昨夜の入浴後に召使いが持ってきたのを着ている。素材は感触からして綿。悪くはない。

昨夜入った風呂も、銭湯のように広く、母と一緒に入れてよかったと思っている。ただし、住み込みの召使い用の風呂に一番に入れたもったとは気づいていない。

夕食はご飯もあったが、日本のように炊き込みではなく、おかゆになっていた。智曰くりゾットというものらしい。あとはパスタやピザ。おいしかったが、日本のパスタやピザとは風味が違っていた。

一番知子の印象に残っているのは昨夜の夕食後の出来事だ。

圭介はガルネオと別れてから、通訳をして召使いの言葉を知子たち家族に伝えた。

「大人しくしているなら、客用のリビングと個室を行き来してもいいそうです」

それを聞いた知子たち家族は、夕食後、一息ついてから圭介の部屋へ行ったのだ。

圭介の部屋には智がいて、二人してベッドに腰掛けて何かを会話していたのだが、知子たち家族を見るなり、圭介は会話をやめて、ドアにいる知子たちを中へ招いた。

中は個室なのでベッドが1つに、テーブルが1つ、椅子が1つあるだけで狭い。

知子はベッドに腰掛けていた智の隣に座った。

今の智は知子に微笑む。

知子は王子智の青い目の笑顔が嬉しくて智の左頬にあるアザを指さした。

「頬っぺ痛い？」

「ちょっとだけ痛いかな」

「大丈夫？」

「うん、僕は大丈夫だよ。知子さんもいろいろあって怖かったでしょ。大丈夫？」

「私も大丈夫」

智の話し声は優しく知子の耳に響いて心地よい。

智と知子が笑顔で会話をしているうちに、父はテーブルにもたれ、母はその横にある椅子に腰掛けた。

知子も母も、圭介や智に聞きたいことがいっぱいあり、特に父の圭介に問い質そうとする意気込みは凄かった。

「圭介さん、これはどういう事ですか？ あなた方は未来から来たって言うし、なぜ私たちは拉致されてここに連れてこられたんですか？ 一体ここはどこなんですか？」

圭介としては予想していた展開だったらしく、落ち着いた青い眼で父を見て話し始めた。

「ここは、イタリアの南部にある島です。島はマフィアのドン・ガルネオが所有しています。ここで話す事は全てマフィアには秘密にして欲しいのですが、実は、そちらの知子さんは、ノーベル物理学賞を受賞する人なんです」

「は？」

父が開けた口は、両方の扁桃腺が見えるほど大きく開いていた。

知子は特にやる事がないので父の口の中を覗く。

圭介は、父の表情を笑う事なく真面目な表情で説明をする。

「未来の知子さんは、大学を卒業後、大学院に入り、院内で新相対

性時空移動理論を書き上げ学会へ提出します。それで博士号を取得するのですが、その後も知子さんは時空移動の研究を続け、28歳の時にタイムマシンを発明するのです」

「うちの知子が？ タイムマシンを発明？」

父が圭介に聞き返すたびに、父の顔は手を使っていないのに目の周りにシワが寄って面白い表情になる。

33：戸惑い

知子は、父の表情を見て静かに笑いながら、大人たちの会話を聞くが、圭介は全く笑っていなかった。

「はい、そうです。そのタイムマシンを欲しがる者や団体が、未来には沢山おりまして、タイムマシンを売ってくれ、知子さんを研究所に招きたいと、交渉を持ちかけてくるのはいつもの事で、タイムマシンを盗もうとしたり、知子さんを拉致しようと強硬手段に出る不屈きな者もあり、未来の知子さんは国際レベルで保護される立場となっています」

知子の父はもう何も聞き返さなかった。顔は驚いたままなのだが、黙って頷いて無言で圭介の話を催促している。

圭介は、知子の父の表情が幾分落ち着いてきたのを見ながら話を続ける。

「その後タイムマシンの量産が可能になると、タイムマシンの特許権やノーベル物理学賞を欲しがる者が現れ、今度は過去の知子さんの命を狙うようになったのです」

そのあとは、智が説明をする。

「時空を移動するには特殊なエネルギーが必要になります。僕たちは時間エネルギーと呼んでいます。その時間エネルギーが無許可で2008年に向けて使われたのです。その時のエネルギー数値は世界各地の時空移動を研究する施設で計測されました。計測の報告は国際科学アカデミー時空移動研究所に入り、研究所から連絡を受

けた日本は、至急2008年の知子さんの身辺警護をするように、時間警察日本支部に要請をしたのです。その命令を受けたのがSPの僕でした」

「SPってなあに？」

知子の質問を聞き、智はまた笑顔になって答える。

「SPはね、セキュリティポリスといってね、人を危険から守る仕事なんだよ」

知子は、だから智は毎朝一緒に登校してくれたんだと思った。

今度は母が質問する。

「じゃあ、圭介さんもSPなの？」

「いいえ、私はタイムマシンのエンジニアです」

圭介の答えを聞いて声を出した者はいなかったが、父親が一番驚いた表情をして固まっていた。

母は少々戸惑いながら聞く。

「タイムマシンのエンジニアのあなたが、どうしてここに来たんですか？」

「未来では、タイムマシンの完成に伴って、新しい法律ができました。時間犯罪に関する法律です。その中に、タイムマシンを過去に保管してはならないという項目があります。それは過去の誰かがタ

イムマシンを発見して悪用するのを防ぐためです。私は2008年に飛んだタイムマシンを未来に戻すためにきました。もしそれができなければタイムマシンを破壊しなければなりません。それともう一つ」

圭介は急ににっこりとして知子を見る。

「私も技術者として、ノーベル物理学賞を受賞した加藤知子さんの子供時代の生活を見てみたかった。まあ、これは任務以外の事なので、未来の人には秘密にしておいて欲しいのですが」

圭介は苦笑する。

父は、拉致された状況下で未来の人間に告げ口なんかできる訳がない、と思ったが、そのツツコミは知子を助けるため、未来からわざわざ来てくれた礼としてあえてしなかった。

その後も、これからどうすればいいのか？ 助けは来るのか？ など、両親の圭介に対する質問は続き、圭介は「定期連絡がなくなったので、未来の時間警察も私たちを探していると思います。ガルネオがタイムマシンの技術を欲しがっている限り、知子さんと両親は殺される事はありません」と説明をし、そのほかの質問には全て分からないと答えた。

昨夜の知子は、難しい表情をしている大人たちの顔を見ながら、ずっと会話を聞いていた。

タイムマシンは、アニメやマンガを見ているから知っている。でも自分が作るとは到底思えない。

ノーベル物理学賞は、毛ガニを食べた日に圭介から説明を受け、昨夜の大人たちの会話も聞いていたが、一夜明けた今もよく分からない。

今の知子が理解している事は、ここが日本ではなくイタリアだという事と、自分たちが拉致されてここに連れてこられた事だけ。

今ベッドに座って足を動かして遊んでいる知子は、昨夜の大人たちがしていた話の意味がよく分からなくても、誰が何を言ったのかは一言一句思い出せる。昨夜の王子智の笑顔も思い出せる。キング圭介の笑顔も思い出せる。両親もいる。クルーザーに一人でいた時に比べたら、ずっとずっと安心でいられると思っていた。

そういう訳で現在は5月4日の朝なのだが、大人たちはいろいろな事があったせいで疲れて眠っているのか、両親も誰も知子の部屋に來ない。自分から両親の部屋へ行ったほうがいいのかと考えていると、ドアからノックの音がした。

『失礼します』

中年女性の召使いが部屋に入ってくる。化粧のない顔だが、ガルネオやトロッキオと比べると、とても優しい表情をしている。ただし、その召使いが何を言っているのか話す言葉は分からない。

知子はベッドから降りた。

「待つて。圭介さんだったら、言葉が分かるから。今連れてくるから」

走り出した知子を召使いは引き止めた。知子の顔の前に指を一本

立てて見せる。

「何？」

知子が召使いの指を見ていると、召使いは知子の裸足を指さした。

「下がどうかしたの？」

召使いは体の向きを変えて外からワゴンを引っ張ってくる。

そのワゴンには衣類と靴が載っていた。

召使いは絨毯の上に靴を置く。茶色の子供用の革靴だ。

「私がこれをはくの？」

知子が足を出すと、召使いは何度も頷いた。

知子は足を入れる。きつくて足が入らない。

すると召使いは別の靴を絨毯に置いた。それも茶色の革靴。今度のは少し大きいがはけない事もない。知子は召使いの前で両方の足を革靴に入れてはいて見せた。

召使いは知子が靴をはいたのを確認すると、今度は衣類を手渡した。

パンツ・肌着・服・スカート・靴下・春用の上着・ハンカチ。必要なものは全て揃っている。

「着替えるの？」

知子は聞くが、召使いは会釈をすると部屋を出て行ってしまった。

34：くるりと回転

知子は渡された衣類を見る。きつと着替えるのだらうと思う。

服は無地だが変わった織り方がしてあり織り目が模様となって表面に浮き出ている。スカートの裾は膝下まであり腰はゴムが入っていてフリーサイズになっている。靴下は白でフリルがいっぱいいていた。

知子はフリルがついた靴下をはくのは親戚の結婚式依頼だと思いながら、パジャマを脱いだ。下着も変えないといけないので、それも脱いで素っ裸になる。召使いがくれたパンツをはく。サイズは少し大きい別問題はない。

肌着も着る。服に手を伸ばす。その服を掴んだ時、またドアからノック音がした。

「知子さん、起きてる？ 朝ご飯ができたって」

智の声がして、智はすぐにドアを開けて中に入って来た。

智は着替えがすんでシャツとジーパン姿になっている。

知子は持っていた服で体の前面を隠す。急な事で声も出ない。

智は着替え途中の知子を見て赤面する。

「うわっ、ごめん」

智は一目散に部屋を飛び出した。

「知子さん、ごめん」

ドアの向こうから智の音がする。智はドア際に立っているようだ。

知子は持っていた服を急いで着る。スカートも靴下もはく。靴をはいて、そっとドアを開けて外を覗いた。

智はまだドアの傍に立っていた。智の顔はまだ赤い。

「知子さん、ごめんね」

知子の顔も赤くなる。

「見た？」

「見てない」

智は首を横に振る。

知子も一緒に首を横に振って、智の言葉を否定する。

「ううん。智さん、絶対に見た。だって私と目が合ったもん」

「そんなに見てないよ」

智は弁解する。

「やっぱり見たんだ」

「だから、知子さんの顔から下は見えてないって」

知子は2、3歩足を進めて、右足を軸にくるりと回転して体の向きを智に向けた。

「この服かわいい？」

知子が急に話を変えたので、今度は何を言い出したのかと智の青い瞳は知子をじっと見る。

智が答えないので、知子はもう1度聞いた。

「見てないんでしょう？　じゃあ、今見てどう思う？　かわいい？　似合ってる？」

智は鼻からスーッと息を漏らし、口を閉じたまま喉を鳴らして笑ってから顔いっぱい笑顔になる。

「かわいい、お姫様みたいだ」

「うわぁーい」

知子は有頂天になる。

喜んではいやぐ知子がどこかへ飛んで行ってしまいそうで、智は手を伸ばした。

「朝ごはんを食べに行こう」

「うん」

知子は智と手を繋いだ。

5月4日の朝。知子と智は朝食を摂りに一緒にリビングへ行く。

リビングには、父と母、圭介が先に来て椅子に座っている。

服もきちんと着替えている。きっと召使いが持ってきた服だろう。

知子は智の手を放して母の隣に座った。

朝、顔を合わせたら必ずしなければならない事がある。

「ママ、パパ、おはよ」

知子は朝の挨拶をする。

「おはよ」

母は挨拶をするが、父は挨拶をしない。

父はテーブルに両腕を置いて、どこか一点を見つめて考え事をしている。父に何かあったのだろうか。でも、朝から機嫌の悪い時もあるので父の事は後回しにして、知子はとりあえず圭介にも挨拶をする。

「圭介さん、おはよ」

「知子さん、おはようございます」

圭介はいつもと変わらぬ極上の紳士の趣で挨拶をした。

智は圭介の隣に座る。圭介が智にぼそりと小声で聞く。

「さっき、騒ぎ声が聞こえたが、何かあったのか？」

智の顔が真っ赤になる。

「いつ、いや、何もないよ」

智は持ったばかりのフォークを落としてしまう。

智のかなりの動揺に圭介はもう一度聞く。

「本当に、何もなかったのかな？」

今度の圭介は知子に聞いたのだが、フォークを拾っている智はそれに気づかずに答える。

「本当になんにもなかったから」

智が返事をしてしまうので、圭介は視線だけで知子にも聞く。

「何もなかった。と思う」

知子も赤面しながら返事をした。

相手はキング圭介。知子の着替えの最中に智がドアを開けてしまった事までは分からないにしても、智と知子の間に何かがあったと

感じているようだ。

知子は鋭い圭介の勘にドキドキしながら目の前のパンに手を伸ばした。

朝食を摂り始める知子。今の知子は、様子が普通じゃない父の事を忘れてしまっていた。

35：神経衰弱

朝食後、知子の父は母の部屋にいた。

父は難しい顔をして椅子に座っている。母は父と向かい合うようにしてベッドに腰掛け、そんな父を同情ともいえる表情で見続けた。

「私は知子に嫌われるだろうな」

「でも仕方がないわ。加藤の苗字はいつぱいあるし、知子の名前だっていつぱいあるもの。人違いかもしれないのに、こんな所に連れてこられて、うちの知子がノーベル賞を取るなんて聞かされても信じられないもの」

平凡な家庭からノーベル賞を受賞する子供が生まれるなんて、誰が想像できようか。

母もまたその一人で、喜ぶどころか今の軟禁生活に憤りを覚えて
いる。

きつと父も心の内に納得できない激しい何かを抱いているに違いなかったが、今の父は静かに座っていた。

知子の両親の沈黙は続き、だがそれは長年連れ添った夫婦にしかできない無言の会話で、それが終わった時、父は無言で椅子から立ち上がった。

「あなた、気をつけて」

母は父に手を伸ばす。父は母の手を握る。

「私にもしもの事があつたら、知子を頼むぞ」

「そんな事を言わないで」

父は母の手を放す。

「あなた」

父は母の声を聞きながら部屋を出て行った。

リビングでは知子が智と遊んでいる。トランプで神経衰弱をしているようだ。

父はチラリと目配りだけして、リビングをあとにした。

父の行き先はガルネオがいる所。父は通路を歩き、すれ違った召使いを呼び止めた。

召使いは、父の顔を見て目を見開く。父がリビングから離れた場所にいた事に驚きを隠せないようだ。

父は召使いに通^{つう}じるようにゆっくりと言った。

「ガルネオさんに、お会いしたい」

『ガルネオ様？』

日本語とイタリア語の隔たりがあっても、ガルネオだけは通じるようだ。

「そう、ガルネオ」

召使いは頷く。そして手招きをすると歩き出した。

父も召使いについて歩き出した。

壁に飾られた絵画。所々にある彫刻。全てガルネオが所有する美術品。不当な手続きでガルネオが手に入れているとは、父は知らないの多しさ。ガルネオの裕福振りがうかがわれる。

通路に敷き詰められている絨毯^{じゅうたん}。その上を行き交う召使いの人数。父を案内している召使いは、十字路をいくつか曲がりエントランスに出ると、あのガルネオが朝食を食べていたリビングの扉を開けた。

中ではガルネオが人工芝を広げて、ゴルフのパターの練習をしている。

服はアロハシャツにサーファーズボン。口には葉巻をくわえている。

召使いはガルネオの傍に立って恭しく頭^{うなづか}を下げた。

『ガルネオ様に、お会いしたいそうです』

『ん？』

ガルネオは召使いを見て、次に父を見た。

『なんだ？』

ガルネオは外国人体型。傍で見ると思った以上に大きく感じる。

父はたじろぐ。しかし、家族を守るために言わなければならない事がある。

「あんたに話があつて来た」

『分からん。何を言ってるんだ、こいつ？』

ガルネオが周りを見ながら言うと、トロツキオがどこからともなく現れてガルネオの横に並ぶ。トロツキオも柄の違うアロハシャツを着ている。その下は綿のズボンのようだ。

『ガルネオ様、通訳を呼びましょうか？』

『ああ、頼む。だがあいつは呼ぶな。訳ありかもしれねえからな』

『分かりました』

トロツキオは返事をする傍にいた子分に指示を出した。

ガルネオが言ったあいつとは圭介の事。ガルネオはいくつも危ない橋を渡ってきたマフィアのドン。今回の話し相手は知子の父なのだが、何かあると勘が働いて、自分の子分の日本語が分かる者を呼びに行かせたのだった。

通訳はすぐに来た。アジア系の顔立ちをしている。日本人の血が混じっているのだろうか。

通訳はガルネオから指示を受けると口を開いた。

「何か話があるんですよね？」

「そうです。タイムマシンについてです」

通訳はガルネオと話す。ガルネオの表情が変わる。

「ガルネオ様はゆっくり話がしたいので、あちらの椅子に座れとの事です」

「分かりました」

父はガルネオが朝食を食べていたテーブルの椅子に座る事になった。

父の前に水が入ったグラスが置かれる。

ガルネオも座ると、ガルネオは早速水を口に含んだ。

『運動をすると口が渴く。で、あんたはタイムマシンの何を話しに来たんだ？』

父は緊張しながら通訳を挟んで話し始めた。

「知子は将来タイムマシンを発明します。しかし、知子が大人にな

るまで待たなければならない。私たちもそれまでここで暮らさないといけない。それよりも、もっと手っ取り早い方法を思いついたんです」

『ほう。それはなんだ？』

ガルネオが笑顔になったので、父も緊張しながら笑顔を作る。

「私たちと一緒にいる男、年上の方はタイムマシンのエンジニアです。あの人にタイムマシンを作らせたらどうでしょうか。あなた方は早くにタイムマシンが手に入るし、私たち家族も日本に帰れると思っんです」

『確かにそうだ』

ガルネオは通訳にそれだけ伝えるように指示をする。それからガルネオは、父がイタリア語が分からない事をいいことにトロツキオに笑いながら話す。

『聞いたか、トロツキオ。あの混血、タイムマシンのエンジニアだと』

『はい、聞きました』

トロツキオも笑いながら返事をする。

『この男は、自分の仲間を俺たちに売る代わりに、家に帰りたいんだ』

『それもこの耳で聞きました』

ガルネオはトロツキオと笑うだけ笑ってから父を見た。

『お前ら家族が日本の家に帰る。これだけでいいんだな？』

「そうです。私たち家族を日本の我が家に帰して下さい」

『分かった』

ガルネオは席を立った。

『早速、奴の所へ行くぞ。お前も、お前もついて来い』

ガルネオは人差し指を動かして、トロツキオと父について来るように指示を出すと、歩き出した。奴と呼んだ圭介の所へ。

36：パパが決めた事

父は来た道を戻っていく。ガルネオの歩くスピードは60を超えている歳の割に早く感じる。

ガルネオは客間のリビングに来るとテーブルでトランプをしていた智に声を掛けた。

『あいつはどこだ？』

知子は急に現れたガルネオを見てビックリする。

あいつと言われただけで智の頭の中に圭介の顔が浮上する。

『呼ぶから待って』

智は知子にも言った。

「危ないから部屋に入っておいで」

「うん」

知子は椅子から降りて部屋へ行く。部屋の中に入りドアを閉めると、知子はドアに耳をつけて外の話し声に耳をそばだてる。

智は部屋にいた圭介を呼び出した。

『外へ。ガルネオが待ってる』

圭介は部屋から出てきた。歩いてガルネオの前で立ち止まる。圭介の背は、ガルネオと同じくらいで、一緒にいても見劣りはしない。圭介はトロッキオの隣に知子の父が並んで立っているのを気にして、父をチラリと見てからガルネオを見た。

ガルネオは、圭介の前で葉巻を吹かしながら言う。

『お前、タイムマシンのエンジニアだつてな?』

圭介の顔色が変わり、トロッキオの隣にいる父を見る。

「パパさん、話したのか。どうして?」

「仕方ないでしょう。私たち家族は、あなた方のせいで拉致されたんだから。あなたがここに残ってタイムマシンを作れば、私たちは日本へ帰れる」

智が声を大きくして言う。

「僕たちは、みんなを助けに来たんですよ」

「助かってないじゃないですか。それに知子がタイムマシンを発明するのはもつと先の話です。それまで私たちは関係ないはずだ」

圭介は言う。

「パパさん、それは違う。確かに今の知子さんは、タイムマシンと関係がないように思えるかもしれない。でもそれは、知子さんがタイムマシンを発明するまでの道のりを歩んでいるからであって、決してタイムマシンとの関係が切れている訳じゃないのです。タイム

マシンに乗り過去と未来を行き来すれば分かる事ですが、知子さん以外にタイムマシンを発明できる人はいません。いわば知さんは、タイムマシンの起源ともいえる存在なのです」

今の圭介は、品の良い極上の紳士とは思えないほど強い口調で父に訴える。

「物が生まれるには、その前の段階でいろいろなプロセスが必要になります。時は遙か昔からその様々なプロセスを紡ぎ未来へ運んできました。宇宙の誕生。地球の誕生。人類の誕生。そしてやっとタイムマシンが誕生する段階になったのです。知さんは、これからいろいろな事を経験して大人になったある日、タイムマシンを発明する事になります。パパさんも知さんが大人になるためにいろいろな影響を及ぼす大切な存在なのです。知さんにとって父親という身近な存在であるパパさんが間違った行動をとれば、直接知さんの運命に関わってきます。タイムマシンを発明する知さんに関わってくるという事は、全人類の運命に関わってくるといつても間違いではありません。それほど過去と未来は影響し合っているのです。パパさん、タイムマシンを発明する知さんの父親だという事をもっと自覚して下さい」

ガルネオとトロツキオは、圭介と父の言い合いを面白そうに見ている。

ドアに耳をつけて会話を聞いていた知子は、いても立ってもいられずドアを開けて部屋から飛び出した。

父がトロツキオの横に立っている。

「パパ、なんで一緒にいるの？」

話している内容はよく分からないが、父がガルネオの味方をして
いる事だけは、知子にも分かる。

智が駆けつけて知子の肩を掴んで知子を制止する。

「出て来たら危ない。部屋へ戻るんだ」

「だって、パパが」

母も部屋から出てきて知子に言う。

「知ちゃん、これはパパが決めた事なの」

「ママ、イヤだ」

父は知子に歩み寄る。

「パパたちは、関係のない事に巻き込まれたんだ。だからあの人に
事情を説明して、私たちは日本に帰るんだよ」

「でも、圭介さんがここに残るんでしょ？ そんなのイヤ。どうし
て圭介さんだけがここに残らないといけないの？

私はみんなと一緒に帰りたい。みんなと一緒にお家に帰りたいの」

父はしゃがんで知子と真正面に向き合って言う。

「知子。パパの言う事を聞くんだ」

「イヤ。パパ、お願いだから、みんなと一緒に帰れるように頼んで」

「それはダメなんだ」

「パパ、お願い」

「ごめんな、知子」

知子は父の胸で泣き出した。

ガルネオは冷めた目で知子を見ている。

トロツキオはガルネオに声を掛けた。

『なんだか飽きてきました。そろそろ戻りましょう。ガルネオ様』

『そうだな。トロツキオ、そいつを連れて来い。忘れるなよ』

『はい』

トロツキオは返事をする圭介の腕を掴んだ。

『来い。一緒に来るんだ』

『待て。僕も一緒に行く』

智は知子の肩から手を放した。

知子は歩き出した智を見上げる。智がどこへ行くにつとっているのか、10歳の知子でも察しがつく。

「行っちゃダメ！」

智は引き締まった表情でトロツキオの所へ歩いて行く。知子を一度も見ずに。

トロツキオは智に言い捨てる。

『ガキのお前なんざ、お呼びじゃねえ』

『僕は未来の大学で機械工学の学位を修めている。エンジニアの助手として使えるはず』

トロツキオに決定権は無く困惑した表情で答えを求めてガルネオを見る。

ガルネオは興味ありげに智を見た。

『タイムマシンが作れるなら必要だ。そのガキも連れて行け』

言ってガルネオは歩き出した。

トロツキオは嫌味を込めて智に言った。

『ついて来い。だよ』

圭介と一緒に歩き出す智。

知子は泣きながら父の肩から顔を出す。

「智さん！」

それでも智は振り返らずに歩いて行く。

父は知子の口を手で塞ぐ。

「知子、静かに。騒いで彼らの機嫌を損ねたら今度こそ殺される」

声が出せず言いたい事が言えない知子は、泣きながら父の肩を拳で叩く。

「知子、すまない」

父は知子が走り出さないように抱きとめながら、ずっと謝り続けた。

37：軽い

圭介はガルネオのあとを追うように歩いていた。圭介の左腕にはトロツキオの手が張り付き、指が肉に食い込んでいて痛い。

圭介の右側を歩いている智の表情は、知子とトランプで遊んでいた時の笑顔が消えていた。

圭介は横目でトロツキオの身体を見て、銃を所持していないか確かめる。

トロツキオは、知子の扱いを見る限り、相手が子供であっても容赦しない非情さを持っている。

下手に口答えをすれば銃で撃たれるのは必定だが、今のトロツキオは素肌直接アロハシャツを着ていて、胸にも腰にも銃を身につけていなかったため、圭介は少しだけ安心した。

『手を放してくれないか？』

今のトロツキオは銃を向けないだろう、という安心感が圭介の進言を進める。

言われたトロツキオは、ギロリと大きく開いた二重の瞳を圭介に向けた。

『バカな事を考えるなよ』

『ああ』

圭介の頷きに、トロツキオは手を放した。

トロツキオが手を放しても、握られていた圭介の左腕はまだ痛みを訴え、トロツキオの指の感触が残っていて気持ち悪い。

ガルネオは機嫌良く圭介の前を歩いて鼻歌を歌っている。何がそんなに嬉しいのだろうか。

ガルネオが進んでいく通路は絵画や彫刻が無い通路ばかり。そのうちドアも無くなり、更に進んだガルネオは一番突き当たりにある大きな両開きのドアの前で立ち止まった。

ガルネオはズボンのポケットから鍵を出して鍵穴に差し込む。ガチャリと大袈裟かと思えるほどの大きな音を立てて解錠すると扉を開けた。中は暗くて何も見えない。

その中にガルネオが入って行く。圭介もトロツキオに押されて中に入った。中はひんやりとして肌寒い。

ガルネオは壁を触ってルームライトのスイッチを入れる。スイッチはいくつもあるらしく、何回か音がする。その音ごとに部屋の各部分に光りが当たり部屋の様相が圭介と智の目に入ってきた。

中は窓が一つも無く、壁もコンクリートが剥^むき出しになっている。床もコンクリート。家具も棚も無い。エアコンの設備も無い。この部屋が肌寒いのはそのためだ。

部屋は広く、その中心に窓付きのユニットハウスが置かれている。屋根は無く一辺が同じ長さで大きなサイコロのようだ。なぜ部屋の

中にまたユニットハウスが置いてあるのだろうか。

「あれは……」

圭介の口から日本語が漏れる。

ガルネオは歩いて行き、中にあるユニットハウスの外壁に手を付いた。

『こいつは急に庭に現れた。青白く光る竜巻と共にな』

圭介も歩いて行き壁に触れる。壁に触れた瞬間、圭介の目つきが変わる。

「間違いない」

圭介は触れただけでそれが何か分かるようだ。

智も壁に触れる。

「どうしてここに……」

智もそれがなんなのか知っているようだ。

ガルネオはしゃがんで下に手を入れて、ユニットハウスを片手で持ち上げる。

『しかもこいつは軽い』

ユニットハウスはゆっくりと傾く。そしてすぐに手を引いて立ち

上がると、ユニットハウスはコトンと音を立てて元に戻った。ガルネオはユニットハウスの外壁にもたれ、手を叩いて手についたほこりを払う。

『こいつがタイムマシンだというのは分かっているんだ。だが、こいつの動かし方が分かん。こいつをすぐに整備して使えるようにしろ』

『それは無理だ』

言ながら圭介は窓の中を覗いている。

ガルネオはいきなり圭介を突き飛ばした。

38:BOX

圭介は体を揺らして倒れないように数歩さがる。智も圭介の後ろに回って、圭介の体を支える。ガルネオは早足で近づいて圭介の胸に人差し指を立てた。

『てめえ。どういっつもりだ。あの家族が死んでもいいのか?』

『違う。話を最後まで聞いてくれ。これは旧型のタイムマシンだ。正確に言えば、旧型のタイムマシンの一部といったところだ。これだけでは時空移動はできん』

智も言う。

『これにはエンジンがついてないんだ。それに伴う操縦桿そうじゅうかんも操縦席もない。よく見て。あるのは天井と壁と床と窓と、実験内容を測定する器具だけ。どこにもエンジンがついてない。だから、軽くて持ち上がる』

ガルネオは窓に額をつけて中を覗く。

『そんなはずはねえ』

トロツキオも別の窓から中を覗く。

『嘘だろ!?!』

智の言うとおり、中は殺風景でエンジンらしきものも操縦席もない。

圭介は歩いてまた外壁に手をつく。

『これは時空移動の実験の初期の頃に作られたものと同機種だ。あの頃の時空移動システムはかなり大型で、旅客機の格納庫くらいの広さが必要だった。そこにこれを設置して、流動する時間エネルギーを一時的に増幅しマイナス方向に流す。つまり、この箱を時間エネルギーの流れにのせて過去へ移動させたんだ。君たちのいる時間にね』

圭介はガルネオに説明してから、両手で外壁に触れながら言葉を続ける。

『しかし、私が知っている実験BOXとは大きさが違う。私たちが行っていた実験で使われたBOXは、手の平にのるほど小さかった。なぜこれはこんなに大きいんだ。試験体を乗せていたのか。しかし、バリアシステムも何もない状態では人体に影響が出るはず』

圭介の表情が険しくなる。

『もしや、それを承知の上で人体実験を行っていたのか。私たちと同じ時空移動技術を得るために……』

圭介はぶつぶつと言いながら考え込んでいたが、ガルネオが吼えほた時に我に返った。

『おい、勝手に訳の分からない事を言ってるじゃねえ』

ガルネオは両腕を振り上げて圭介の襟首えりくびを掴む。

『いいか。こいつを使えるようにしろ。でないと、あの家族を二度と動けない体にするぞ』

智がガルネオの腕を掴んで言う。

『そんなの無茶だ。エンジンが無いのに』

智は、ガルネオがこれ以上圭介に乱暴しないように防いでいるようだ。

『だったらエンジンを作れ。今すぐにだ』

ガルネオは邪魔な智に苛立ちながら手を放した。マフィアのドンとしては力ずくでも言う事を聞かせたい。しかし、タイムマシンのエンジンに傷を負わせ、タイムマシンが作れなくなれば、ガルネオはかなり困る。頼みを聞いてくれと、囚われの身である圭介たちに頭を下げるのも腹立たしい。ガルネオは圭介の足元に唾を吐いた。

『必ずタイムマシンを使えるようにしろ。必要なものがあつたら言え。俺たちが揃えてやる。いいな！』

ガルネオは言い捨てると、圭介と智を残して立ち去った。

トロツキオも、圭介と智の前に唾を吐き鼻で笑いながら部屋を出て行く。部屋に残された圭介と智を見下してバカにしているのだ。それを知らしめるためにドアを閉めて態とガチャリと大きな音を立てて鍵をかけた。

ガルネオとトロツキオの足音が遠ざかって行く。

足音が聞こえなくなってから、圭介はエンジンの無いタイムマシンを見た。

「私たちがどんなに考えても、どのような策を講じても、未来の知子さんの言うとおりになっていく。誰が作ったのかは知らないが、このタイムマシンの実験BOXも彼女が言ったとおり、今私たちの目の前にある」

「それでも、未来は変えていかないと。僕自身のためにも。僕はそのためにも辛い訓練に堪えSPになって、2008年の過去に来たんだから」

智の瞳は、目の前のタイムマシンより、ずっと先にある何かを見ているようだ。

「智……」

圭介はじつと智を見る。

「そんなに見ないでよ。恥ずかしいじゃないか」

智ははにかむ。

「お前は、時間警察日本支部のSP。私はタイムマシンのエンジンア。お互い立場は違うが、同じ思いなんだなと思ってな。そうだな。私も、未来の知子さんが言った結末にしたくない。私も、そのために過去に来たんだから」

圭介は腕まくりをする。それから両頬を叩いて気合を入れた。

「なら、善は急げだ。智、今から必要なものを書き出すぞ」

「だったら、最初に必要なものは、紙とペンだよ」

智は両手を広げて見せて、ここには実験BOXのタイムマシン以外何も無いよと圭介に示す。

圭介は智の頭に手を置く。

「お前は、有能な助手だよ」

頭を撫ぜると見せかけて髪をくしゃくしゃと掻きむしる。

智は笑いながら声をあげて嫌がった。

39：トランプ

知子はリビングの椅子に座っていた。

目の前のテーブルの上にトランプがあり、智と遊んだ神経衰弱がやりかけのまま置いてある。次の順番は智なのだが、その智はもういない。智は自らの意思でガルネオについて行ってしまったからだ。

その原因は父の裏切り。父が家族を日本に帰すために辛い選択をした事は、あのあと母から説明を聞いて知っている。

だから智は父の裏切りに腹を立てて、知子の身边警護を放棄して圭介について行ったのだろう。知子を一度も見ずに、再会の言葉もなく。

知子は、圭介をガルネオに売った父が許せなくて、父と母と一緒にいるのがイヤで一人リビングの椅子に座って、智が裏返すはずだったトランプをずっと眺めていた。

父を叩いて散々なほど流した涙も、今はもう出てこない。

王子智とキング圭介が連れて行かれて悲しいが、日本に帰れると知らされて、心の底では安堵し喜んでいたりもする。

父に対しては、自分を守ってくれたという感謝の思いがあるものの、ほかの方法が思いつかなかったのか、という圭介をガルネオに売った事への怒りや憎しみもある。

これらの感情は形も質量も無いのに、心の中にあるだけでとても重

く感じてしまう。今までに、こんな複数の感情を、しかも正と負という両極端に近い感情を同時に抱く事があつただろうか。

10歳の知子にとって、それは初めての経験で、この感情をどう処理していいのか分からず、だからといって両極端な感情を心の中にずっと置いておくのも辛くて、知子の生きる気力の足かせになっていた。

リビングに人が現れて知子の隣に立つ。

見なくても智や圭介じゃない事は分かる。隣に立った人が何を望んでいるのかも想像がつく。いつかタイムマシンを発明する自分をどこかへ連れて行こうとしているのか、部屋へ戻れと言おうとしているかのどちらかだ。いつの間にか今後の展開を予想する癖も身についてしまっている。

知子はトランプに手を伸ばした。裏返しになっているトランプを箱に戻していく。

トランプを箱に入れている途中で肩を叩かれる。知子はゆっくりと首を動かして振り返り肩を叩いた相手を見た。

肩を叩いたのはトロッキオ。トロッキオはにやりながら知子を見下ろしている。

知子は驚きもせずトランプを全部箱の中に入れると椅子から降りた。表情のない知子の顔。

もうトロッキオが近くにいても怖くない。むしろ智がいる所へ連れて行って欲しいとさえ思えてくる。

トロッキオの子分もいて、部屋にいる両親を外へ連れ出している。

両親は背中を押されながら知子の横に立った。

子分の一人が両親に言う。

「一緒に来て下さい」

外国語訛りはあるが日本語だ。がいくしなま見た目も日本人と変わらない。通訳者のようだ。

母は聞く。

「あなた、日本人なの？」

「いいえ。イタリア人です。混血ですが、どこの国なのかは知りません」

父は言う。

「さっき通訳してくれた人だね。君には日本人の血が流れていると思うよ」

通訳者は笑う。

「日本語は学校で覚えた言葉です。それだけで日本人と決め付けるとは。噂どおり日本人は平和ボケしているんですね」

通訳者はトロッキオに会話内容を報告する。

トロツキ才も笑い出し、手を振って知子たち家族を相手にするなと通訳者に指示を出した。

通訳者は返事をしたあと全くしゃべらなくなり、知子たちは指示に従って歩き出した。

歩く知子の目に高価そうな絵画や彫刻が順番に映っていく。

十字路をいくつか曲がっていると父が急に騒ぎ出した。

「おかしい。変だ」

母が聞く。

「なんで？」

「今朝、あつちの道へ行ったら広い玄関があつて、そのあとに庭が見える、私たちが最初に来たあの部屋へ行つたんだ。でも逆の方向に曲がった。私たちは玄関に向っていない」

「え！ 本当に？」

「間違いない」

両親は顔色を変えて言うがトロツキ才に逆らえる訳もなく歩きながらしゃべっている。

玄関に向っていなければどこへ行く？ 知子には、もうどうでもいい事だった。

歩いていると通路の途中に螺旋階段らせんがあり、階段は下へ続いている。

トロッキオはその階段を下りて行く。当然、知子たち家族も下りて行く。

階段を下りるとまた通路がある。ただし、絵画も彫刻も絨毯じゅうたんもない。通路の先は暗くてよく見えない。それが無性に通路を狭く長く感じさせる。

通路は一本で十字路もない。ドアが等間隔で並んでいるだけ。

トロッキオはいくつ目かのドアの前で足を止めてそのドアを開けた。

40：人の道

通訳者は、父と母に言う。

「中でお待ち下さい。との事です」

父と母は言われたとおり部屋の中に入る。

知子は黙ってトロツキオを見上げていた。無表情で。

トロツキオがそれに気づく。

『なんだ？』

通訳者が知子に聞く。

「どうしましたか？」

通訳の言葉は知子の耳に届いているのだが、知子はトロツキオの顔を見ながら言った。

「ここに閉じ込める気なの？」

通訳者が知子の言葉をトロツキオに伝える。

トロツキオは鼻で笑う。知子の頭髪に臭い鼻息がかかる。

『そつだ。さつさと入れ。ガキ』

トロツキ才は力いっぱい知子の背中を押した。

知子は前屈まえかがみなり転びそうになりながら部屋の中に入る。何とかバランスを取って上体を起こすと振り返ってトロツキ才を睨んだ。

トロツキ才は怯える両親を面白そうに眺めている。

通訳者は両親に言う。

「これから、ここで生活して下さい。食事も朝昼晩ここに運びます。トイレとバスは、この部屋の中にありますので好きに使って下さい」

父が叫ぶ。

「そんなバカな。あなた方は言ったはずだ。日本に帰してくれと」

「確かに言いました。だけど、生かして日本に戻せば拉致の事実が露見して、私たちは国際的に指名手配される。だから、あなたたちが日本に帰るのは死体になってからです」

「約束が違う！」

「違っていません。死体だろうがなんだろうが、日本に帰れるのは確かなのですから」

「そんな……」

父は床に座り込んだ。

「あなた」

母は崩れるようにしてしゃがみ父に寄り添う。

トロツキオはにやつきながら体の向きを変えて自分と会話をしながら歩いて行く。きっと両親の不様な姿を笑い話にしているのだろう。楽しそうに歩くトロツキオの背中が遠ざかって行く。

部屋に残っていた通訳者は最後にこう言った。

「あなたたちを殺さないのは、人質になってもらうためです。あのタイムマシンのエンジニアが、私たちに逆らわないようにです」

通訳者が部屋を出るとドアは閉められた。そのあとすぐに鍵をかける音がする。

知子は無表情で閉められたドアを見ていた。

後ろからする泣き声に気づいて知子が振り向けば、両親は床に座り込んで泣いている。

悲しむ両親を見ても知子の無表情は変わらず、知子は歩いて両親を通り過ぎて、一番手前にあったベッドに腰掛けた。トランプをポケットから出す。中味を出して自分でシャッフルして布団の上に裏返して並べる。そして一人で神経衰弱を始めた。まるで何事も無かったかのように無表情で。

両親が立ち上がり肩を寄せ合って歩いてベッドへ移動しても、知子は神経衰弱を続けていた。

父はベッドに腰掛けて両腿りょうももにひざに肘を載せて頭を抱えている。

知子の耳に父の言葉が届く。

「死体じゃないと日本に帰れないなんて……」

父の隣に座り慰める母の声も知子の耳に入る。

「パパ、殺されないだけマシじゃない」

「だが、私はあの人たちを彼らに売ったんだぞ」

「でもそれはジョゼフさんだけで、智さんは勝手について行ったんだし。それに私たちが日本に帰るためには仕方なかったじゃないですか」

「だとしても、私が人の道に外れた行いをした事に変わりはない」

「それは私も同罪だわ。パパだけが悪いんじゃないわ」

知子は同じ数字が揃ったカードを拾ってもう片方の手に集める。全部の数字のペアを作り終わると、またシャッフルして布団の上にランプを裏返しにして置いていく。

その知子の瞳に涙が浮かぶ。もう出てこないと思った涙。知子は涙で前が見えなくなっても、ずっと一人で神経衰弱をやり続けた。智との楽しかった神経衰弱を思い出しながら。

日本に帰れない。友達にも会えない。圭介も智もいない。そばに
いる両親も信じられない。もう知子には智と遊んだランプしか残

っ
て
い
な
か
っ
た。
。

41：子供の日

次の日。

5月5日の朝。日本では子供の日。

ガルネオ島は今日も晴れていた。

カモメが水平飛行で白い翼を優美に動かして飛んでいる。

ガルネオは庭が見えるいつものリビングで朝食を摂っていた。

本日はトロツキオも同席していて機嫌よく会話をしている。

ガルネオは目の前のコンフレークを景気よく口に放り込んだ。

「タイムマシンの完成が待ち遠しいな」

トロツキオはハムと野菜のサンドイッチを食べている。

「完成が早くなった切っ掛けが、父親の裏切りとは、腹が据^{ねじ}れるほど笑いましたよ」

「全くだ。よそのファミリーのトラブルほど面白いものはない」

「地下室放り込んだ時の娘の顔を、ガルネオ様に見せてやりたかった。恨^{うら}みがこもった娘の黒い眼。あの娘、きつと親殺しの大物になりやすぜ」

「そいつは楽しみだ」

ガルネオは声をあげて笑ってから、グラスに入った赤ワインを飲み干した。

ガルネオとトロツキオは、今後の話をしながら朝食を続けている。

その最中に、庭に突風が吹いた。突風は椰子やしの葉を運び、葉はガルネオ自慢の青い芝生に降りる。

会話をしていたガルネオは、落ちてまた浮上した椰子の葉の動きを見て、食事の手を止めた。

「なんだ？ あれは？」

トロツキオも庭を見る。

「椰子の葉が庭まで飛んでくるなんて珍しいですね」

ガルネオは気づく。また庭で何かが起こる事を。ガルネオは席を立った。

「また来るぞ」

トロツキオはガルネオに釣られて立ち上がる。

「何がですか？」

ガルネオは神の御前に来た信者のように、絶対的な存在を求め、それを得るために静かな表情で庭を見ている。

トロツキオが何が来るのかと思い庭の隅々を見渡し探していると、芝生の上に青く光る竜巻が現れた。

現れたばかりの竜巻はとても小さく、宙に浮かんでいて腰を振って回転運動をしていたが、次第に太く大きくなり、芝生にくっついて更に伸び上がり、天にも届く勢いで一気に成長を遂げた瞬間、竜巻はあっという間に消え去った。

まるで夢を見ていたかのような超常現象。その竜巻はガルネオ自慢の青い芝生の上にあの箱を残す。日本の茶室のような大きな箱のタイムマシンを。

ガルネオは走って庭に飛び降りる。トロツキオも走る。ガルネオは一番にタイムマシンにたどり着いてドアを開けた。もうトロツキオは危険だからと言ってガルネオの行動を止めたりはしない。

だが、ガルネオはドアを開けてすぐに後退りする。ガルネオの顔は驚きで眼と口が開いている。

不審に思ったトロツキオはガルネオの横に並んだ。

「ガルネオ様、どうしたんですか？」

そのトロツキオも驚いて後退りする。

タイムマシンの中には人がいた。トロツキオと同じくらいの30前後の男が。顔の作りもなんだかトロツキオに似ている。

男はタイムマシンから出るとトロツキオに抱きついた。

「トロツキ才爺じいちゃん！」

トロツキ才は万歳をしたまま硬直する。抱きついてくる男の顔は確かに覚えがある。だが誰なのかが分からない。

「トロツキ才爺ちゃんだと!？」

驚いて男の言葉を繰り返したガルネ才は頭を回転させてトロツキ才より早く答えを出す。

「もしかしてお前、未来から来たトロツキ才の孫か？」

男は喜びながらガルネ才の手を取って握手をする。

「さすがドン・ガルネ才。そうだよ。俺はトロツキ才の6番目の娘の腹から生まれたトロツキ才の孫。カプリツ才さ」

カプリツ才は腕を広げて成長した自分自身をガルネ才とトロツキ才に見せた。

普段のガルネ才なら、呼び捨てにされた時点で怒り狂い、場合によつては呼び捨てた相手を撃ち殺している。だが、驚きの連続とタイムマシンの再来で、怒るのを忘れてしまっている。

トロツキ才はその隣で頭を抱えてよろめく。

「6番目の娘は、去年生まれたばかりで、まだ言葉もしゃべれないのに、俺の孫を生んで、その孫は成長して俺の目の前にいて……。俺の娘に手を出した奴は誰なんだ？」

トロツキオの脳は突然の事態を把握するの^{はあく}に時間がかかっていた。

ガルネオはカプリツオの手を握りながら言う。

「で、カプリツオ。未来はどうなっているんだ？ 俺の島はまだ無事か？」

カプリツオは思い出したぞとばかりに話し始める。

「そうだよ、それ。俺は、それを教えるために来たんだ。未来は大変な事になっているんだ。ガルネオファミリーはとくの昔になくなっちゃった。ガルネオの島もねえ。代わりにでかい建物がおっ建てしまつてよ。警備が厳重で入れやしねえ。ガルネオは獄死。未来のトロツキオ爺ちゃん^はは刑務所の中で死にかけた」

ガルネオは声を張り上げて怒りを露^{あらわ}にする。

「未来は全然変わってねえじゃねえか」

「そうなんだよ」

カプリツオはタイムマシンの中から木箱を引き摺^ずって出す。木箱は持ち上げれないくらい重いようだ。

「未来から武器を持ってきた。これで国際指名手配されても安心だ」カプリツオが木箱を開ける。中にはレーザー銃がいくつも入っている。

「トロツキオ爺ちゃん。これを持って」

カプリツオは、トロツキオにレーザー銃を渡す。

「これも。これも」

カプリツオは、トロツキオのズボンのベルトの前や後ろにレーザー銃を差し込んでいく。

42：イタリアマフィアのドン

トロツキオは、カプリツオのされるがままになっていたが、やっと思考が追いついて、武装準備をしているカプリツオに聞いた。

「急にどうしたんだ？　なんでレーザー銃がいくつも必要なんだ？」

「もうすぐここに警察が来る」

「何！」

「マジか！」

血相を変えているカプリツオの言葉に、ガルネオとトロツキオは同時に驚く。

カプリツオは木箱を引き摺ってリビングへ移動しながら言う。

「未来からFBIも、CIAも、インターポールも、軍も、みんなこの島に来る」

リビングに来たカプリツオは木箱をひっくり返して未来の武器を床にぶちまける。

量産された金色のレーザー銃ブローニング・ベビーは、床の上を滑り放射線状に広がる。

「全員できるだけ武装して、奴らに備えるんだ」

ガルネオの子分は次々にレーザー銃を拾って身につけていく。

ガルネオは棒立ちで叫んでいる。

「なんでこんなことになっちまったんだ？ もうすぐタイムマシンが完成するって時によ」

武装準備をしていたカプリツオが急にガルネオに向き直る。

「あんたがいけないんじゃないか！」

「なんだと！」

目ん玉をひん剥いて怒るガルネオ。

トロツキオは喧嘩が始まりそんなガルネオとカプリツオの間に入って仲裁をする。

「カプリツオ。お前、ガルネオ様になって事を言っただ。ガルネオ様、こいつをお許し下さい。あとできつく叱っておきやすんで」

ガルネオはトロツキオを突き飛ばす。

「うるせえ」

そしてカプリツオも突き飛ばす。

「貴様、どういつつもりだ？ ああ？ トロツキオの孫だと思って話を聞いてやりやあ、いい気になりやがって。お前が生きているのも、俺が孤児だったトロツキオを拾ってやったからなんだぞ。その

孫のお前は、この俺にたてつく気なのか？」

カプリツオは突き飛ばされても、すぐに戻ってガルネオの前に立つ。

「あんたがノーベルの娘をいつまでも生かしておくからこうなったんだ。博士がレーザー銃と手紙を送ったのに、台無しにしゃがって俺がタイムマシンで過去に移動して、開発されたばかりの10丁のレーザー銃を盗むのに、軍とドンパチやって何人の俺の子分が死んだと思う？ てめえ、分かってるのか？」

「てめえだと！ うるせえ、小僧。俺は世界五大魔王の一人だと呼ばれているんだ。このイタリアマフィアのドン・ガルネオを、てめえ呼ばわりするとは、生かしちゃおけねえ」

ガルネオは腹からレーザー銃を抜く。

カプリツオは持っていたレーザー銃でドン・ガルネオの胸を打ち抜いた。

「未来じゃあ、俺がドンなんだよ」

赤い光線はガルネオの胸を貫通し、その後ろの壁にも穴を開ける。

「お前が未来のドンだと……」

ガルネオはカプリツオを見据え銃を構えたまま後ろへ倒れた。

眼を見開いて仰向けに倒れたガルネオを見て、トロツキオが悲鳴混じりの声を上げて言う。

「カプリツオ、なんて事を！！ ああ、ガルネオ様」

カプリツオは、トロツキオの前に手を伸ばして、今にもガルネオに覆いかぶさりそうなトロツキオの行動を止める。

「爺ちゃん。もうこいつに恩を感じる必要はねえ。このガルネオは、爺ちゃんの親父とお袋を殺して財産を奪った奴なんだ」

「なんだって！」

「俺はタイムマシンで過去を見てきた。爺ちゃんの親父はイタリアマフィアのドンだったよ。ガルネオはその子分さ。裏切ったガルネオから爺ちゃんの親父を助けたかったけどよ。時間警察の奴に邪魔されて、赤ん坊の爺ちゃんを助けて乳母に預けるのが精一杯だったよ」

トロツキオを育ててくれた女は貧乏だった。日々の重労働が崇^{たた}つて女はトロツキオが幼い時に死に、孤児になったトロツキオの前に突然ガルネオが現れた。不思議な縁だとトロツキオは思っていたが、まさか両親を殺していたとは。

トロツキオは、恨みとも悲しみといえない複雑な感情を抱く。

「なんて事だ……。俺は何も知らずに今までドン・ガルネオに尽くしてきたのか」

「そういつこつた、爺ちゃん」

カプリツオは、ガルネオに散々利用されてきたトロツキオに同情

しながら、トロッキオの背中を軽く叩いた。そして、周りにいる子分に叫ぶ。

「いいかお前ら。これからは、このドン・トロッキオ様がこの島を支配する。この未来のレーザー銃で」

カプリットはレーザー銃を掲げる。

「お前らもレーザー銃を手に取り。未来の武器があれば怖いもの無しだ。この銃で日本人のやつらを殺せ。今すぐにだ」

子分は床にあるレーザー銃を拾って次々に走り出す。

カプリットはそれを見て安心した表情になる。

「爺ちゃん、これで未来が変わる。俺たちの歴史が始まるんだ。もうこんな小さな島に隠れて暮らす必要もねえ。ローマの真ん中に俺たちの豪邸をおっ建てようぜ」

「カプリット、よく来てくれた」

「爺ちゃん」

トロッキオとカプリットは抱き合う。もうすぐ到来する前途明るい未来を喜び合った。

43：ドロドロ

5月5日の昼。

知子たちは地下室で昼食を摂っていた。もうリゾットもパスタもピザも無い。人質の知子たちに与えられた昼食はパンとシチューだけ。

部屋にミニテーブルはあるが、椅子がないために三人ともそれぞれのベッドに座って食べている。

知子の父は落胆し後悔に苛まれて食事が進んでいない。母も食事のペースが遅い。知子一人だけが黙々と食べていた。

地下室に閉じ込められている知子は、食べるか寝るか、トランプで遊ぶくらいしかやることがない。

そして、父と母は口を開けば泣き言ばかり言い、同じ部屋にいる知子の耳にはうだつの上がない両親の言葉が否応にも入ってきて、知子の心は重くなるばかりだった。

トランプをしない食事中は智と一緒にいた時の事を思い出す。智とは初めて出会ってから毎日欠かさずに会っていた。智が自分を身辺警護しなければならぬSPという必然からなのだが、今思えばあの頃の知子にとっては十分過ぎるほど幸せな時間だった。

それが「ノーベル」という言葉で智の王子としての笑顔は消えてしまう。算数のノートを智に見せた時もそうだ。あの時の智は知子を見る事もなく帰ろうとした。知子はあの智の表情を今も覚えてい

る。そのあとに智を追いかけたのは、智の笑顔が欲しかったからだ。そして智は知子の望みどおりの笑顔を見せてくれた。

だったら、また智を追いかければいい。また智を追いかけて手を握れば、智はきつと王子の笑顔で答えてくれるはず。智王子は、姫である自分を守るSPなのだから。

そのために知子は考える。どうやってこの地下室から脱出しようかと。

とりあえずご飯を食べてしまおう。なんでもいいから少しでも栄養をとらなければ思考は働かない。学校の先生が常日頃つねひごろから言っている事だ。

知子はパンを噛む。出されたパンは固く、パサついていて飲み込みにくい。シチューも残り物を温め直したようで、煮込み過ぎて気持ちの悪いドロドロ感がある。それでも知子は食べる。シチューを全部飲み干し、器についたシチューもパンで拭き取って食べる。水も飲む。残ったパンもよく噛んで食べる。全部食べ終わり、知子はゲップをした。

食べるものは食べた。これで脳に栄養がいく。知子は考える。脳の隅々まで思考を巡らす。だが智の顔しか浮かんでこない。智の事がこんなにも好きだったのかと改めて思う。

知子は智の事ばかり考えていては目的が達成できないと反省し、圭介を思い出すことにした。激しいときめきを覚える智とは違い、圭介を思い出すといつも安心感に包まれる。

圭介は花をくれたり菓子をくれたり、場合によっては知子の事を

かわいいとか綺麗だと言って嬉しい気分にしてくれる。正直なところ、リップサービスは智より圭介のほうが上手だ。

智も言葉に詰まるとなんだかんだいいながら圭介を頼ったりしていた。圭介は智にとってもキングだったんだなと知子は思う。

そして父と話をしている時の圭介は、未来の自分を知っているような口調だった。過去と未来は常に影響し合っていると圭介は言っていたが……………。

知子は過去の自分を思い出し、そこから未来の自分の姿を想像する。大人になった自分はこういう人間になっているんだろうと。

そして気づく。過去と未来が常に影響し合っているという事は、未来の自分も10歳の時、この部屋にいたんだ。と。

知子は立ち上がって空になった食器をテーブルに置いた。そのあとトイレに入る。トイレが終わり手を洗う。

トイレから出ても、父の食事は終わっていない。母もパンが食べにくいようで残している。知子は歩いて父の前に立った。

「パパ、ちゃんと食べて」

「知子、すまない。パパがバカだった」

父は昨日から謝るばかりで話にならない。

「ママも残さずに食べて」

「無理よ。こんなまずいもの」

知子たちのために毎日の食事を作っている母は残り物を出されたと分かるようで、なかなか食べようとしない。

父と母は昼食を残すつもりでいるようだ。自ら犯した過^{あや}ち^{まち}で食事が喉を通らない両親。

知子は自分の両親がこんなにも頼り甲斐のない存在だったのかと思ひ、両親の肩幅を小さく感じてしまう。

「二人ともダメ。全部食べて。いつも残したらダメって私に言うじゃない」

母は力のない声で言う。

「知ちゃんも残していいから」

母はもう、知子がどこへ行っても恥^はずかしくないように躡^しける気がないのだろうか。

44：生命力

知子は空になっている自分の食器を指さす。

「私は全部食べた」

「偉^{えら}いわね、知ちゃん」

母は知子の食器を見ずに言う。

知子は母の体を揺^ゆする。

「もうママ、しっかりして」

父の体も揺する。

「パパもしっかりして」

知子は両親のベッドの間に立った。

「私は大きくなったらタイムマシンの設計をしないといけないんだから」

父は知子の発言にも頭を抱える。

「何を言ってるんだ。タイムマシンは、ジョゼフさんがガルネオと一緒に作っている最中だろ」

「大人になったら私がもう一台作るの」

母も言う。

「あとからタイムマシンを作るにしても、ここからじゃあ学校に行けないのよ。どうやって機械の知識を身につけるつもりなの？ いままで生きていられるかも分からないのに」

「未来の私はタイムマシンを発明したんでしょ？ だったら私はきつとここから逃げ出したのよ」

「知子、何を言っているんだ。ここは島だぞ。地下室から逃げたとして、どうやって島から出るんだ？」

「そうよ、知ちゃん。それにあの頑丈なドアも壊さないといけないのよ。そんな事したら絶対に見つかって殺されてしまうわ」

「でも圭介さんが言ってた。過去と未来は常に影響し合っていて、私はタイムマシンの起源ともいえる存在だって。だったら未来の私も10歳の時にこの地下室にいたのよ。そして、ここから脱出したじゃないと未来から智さんたちが助けに来た意味がないもの」

父は横に食器を置いて知子の肩を掴む。

「知子、静かに。希望を持ちたいのは分かる。パパだってそう思いたい。だがな、現実はその甘くはないんだ」

「そうよ、知ちゃん。この話が外の人に聞こえたら、ママたち本当に殺されてしまうわ。お願いだから二度と脱出の話はしないでちょうだい」

完全に諦めて生きる気力が感じられない両親の姿。

10歳の知子の生命力は、まだ生きたいと反発する。

「もう、パパママ。なんで分らないの!!」

知子は地団駄を踏んで言う。親が言う事を聞いてくれなければ、子供がとる行動は1つしかない。

古より伝わる子供の必殺技「駄々捏ね」^{いじしえ}

辞書には「駄々を捏ねる」で存在し、子供の多くが会得する必殺技として世界的に有名である。

ただし、必殺技「駄々捏ね」の使用期限は個人差があり、親が持つ必殺技により封印されてしまう事が多い。

知子は手足をバタつかせ飛んだり跳ねたりして、自分の言い分を父と母に言い続ける。

「私は逃げたいの。タイムマシンを作りたいの。大人になって10歳の私を助けていの。パパもママも、圭介さんも智さんも、みんな助けていんだってば」

父は知子を抱きかかえ抑える。^{おさ}

「知子、いい加減にしなさい。そんなドラえもんのマンガのようにはいかないの」

「イヤだ。パパ、放して」

母も父を手伝って知子を抑える。これが我が家だったら、駄々を捏ねてもどうにもならない事を教えるために知子を放っておくのだが、殺されるかもしれない今は放っておく訳にはいかない。

「知ちゃん。ちゃんと言う事を聞きなさい」

静かにしなさいと知子に言う父と母も、声が大きくなってくる。

そうしているうちに、ついに両親が恐れていた事態になる。

外で足音がしたのだ。

父は口を横一文字に結び、知子の口を手で塞ぐ。母も身構えてドアを見る。急に静かになる三人。だが、それが手遅れだという事を両親は気づいている。

「もしもの時は私が全て責任をとる。だから、お前は知子と共に生きてくれ。もし、知子の言うようにタイムマシンを作る事ができたら、その時は私を助けてくれ」

「あなた……」

父の腕の中には知子がいる。その腕を伸ばして母の手を握る。

「愛している。お前も知子も」

「あなた、私も……」

母も父の手を握り返す。

ドアから鍵を開ける音がする。

知子たち三人は息を飲む。もう知子も騒がずにじっとしてドアを見ている。

ドアが開く。外から黒い服を着た男が二人入って来る。

1番に入って来た男が言う。

「今、愛してるって聞こえたが、お邪魔だったかな？」

2番目に入って来た男は中の様子を見て言う。

「大丈夫みたいですよ」

入って来た二人は、圭介と智だった。

知子は走って智に飛びつく。

「会いたかった。すっごい心配だったんだよ」

知子は王子智の青い瞳を間近に見て、再会を心の底から喜ぶ。

智は知子を抱き上げて、知子の顔についている涙跡を見ながら言う。

「沢山泣かせてしまったようだね」

「だって、智さん何も言わずに行っちゃうんだもん」

「こめん。言いたかったけど、マフィアにバレたら、こうして助けに来られなくなってしまう」

「いい。圭介さんと智さんが来るの、分かってたから。っていつても、ずっと考えてたから、分かったのはさっきだけど」

圭介は、智にくつついている知子を見る。

「知子さんは、こんな時分から賢い人だったんだね」

圭介は知子の頭を撫ぜた。

45：未来の法律

父は立ち上がって歩く。

「ジョゼフさん。私はどうあなたに謝ればいいか」

母も父の横に並ぶ。

「未来から私たちを助けに来て下さったあなた方に、あんな事をしたのに。こうしてまた来て下さって、なんとお礼を申し上げますよいか」

圭介の青い瞳の輝きは、別れた時と少しも変わっていない。

「私もあなたたちに言いたい事がありますが、それはあとにしましょう。今は逃げるのが先決です。マフィアが隠し持っていたタイムマシンを壊していくつかの武器を作ってきました。未来の法律上、問題無く武器を扱えるのは時間警察の人間である智だけなんです。とにかく逃げましょう」

「分かりました」

父は返事をし、母はしっかりと頷いた。

両親と圭介は仲直りをしたようだ。知子は嬉しくなって智の顔を見る。智も笑顔で返してくれる。

「知子さん、走れる？」

知子は智の腕から飛び降りた。

「うん。ちゃんとトイレに入って、体を軽くして、逃げる準備をしたんだよ」

「そっか。本当に賢いな、知子さんは」

智は知子の頭を撫ぜる。

「日本に帰ったらタイムマシンを作るからね」

圭介が知子を見下ろす。

「知子さん、あなたはどこまで気づいているのですか？」

「圭介さんが言った、過去と未来は常に影響し合っているってのだけ。だから、未来の知子さんも10歳の時に、今の私と同じ目にあつたんでしょ。ちゃんと逃げて、日本に帰ったからタイムマシンを作れたんでしょ」

圭介は感心する。

「そうです、知子さん。あなたはタイムマシンを使わなくても、未来を知る事ができるのですね」

「違うよ。圭介さんが言ったんだよ」

「私は、ここから逃げる話はしていませんよ。知子さん」

クスリと笑ってから、圭介は外を確認する。

智は、圭介と頷き合ってから、一番に部屋から出て通路の様子を確認する。

「僕について来て下さい」

知子が智のあとに続こうとすると、圭介が止める。

「知子さんは私のあとについて来て下さい」

知子は智王子と手を取り合って、可憐な姫として走りたかったが仕方なく諦めた。圭介のあとをについて行く。

「パパさんとママさんは、後ろを警戒しながらついてきて下さい」

「分かった」

「はい」

知子たちは通路に出た。小走りで移動する。途中、ガルネオの子分が2人倒れている。圭介と智が倒したのだろう。

知子たちは倒れている二人を避けて通り、螺旋階段らせんを上った。あの絵画と彫刻が並ぶ通路に出る。

智は迷いもなく十字路を曲がって進んでいく。別荘の構造が頭に入っているようだ。

いきなり前方にガルネオの子分が現れる。子分が懷に手を入れたのを見て、智は近くのドアを開けてその陰に隠れた。知子たちも

圭介の指示でドアが開いた部屋の中に避難する。

銃声と共にドアが低い音を立てて鳴る。弾丸がドアに当たっているのだ。

皮肉な事だが、ガルネオが大金をかけて豪華に作ったドアは、弾丸を止めて智たちを守ってくれているようだ。

子分は声をあげ腕を振って、智たちがいる事を周りに知らせる。子分たちはぞくぞくと集まり、今度は金色のレーザー銃で撃つてきた。赤い光線は弾丸を止めていたドアをいとも簡単に貫通して、隠れている知子たちの目の前を通り過ぎていく。

智はマフィアの様子をうかがいながら後退りをして部屋の中に入ってきた。

知子は胸をハラハラさせて智の動きを見ている。こういう時、姫は戦う王子を見守る事しかできない。

智は手を後ろに回す。

「手榴弾を2個」

圭介は懷から手榴弾を出して智に渡す。智の手に載った手榴弾はソラマメくらいの大きさしかない。

知子たち家族は手榴弾の小ささに目を見張る。特に戦争映画が好きな父の驚きは大きい。

智は光線の間を見計らってドアの陰から出て手榴弾を1つ投げた。

すぐに戻って身を隠す。

投げた先で青い光りが発光し、部屋に避難している知子たちの目にも青い光りが届く。

投げて爆発するのではなく、青く光る手榴弾。なぜだろうか？

青い光りが収まった頃、辺りは急に静かになった。子分たちは撃ってこない。

智は顔を出して周りを確かめる。

「OK、行ける」

智は部屋を出て先に行く。知子たちも小走りですいて行く。

さっきまでガルネオの子分がいてレーザー銃を撃っていたのに、今は誰もいない。一体、青い光のあとに何が起きたのだろうか。

知子は考えながら圭介のあとをついて行く。

十字路を曲がった直後、出会い頭に子分と遭遇する。子分は5人。

智は間を取ることもなくいきなり5人と戦い始めた。智は床を蹴って銃を向けた相手に飛びかかった。智の手足が伸びて銃を持った一人を倒す。そのあとに智に銃を向けた二人がほぼ同時に倒される。智の迅速な判断と予測行動により三人が床に倒れた。

残り二人も銃を向けて智を撃とうとするが、智は倒した相手のレーザー銃を拾って瞬時に動き、相手が智に照準を合わせているうち

に一人を撃ち、残った一人が智の闘争心に恐怖し智に向けてレーザー銃を乱射するも、智は冷静に判断をしてレーザー光線を交わし最後の一人を撃ち倒した。

46：鋭い杭

戦いに勝利し、床に倒れている5人に囲まれて、一人立っている智。王子とは思えない殺気が今の智から滲み出ている。

智の無駄のない動き。野生動物のような敏捷性^{びんしょうせい}。激しく戦ったあとなのに智の呼吸は乱れてはいない。それでも、智は大きく胸を動かして呼吸をする。ゆっくりと息を吐き、肺の中の空気が少なくなると同時に智の殺気も消えていく。

智は呼吸を吐き切ってから、陰に隠れていた知子たちに声を掛けた。

「さあ、行きましょうか」

知子は圭介の後ろから顔を出して智を見る。

智も知子の視線に気づいて笑顔になる。知子の恐怖心を少しでも減らそうとしている智の思いが知子に伝わる。

智の青い瞳は、知子を見るといつも優しい眼差し^{まなざし}になる。智は知子を警護するSP。立場的に最善の方法をとっているのかもしれないが、知子の胸の鼓動は、命の危険に晒され切羽詰った今の状況にいても高鳴りを覚えた。

この時、王子智は、知子の心の中でヒーローになる。

とにかくヒーロー智は強かった。出会い頭の応戦は絶対に負けない。智は殴り返されても瞬時に受け流し必要最低限の動きで相手を

倒していく。

レーザー光線が飛んできても智はレーザー銃で応戦し、撃ってくる子分の人数が多ければ圭介が渡す手榴弾で相手は消え失せる。

こうしてヒーロー智の活躍により、知子たちは無事に屋敷内を進み、なんとか玄関にたどり着いた。

目の前の玄関扉を開ければ、中心に噴水があるロータリーに出られる。

「外の車に乗って滑走路まで行きましょう。飛行機の操縦は私がしますので」

圭介は飛行機の操縦ができるようだ。

滑走路には拉致された時に乗った小型飛行機がある。きっとその小型飛行機に乗って島を脱出するのだろう。

圭介は玄関扉を開ける。

2日振りの外。吹き込んでくる爽やかな風。広がる青空。圭介たちは喜ぶ。無事に脱出できると。

知子も思う。これで日本に戻って大人になったら自分はタイムマシンを作るんだと。知子の頭の中では全てが順調に進んでいた。

しかし玄関の扉を開き切り、外の風景が知子たちの目に飛び込んできた時、順調だった知子たちの道のりは一変した。

圭介は外を見て眉を顰^{ひそ}めていた。智も先を睨^{にら}んでいる。両親は寄り添って震えている。

知子は、噴水の前で肩を並べて立っている、2人に増えたトロツキオを見ていた。

2人のトロツキオの両側にはロータリーの道を遮^{さへぎ}るようにして大勢の子分が横一列に並び全員金色のレーザー銃を持って、銃口を知子たちに向けている。

その中にガルネオの姿はなかった。

片方のトロツキオが叫んだ。

「お嬢ちゃん、交渉といこうじゃないか」

外国語訛^{がいくしなま}りのある日本語が知子たちの耳に届く。

知子がよく見ると、向って左側の日本語を話した男は、ぱっと見た感じトロツキオに似ているが顔が少し違う。トロツキオではないのだ。

圭介は叫ぶ。

「この子はまだ10歳。交渉は無理だ」

直後に、圭介の足元に一筋のレーザー光線が落ちて圭介の爪先のアスファルトから煙があがる。

それは黙れという意味と、知子が交渉に応じなければ殺すぞ、と

いう脅しおどが含まれている。

「嬢ちゃん、どうする？ 交渉するのか、しないのか？」

トロツキ才似の男は、知子にどちらを選ぶのか聞いているのだが、生きるためには交渉に応じるしかない。

それでも知子は10歳の学力で叫ぶ。

「こうしようって何？ 意味分かんない」

10歳の知子は「交渉」をまだ習っていなかった。我が家のように手の届く所に辞書がある訳もなく、知子の頭の中には、ひらがなの「こうしよう」しかない。

「胡椒こしやうなら、うちの台所にあるから、習ってなくても分かるんだけど」

知子は小声でブツブツと不平のように漏らす。

マフィアたちは、知子の言葉に驚いたのか、あれから何も言っていないし、レーザーも撃ってこない。

次は父が叫ぶ。

「この子は、まだ言葉を知らない。交渉が必要なら私が代わってする」

「ふざけるな！ てめえじゃあ、意味ねえんだよ」

父が言つと返事はすぐに返ってくる。レーザー光線も数発、父の足元に撃ち込まれる。

「あひゃ、ひゃひゃ」

父はステップを踏んで踊りながら逃げる。

「あなた」

後ろに下がった父に母は寄り添う。父は震え上がって母にしがみついた。

トロツキオの隣にいる男は一步前に出て叫んだ。

「知子。俺は未来から来たカプリツオだ。俺はタイムマシンでこのあとどうなるか、見てきたから知っている。このままお前たちが逃げれば、智という奴は死ぬぞ。それは困るんじゃないのか？」

知子は智を見た。智はカプリツオを睨んでいて、知子を見ようともしない。

その智の表情を、知子は経験したからよく知っている。父の裏切りにより圭介について行った時の智の表情が、今の智の表情と同じだと。

智は知子と目を合わさないようにして心情を悟られないようにしているのだ。

知子は考える。なぜ智は今の心情を悟られないようにしているのか？ 智は自分が死ぬ事を知っているからだ。じゃあ、圭介は智が

死ぬ事を知っていたのか？

知子は圭介を見る。圭介は既に知子を見ていた。知子は、圭介の青い瞳の色から、圭介も智の死を知っているのを感じ取った。

逃げれば智が死ぬという衝撃の予告。カプリツオが言った死の予告は、10歳の知子の胸に鋭い杭^{すどいくい}となって打ち込まれる。

走ってもいないのに、知子は口で呼吸をする。回避できない辛さに、胸が苦しみを訴えているのだ。

カプリツオは慈愛の無い表情で知子の答えを待っている。あまり待たせると、ここにいる全員がレーザー銃の餌食^{えじき}になってしまう。

知子が考えていられる時間は少ない。未来の知子は、今の状態をどう切り抜けたのだろうか。

47：心の繋がり

知子が俯うつむいて考え始めた時、圭介が叫んだ。

「智が死ぬのは困る。ここにいる全員がそう思っている」

「父さん！」

智から久し振りに聞いた圭介を呼ぶ言葉。

知子から見て、本当の親子なのか分からないが、圭介と智はタイムマシンのエンジニアとSPという立場の違いがあるものの、二人はなんらかの心の繋がりがあり、親子にも等しい関係のようだ。

圭介はなおも叫ぶ。

「私も未来から来た。だから、智が死んで、智以外の全員が助かるのは知っている。本来、時の摂理せつりに逆らう事は許されない。第三者が、これから起こるべき事実を変えると、それから先の未来にどのような悪影響が及ぶのかも知っている。だから時間エネルギーの流れを安全に未来へ導くためにも、智は死ななければならぬのは分かっているつもりだ。それでも、私は智を助きたい」

「父さん。少なくともあなたは、機械工学の博士号を持つタイムマシンの技術者だ。そのあなたが時の摂理に逆らうなんて、絶対にやっつてはいけない事だよ」

圭介は智を見る。

「それでも私は、智を助きたい」

「僕を助けたら未来の法律を犯す事になる。あなたが犯罪者になつてしまう」

「もし私が智を助けたら、智は時間警察の人間として、犯罪者になつた私を逮捕するのか？ 智？」

父が知子の前に歩み出て圭介の隣に並ぶ。

「だったら、智君を助ける事に同意した私も犯罪者だ」

もう二度と仲間を売ったりはしないと心に決めている父に迷いはない。

智は拳こぶしを握り締めて言う。

「二人ともおかしいよ。間違つてるよ」

智は玄関の扉を拳で叩いてから大人しくなった。首をうな垂れて泣いているようにも見える。

圭介はカプリットに言った。

「智を助けるには、どうすればいい？ お前の交渉に応じようじゃないか」

カプリットの口の端が吊り上る。

「簡単な事さ。智を俺たちに引き渡せばいい。俺はタイムマシンで

時空間を渡り、智の戦いを見てきた。智は強い。戦いの神マルスのようだ。性格は生意気みたいだが、未来の手術で脳をちよいと弄れば、有能な俺の子分になる。これで智は死なずにすむ。命が助かるんだ。安いだろ？」

知子の思考が止まった。その代わりに、ガルネオに連れて行かれた圭介の姿を思い出す。今度は智が連れていかれてしまうのか。しかも智の脳を弄る！？頭に穴を開けるって事？カプリツオの言葉は知子に新たな衝撃を与える。

知子は考えている場合じゃないと思った。その時。

「だめええええ」

知子はいきなり叫んだ。考えるより先に感情が口から出てしまう。

「絶対にダメ！ 智さんは、あんたにあげないんだからああ」

圭介は、知子の大声に体をビクつかせて驚く。

智も玄関の扉に手をついたまま知子を凝視している。智は、知子の大声のせいで、自分が死に直面している事を忘れていたようだ。

母は急いで知子の口を手で塞いだ。

「知ちゃん！ 静かにして。撃たれるじゃないの！」

母の声も大きい。父はビクッ仰天状態になっている。

カプリツオの目つきが怖くなる。日本語が分からないトロツキオ

は心配になって聞く。

『カプリツオ、どうした？ 交渉が決裂したのか？』

『爺ちゃん、それどころじゃねえ。もつと最悪だ。一体あの娘はなんなんだ！？ 俺の調子が狂って仕方がねえ。どうして子供って奴は、ああもバカな生き物なんだ』

カプリツオは何かに怯おびえている。少なくともトロツキオにはそう見える。

カプリツオは手を振り下ろした。

『全員殺せ。俺たちが生き残るには、もうあいつらを殺すしかない』

圭介は知子に覆おおいかぶい被さる。

「知子さん！」

智は玄関の扉を閉めて走り出す。

「逃げて！ リビングへ走るんだ！」

知子たちは来た道を戻ってリビングへ走り出す。

智が閉めた玄関扉から無数のレーザー光線が貫通して飛び出す。壁からも無数のレーザー光線が貫通して飛び出してくる。

智は体を張って、知子の両親の盾になる。圭介も知子を抱きかかえた。

知子の目に、智の背中に命中するレーザー光線が映る。

「智さん！」

きつと自分を抱きかかえている圭介の背中にもレーザー光線が当たっているに違いない。

父と母は振り返って智を見る。

「大丈夫か？ 智君」

「防御バリアがありますから、ちょっとぐらい当たっても平気です。僕がレーザーの盾になります。さあ、早く中へ逃げましょう」

知子は智がレーザー銃で撃たれて死んだと思い肝を冷やした。智の元気な姿を見る限り、まだ智は死ぬ時ではないらしい。では、智が死ぬ時はいつなのか？

48：テレビのリモコン

知子たちは走り、リビングへ駆け込む。

ガルネオが朝食をとっていたリビング。大きなガラス窓からは青く広がる芝生が見える。そのガラス窓の傍にガルネオが倒れていた。床にはおびただしい量の血が広がり、召使いが淡々とした表情で床に広がった血を拭き取りながら掃除をしている。

母は悲鳴をあげて父にしがみついた。父は母の背中を撫ぜながら
「^{つぶや} 咳くように言う。」

「一体ここで何があったんだ」

知子も何があったのか見ようとするが、圭介が知子の額を自分の肩に押し当てた。

「知子さんは、見ないほうがいい」

「なんで？」

知子は頭を動かしてみるが、圭介の大きな手は知子の頭を掴んでいるため動かせない。

「人が死んでいるからです」

「知ちゃん、絶対に見たらダメよ」

母も悲鳴混じりに言う。

知子が、誰がどうして死んでいるのか、どんな状態で死んでいるのか、考えているうちに、またもや扉や壁から貫通したレーザー光線が飛び出して知子たちを襲う。

無差別に発射されているレーザー光線は、リビング内を飛び交い召使いに命中し、召使いはバタバタと倒れていく。

知子の耳に、撃たれて苦しむ召使いの声が入ってくる。知子は怖くなって圭介にしがみついている手に力を入れた。

とりあえず知子たちは、圭介と智のバリアで守られているから大丈夫だが、追いついたカプリットたちに捕まってしまったら元も子もない。

圭介は逃げ道を探して辺りを見回し、芝生の上にある大きな箱に気づく。

「あれは！」

庭にカプリットが乗って来たタイムマシンがある。

智も気づき、知子たちを庭へ誘導する。

「外に出て」

庭に出た圭介は知子を芝生に下ろした。

「知子さん、自分で走れるね？」

「うん」

圭介は知子にレーザー光線が当たらないように後ろを警戒しながらタイムマシンに向う。

智も両親を先にタイムマシンへ走らせて後ろを警戒しながらタイムマシンへ向った。

圭介が走り寄ってタイムマシンの外壁に触れて、窓ガラスから中を覗く。

「ガルネオの屋敷内にあったものと同機種だが、これにはエンジンがある」

圭介はドアを開ける。

「みんな、これに乗るんだ」

知子たちはタイムマシンに乗り込んだ。

圭介は操縦席そうじゅうせきに座り、パネルのスイッチをオンにしていく。

最後に智がタイムマシンに乗り込みドアを閉めた。

圭介は操縦桿そうじゅうかんを握る。

「未来へ。私たちの時間へ移動します。未来へ行けば時間警察が私たちを保護してくれるはずです」

父と母は喜びの声をあげる。

「やった、これで助かる」

「私たち、助かるのね」

知子も父と母と手を取り合って喜ぶ。そして、死なずにすんだ智とも手を取り合った。

「よかった、智さんが死ななくて」

「うん。これもみんなのお陰だよ」

知子たちは手を取り合って喜び合った。

タイムマシンの周りに青く光る竜巻が起こる。タイムマシンは竜巻のエネルギーを受けて浮上する。

カプリットたちはリビングに駆けつけた。

リビングには召使いの死体があるだけで、知子たちがいない。

トロツキオは庭の竜巻を見て驚く。

『なんて事だ！』

タイムマシンは浮上し、その中に知子たちが乗っている。

カプリットからは笑顔が零^{こぼ}れている。

『爺ちゃん、大丈夫。これがあるから』

カプリットは懷から機械を出した。金属に包まれたボディにはボタンがいくつもついている。それはテレビのリモコンに似ていた。

『これを、こうして、こうすると』

カプリットはボタンを押していく。

焦るトロツキオ。

『方法があるなら早くしろ。タイムマシンが消えてしまつぞ』

カプリットがボタンを押している最中に、タイムマシンはマフィアたちの目の前から消え去った。

トロツキオは悲しみの声を上げる。

『消えてしまった。俺たちの希望のタイムマシンが……』

トロツキオは吹き残りの小さな青い竜巻が消えていく様をずっと見続けた。

知子たちは、タイムマシンの中で喜び合っていた。

「未来に行けるとは思わなかった。未来の私に会えるかな」

知子はとても喜んでいる。

智も死ななかった自分自身に胸を撫で下ろしている。

「きっと、未来の知子さんは、未来のケーキを出してみんなを歓迎すると思うよ」

母も嬉しさ一人ひとりおで言う。

「まあ、未来のケーキですって。もうパパ、どうしましょう」

「どうしようって、お前、食べるしかないだろう。ぬはははは」

父の笑いは止まらない。

圭介はみんなの笑い声を聞きながら操縦桿を握っていた。モニターの表示はタイムマシンが順調に1年ずつ未来へ進んでいる事を示している。そのモニターに緊急メッセージが表示される。

controlling automatically (自動制御中)

モニターに表示されている年数が過去に戻りだす。

圭介はパネルのボタンを押すが、自動制御が解除できない。

「大変だ。自動操縦に切り替わった。2008年に戻ってる」

「えええ!!!」

圭介以外の全員が同時に驚いて声をあげる。

49：過去

智がモニターを確認する。

モニターの真ん中に「controlling automatically」の文字が表示されている。

圭介は操縦席から降りて屈^{かが}んで床に手をつく。

「智、操縦を代わってくれ。なんでもいい、自動制御解除のパスワードを叩き込んでくれ。私は今から自動制御システムを壊す」

智は操縦席に座る。モニターを見ながらボタンを押す。智もタイムマシンの操縦ができるようだ。

「えっと……。世界征服。金儲け。女遊び。イタリア語がダメなら日本語か。それとも英語……」

智は思いつく言葉を入力するが、どのパスワードもエラーになる。

「マフィアが考えそうな言葉ってなんだ？ 分からないよ」

知子の父が後ろから言う。

「ケジメ。任侠^{にんきやう}。義理と人情は？」

「パパ、ダメよ。日本のヤクザじゃないんだから」

母はこんな時も父にツツコミを入れている。

圭介はモニター下のパネルを開けて、いろんな色の回線を引っ張り出している。

「これは時空座標計算システム。これは時空間推進システム。なんだ！？ この無駄な配線は？ ええい、自動制御システムはどこにあるんだ」

圭介は自動制御システムを探し出せないようだ。

そしてついに、タイムマシンのモニターは2008年を表示した。

マフィアたちの目の前に、また青く光る竜巻が起こりタイムマシンが現れる。

タイムマシンは静かに芝生の上に着陸すると光る竜巻は消え去った。

トロツキオはタイムマシンへ行く。中を覗くと、知子たちが騒ぎながらモニターを見ている。

圭介は四つん這いよつんばになって、四角くく開いている壁の穴からコードや機械の一部を引っ張り出している。

トロツキオは思いつきドアを開けた。

知子たちは一斉にトロツキオに注目する。

カプリツオがトロツキオの隣に立つ。顔や体型が似ているトロツキオとカプリツオ。血が繋がっているのは一目瞭然。トロツキオは

レーザー銃を知子たちに向けた。

カプリットは知子だけを見据え、その瞳孔は開いて中央の闇に知子の姿を映しこんでいる。

「知子。こんにちは」

外国語訛りの日本語が、粘り気のある発音となねばりけって知子の耳に届き、その気持ち悪さに知子の背筋に寒気が走る。

しかし、どんなにイヤな相手でもしなければならない時がある。

「こんにち……は」

知子は母にしがみつकिながら挨拶をした。生きるために。

カプリットは満足な表情をする。

「いい子だ、知子。こっちにおいで」

「行くな！ お前に知子さんは渡さない」

『動くな！』

レーザー銃を出したトロッキオに智は飛びついた。

トロッキオはレーザー銃を撃つが、智のバリアが働いてレーザーの威力は無力化する。

その智にカプリットは短機関銃を突きつけた。

『バリアで身を守っているとはな。道理で部下全員でレーザー銃を撃つても死なない訳だ』

動きを止めた智を見て、カプリットはトロッキオに短機関銃を渡した。

『爺ちゃん。バリアにレーザーのようなエネルギー攻撃は効かねえ。こっいつ時は弾丸のような物理攻撃じゃないとな』

トロッキオはレーザー銃から短機関銃に持ち替える。

『そうなのか』

『うん。これ、未来の常識』

カプリットは智を愛おしそうに見つめながら言う。

「智、俺はお前が欲しい。だが今はあとだ」

カプリットは知子に手を出した。

「知子。おいで」

知子は母にしがみついて動かない。

「知子、来ないのか？俺の言う事を聞かないと山田里美と安田佳枝を殺すぞ？二人は知子の大切な友達なんだから？」

カプリットは知子の友人をも把握している。里美と佳枝のところ

にマフィアの子分が潜伏しているのか。

「さあ、お姫様。こっちにおいて」

カプリツオはチロチロと赤い舌を見せて知子に話しかけながら捕らえる機会を狙っている。不気味に光る琥珀色こはくいろの瞳。

知子はカプリツオの顔がトカゲの顔に見えてきて、カプリツオの手に触るのもイヤなほどに気持ち悪さを感じてしまう。

しかし、このままでは智は奪われ、里美と佳枝もいようにされてしまう。

トカゲのカプリツオに人の道理は通じない。こうなったらもう戦うしかない。知子は母から離れた。

「知ちゃん!」

母は知子の手を握る。

『動くなと言っただろ。そんなに死にたいのか?』

トロツキオが母に短機関銃を向ける。

イタリア語は分らないが、何が言いたいのかは察しがつく。

知子はトロツキオを見た。

「ママを撃たないで。私、行くから」

知子はカプリツオの手の握る。気持ち悪いと思っていたカプリツオの手は人の温かさがある。カプリツオにも自分と同じ血が流れているのだ。

知子はこんな時にも考える。カプリツオはどうしてマフィアになったのか。カプリツオの過去に何があったのか。

知子は足を踏み出してタイムマシンから降りる。タイムマシンから降りただけなのに、知子は自分がカプリツオと同じ世界に踏み込んだような気がしてならなかった。

50：譲れない未来への思い

知子はカプリットと手を繋いで歩いていた。

二人が歩いているのはガルネオ自慢の芝生の上。まるで公園にいるようだ。

カプリットがマフィアじゃなければただの散歩に見えるだろう。それほど一緒に歩く知子には、カプリットが普通の人間に見えていなかった。

「どうしてカプリットさんは悪い人になったの？」

カプリットは足を止めた。

「悪い人！？ 冗談じゃねえ。俺は悪い事なんざ、これっぽっちもやっちゃあいねえ。俺はただ、不幸で貧乏な自分の未来を変えているだけだ。トロッキオ爺ちゃんも幸せにしてやりたいしょ」

知子の手を放して、外国人特有の大袈裟な身振り手振りで話す。

知子は話を聞いて、カプリットから普通じゃないズレを感じる。感じるが、トロッキオが智たちに短機関銃を向けているので、カプリットに「あんたの頭、とっても悪いと思う」と挑発的な事は言えない。

「でも、未来の警察に捕まる予定なんですよ？」

「捕まらねえよ。バカじゃないのか？ 何考えてんだ？ お前と話

していると調子が狂って仕方がねえ」

カプリツオに頭ごなしに言われ、知子の頭にカプリツオの息がかかる。その勢いで知子の前髪が左右に分かれた。

知子は口を尖^{とが}らせる。

「そんな事を言われたって分かんないよ」

そして、知子の頭にコツンと硬いものが当たった。知子が見ようとして首を動かすと、硬いものは頭の地肌を滑って額の真ん中に当たる。そうなると思いの外、目の前にきてともてよく見える。硬くて冷たい金色のレーザー銃が。

「もうバリアもない。お前を守る奴もいねえ。俺とお前の二人きりだ」

カプリツオの握るレーザー銃の銃口は知子の眉間を押さえていた。太陽の光りが当たり、金色の銃は一段と輝いている。

知子は目を細めて眩しそうにレーザー銃を見てからカプリツオの顔を見た。背筋に寒気が走るが涙は出てこない。

カプリツオの琥珀^{こはくいろ}色の瞳孔が開いていく。

「なんだ、怖がらないのか？」

「怖いけど、私、大人になったらタイムマシンを作る事になってるから、それまで死なないの」

カプリツオの瞳孔は大きく開き、真ん中の闇にまた知子の顔を映しこむ。その瞳は完全に知子を捕らえていて逃す^{のが}様子がない。

「そんな未来、俺が変えてやる。お前を殺して、俺たちを不幸にしたタイムマシンをこの世から消す。それで俺と爺ちゃんは幸せになれるんだ」

知子から見て、未来で生まれ育ったカプリツオには、幼い頃から抱^{いだ}いてきた譲れない未来への思いがある。

しかし、カプリツオから見て、過去で生まれ育った知子にも、譲れない未来への思いがある。

知子は額に銃口が当たっているにも関わらず叫ぶ。全身全霊を込めて、譲れない思いをカプリツオにぶつけた。

「イヤ！ タイムマシンは絶対に作る！ だって私、智さんのお嫁さんになりたいんだもん！！」

形勢はどう見ても、額に銃を当てられている知子が不利なのだが、知子はそれなりに頑張って仁王立ちになっている。

ちょうど知子とカプリツオが言い合いをしている頃、智たちはトロッキオの誘導でタイムマシンから一人一人順番に降りていた。

最初に父が降り、次に母が降り、圭介が降りる。そして、智が降りた時、あの知子の大声が智たちの耳に飛び込んできた。

「タイムマシンは絶対に作る！ だって私、智さんのお嫁さんになりたいんだもん！！」

父と母、圭介が同時に智を見る。

「智。やっぱり、朝のあの時、何かあったんじゃないのか？」

圭介は、偶然とはいえ智が着替え中の知子の部屋のドアを開けてしまった事実が知りたくて聞く。

智は懸命に弁解する。

「何もないよ」

「これから何かあるの？」

何も分かっていない母は、何がなんなのか知りたくて智の言葉端を拾って聞く。

「いえ。何もありませんって」

「じゃあ、もう済んだ事なのか？」

何も分かっていない上に、天然の父のツツコミは鋭く、^{すうじ}智はかなり動揺する。

「済んでいません。始まっていないんだから、済む訳がないでしょ」

両親は、智の意味深発言を興味津々に聞いている。

日本語が分からないトロッキオも、短機関銃を構えるのを忘れて

智の顔を見ている。

今短機関銃は誰も狙っていない。なのに、タイムマシンを降りたばかりの智は、周りからの視線を痛いほど身に受けて、矢面に立たされた心境になっていた。

知子は、自分の未来のためにカプリットと戦っていた。

「私が智さんと同じ大人になったら、タイムマシンに乗って、智さんのお嫁さんになって、ハネムーンは世界一周旅行をするの」

啞然としているカプリットに、知子は目くじらを立てて言い続ける。

「いい？ ちゃんと聞いて。まだほかにもあるの。私にノーベル物理学賞をくれるノーベルに、こんなにちはの挨拶もしないといけないの。大人になった私は、タイムマシンに乗って、いっぱい、いっぱい、やる事があるんだから！！」

これは10歳の知子が真剣に考えている未来の構図。

だが、カプリットには子供の戯れ事じゃれごとにしか聞こえない。

「うるせえ、糞ガキくそ！ 何がハネムーンだ。何がノーベル物理学賞だ。お前は今から死ぬんだ。そんな未来はねえんだよ」

カプリットは、知子が逃げないように襟首えりくびを鷲掴をしつかみにして銃口を知子の眉間に押し付ける。

知子はカプリットのレーザー銃を両手で掴んだ。自分の額から銃

口を外し、カプリツオの手に噛み付いた。

51：球体

『いてえ。いててて』

余りの痛さにカプリッオはイタリア語で叫んでいる事に気づいていない。

知子はカプリッオに振り回されながら必死に噛み付く。カプリッオの手は不味^{まず}い。更に皮膚が骨の上で滑るのでとても噛みづらい。

だが銃を持つ手に噛み付いていなければ撃たれてしまう。知子はカプリッオに負けないように顎に力を入れる。

カプリッオは知子を押し返すが、それは知子が噛み付いている部分の肉が伸びて痛みを倍増させてしまう事にもなる。

「やめろ、糞ガキ！ いてえ」

「知子さん！！」

智は、トロツキオを押し退けて走り出した。

『てめえ！』

トロツキオは押されてよろめきながらも走り出した智に短機関銃を向ける。

圭介がトロツキオの腕を掴んで短機関銃を別の方向へ向ける。発射された弾丸は智の足元を通り過ぎて芝生に当たる。

父も手伝ってトロッキオを押さえ込んだ。

子分たちはレーザー銃や短機関銃を構えるが、トロッキオやカプリッオに当たりそうで引き金が引けず、おろおろしている。銃では無理だと気づいた子分が智と圭介たちに向って走り出す。

このままでは智も圭介も大勢のマフィアに取り押さえられてしまう。

圭介は叫ぶ。

「智、爆破させる。知子さんを守るんだ！」

「分かった」

智はカプリッオを殴り飛ばして、知子に覆い被さった。

「知子さん、このままじっとしてて」

知子は智に守られながら、口の中にあるカプリッオの不味い塩気をペッペッと数回吐き出す。

圭介はポケットにある機械の蓋をとって中にあるスイッチを押した。

瞬間、別荘の中で爆発音がして屋根の一部が吹っ飛んだ。

爆発した場所は、ガルネオが保管していたタイムマシンの実験BOXがあった場所。

圭介は使える部品を駆使して遠隔操作の爆弾を作ったのだ。当然その爆発も青い光りになる。

ただし智が投げていたソラマメの手榴弾と比べると、破壊力はいまにも違っていた。

屋根に開いた穴から現れたのは青く光る竜巻。

竜巻はあつという間に広がり別荘を飲み込んだ。竜巻の青い光りは更に広がって庭にいる子分を巻き込んでいく。

青い光りを浴びた子分たちの体は、光りを帯びて崩れるようにして金色の粒子に変わり煙となって散っていく。

リビングの床に倒れているガルネオの死体も、召使いの死体も金色の粒子に変わり散っていく。

青い光りは智や圭介も襲うが、二人の体はバリアが守っているため、青い光を浴びても金色の粒子になる事はない。

そしてバリアは、青い光りを受けて球体の姿を現す。その球体の中にいる知子も両親も青い光りの影響を受けないため無事にいる。

知子は、智の腕の中で幻想的に光る青い渦を見ていた。

青い光りは渦を巻いて勢いよく流れているが、風圧は全く感じない。

智が通路で投げた小さな手榴弾と同じ青い光り。この青い光りで

通路にいた子分たちは全員金色の粒子に変わっていったのだ。

自分の手を見ているトロッキオも金色の粒子に変わっていく。

52：干渉

だが、知子は愕然とする。^{がくぜん}

カプリットが倒れている芝生に半球が見える。カプリットもバリアシシステムを持っているのだ。

カプリットは体を起こした。右手にはレーザー銃を持っている。智に殴られたせいで目が回っているのか、しきりに頭を振って立ち上がろうとしている。

智は、知子を抱き上げて走り出す。

「パパさん、知子さんを。絶対に放さないで」

「分かった」

智は、知子を父に委ねるとカプリットに向って走り出した。

「智さん！」

父にきつく抱きとめられている知子は身動きができなくて、智の死が予告どおりにならないように、祈ることしかできない。

カプリットは立ち上がる。智に気づきレーザー銃を撃つ。しかし智のバリアはレーザー光線を無力化してしまうため智に当たらない。

カプリットもそれは知っている。だが追い詰められたという焦りがカプリットの状況判断を狂わせる。

「チッ」

カプリットは舌打ちをしてレーザー銃を智に投げつけた。智は飛んできたレーザー銃を避けてからカプリットに飛びつく。

「もう、お前の好きにはさせない！」

「畜生！」

智のバリアとカプリットのバリアが干渉しあって稲光が起きている。

カプリットは懷からナイフを出して智の前で振り回す。

ナイフを避けてばかりいる智。その智の足はリズムカルにステップを踏み、上体をしなやかに動かしながらナイフから逃げ回りカプリットの隙を誘う。

その隙ができた僅わずかな瞬間を狙って、智はカプリットの懷に入った。ナイフを持った手を掴んで動きを封じる。カプリットの足を引っ掛けて、カプリットの体を芝生に叩きつけた。

うつ伏せになったカプリットの背に跨またがって乗り、智は完全にカプリットを押さえ込んだ。

カプリットはもう動かない。声を上げたりもしない。気絶したようだ。

青い竜巻は縮小を始めどんどん小さくなっていく。

トロツキオもその子分も金色の粒子に変わってしまい、知子たちの命を脅かす者はもう誰もいない。

竜巻が完全に消え去った時、ガルネオ島に静寂が訪れた。

知子は父の腕から下ろされた。走ってカプリツオを押さえつけている智の所へ行く。

智は顔をあげて知子を見る。笑顔になって知子に言った。

「これでやっと日本へ帰れるよ。知子さん」

53：唯一の救い

その智の背中から金色の煙が薄っすらと立ち昇っている。

その下にいるカプリツオの体からも金色の煙が昇っている。

「智さん。その金色の煙……」

今の知子なら、金色の煙が何を意味しているのか分かる。知子が目の前の状況を信じたくないと思っても、知子の脳は智の状態を冷静に判断してしまう。

智は竜巻の青い光りを浴びてしまったのだ。

「イヤだ、智さん」

智に飛びつこうとした知子の腕を圭介が掴む。

「智に触ったらいけない。触れば、知子さんの体も分子レベルで崩壊してしまう」

「圭介さん、手を放して」

知子は泣き出す。

「智さん、消えないで」

智に言ってもどうにもならない事くらい知子にも分かる。でも智を思う気持ちは止めどなく口から出てくる。

「圭介さん、教えて。どうしたら智さんは助かるの？」

圭介は首を横に振る。

「智はもう助からない。目に見えるほど濃縮された時間エネルギーに直接触れてしまった者は、体の細胞が分子分解を起こしてしまう。痛みがないのが唯一の救いと言うしか……」

智は知子に言う。知子の王子として。ヒーローとして。

「知子さん、泣かないで。これは僕が望んだ事だから。僕は、2008年に来る前に、未来の知子さんから、絶対に死ぬから過去へ行ってはいけないうて言われたんだ。僕もそのつもりだった。でも、どうしても時の摂理は変えられなかった。時間は人という代理人を僕の下へ送り「過去に変化があると時空がうねって歪みが生じて未来に悪影響が出る」と言つて、僕を執拗に過去へ行かせようとする。疲れて時の摂理に逆らう事を諦めた僕は、自らの意思で2008年の過去へ行くことを選択してしまったんだ。過去へ行くつて言ったあと、後悔したよ。2008年へ行くと返事をしてしまうなんて自分自身が信じられなかった。死ぬのは怖いし、逃げたいとも思つた。でも、それを知子さん、君が変えたんだ」

智は気づいて、急に呆れ顔になって笑い出だす。

「あははは。そういえば知さんは10歳だったね。時の定めには嘆き悲しむ僕を救ってくれたのは、15歳の知さんだったよ。15歳の知さんも、今の君と同じように、かわいい人だったよ。怒つたり、泣いたり、笑つたり」

今の智は、10歳の知子を通して、15歳の知子を見ているようだ。

「智さんの言ってる事、分かんない」

知子は圭介の手を外そうとしながら泣きじゃくる。

「ごめん。僕の言ってる事、10歳の知子さんには難しいよね」

智の体は金色の煙となってどんどん消えていく。

その下で気絶しているカプリツオからも金色の煙が昇り、体が消え始めている。

カプリツオが、智を生かそうとしたのは、タイムマシンで移動した時に、自分の死に智が関係している事実を知ってしまったからだろうか。

タイムマシンに乗り、自分の死を知っても変える事が許されない、悲しく^{きび}厳しい時の定め。

54：存在

それでも智は、笑顔で知子に話し続ける。

「知子さんのお陰で、僕は消えていく今も、諦めずに未来を見続ける事ができる。僕の体は全て金色の煙になってしまっけど、消えてなくなる訳じゃないんだ。知子さんがノーベル物理学者になれば分かる事だけど、物質と時間エネルギーは常に互いのエネルギーバランスを均等に保ちながら同じ場所に同時に存在していてね、濃い時間エネルギーに触れてしまった僕の体は、物質と時間エネルギーのバランスを崩して分子分解を起こし、更に分かれて原子になったあと、原子はもつと細かく分かれて、そこから時間エネルギーは分離し、次の原子の姿になるまで、まるで意思があるかのように時間エネルギーは自由に移動を始めるんだ。過去や未来、別の空間へとね。その後、原子は長い時間をかけて元の状態に戻るけど、時間エネルギーと分離してしまった原子が元に戻るにはかなりの時間がかかるし、原子が元に戻ったとしても、僕の人間としての体が元に戻る可能性はない」

智は、知子をじっと見つめながら一呼吸置いてまた話し始める。

「とりあえず僕の体は時間エネルギーになっちゃってしまうけど、今度は知子さんのための時間となつて、ずっと知子さんと一緒にいて、ずっとずっと知子さんを見守っていく事にするね」

知子は、頬を流れる涙を片手で拭^{ぬぐ}ってしゃくりながら言う。

「私、絶対にタイムマシンを作るから。時間エネルギーの事も調べて、絶対に智さんを助けるから」

「知子さんは、僕を助けてくれるんだ」

「うん。絶対に助けるから」

「だったら僕は、助からないと思っていた自分の未来を変える事ができたのかな」

智は今も笑顔だが、青い瞳には涙が浮かんでいる。

「知子さんに会えて、とっても楽しかったよ。知子さん、ありがとう」

智は笑顔と言葉を残して消え去った。その下にいたカプリツオも消えていない。

まだ金色の煙は宙を漂^{ただよ}っている。

「智さん!!」

知子は散って薄くなっていく金色の煙に手を伸ばす。だが、圭介が知子の手を引くので、知子は煙を掴む事ができない。

「知子さん、まだ危険なのでさがって下さい。時間エネルギーの濃度が、もっと薄くなるまで待って下さい。薄くなって私たちの目で確認ができなくなるまで触ってはいけません」

「智さん……」

どんなに呼んでも、もう智の返事は返ってこない。智の笑顔も見

れない。

知子のヒーロー智は、時の王子様になってしまったのだ。

人間の知子がどんなに恋焦がれても、どんなに智を呼んでも、会う事も触れる事も許されないのだ。

知子は泣き続ける。知子の心を開いた穴は、流れ落ちる涙のせいでどんどん大きくなっていく。

そんな知子に、母が近づく。

「知ちゃん、智さんのお嫁さんになるのよね？」

「うん。なる。絶対になる」

知子は、母にすがって泣き出した。

父も知子と同じ背丈になるように腰を^{かが}屈めて知子の頭を撫ぜる。

「頑張れよ、知子。パパも応援するからな。立派なノーベル物理学者になるんだぞ」

「うん。ノーベル物理学者になる」

知子を^{なぐさ}慰める両親は博士号を持っていない。物理学の知識は学校で習ったが、思い出せないほど社会の荒波に揉まれてしまっている。時間原理の知識などあまりにも縁遠い。それでも、智は人に戻れない存在になってしまったのだけは分かる。もし知子が智に会えたとしても、それはタイムマシンで移動した過去の智なのだと。

圭介は、もう危険は無いだろうと判断して、知子の手を放した。

「智さん」

知子は智がいた芝生の上に座り込み芝生を撫ぜた。芝生の先端が擦り切れている。どうやら芝生も青い光りを浴びて一部が時間エネルギーになったようだ。知子は静かに泣き続ける。

圭介は知子たちに背を向けた。背を向けても知子の鼻をすする音は聞こえてくる。

「時の摂理は、こんなにも悲しいものだったんだな。博士号を持っている私が今頃気づくとは……」

圭介も静かに涙を流した。

55：父の隣

西に傾いた太陽が照らす、ガルネオ島。

今日は2008年5月5日、子供の日。

芝生の上にいる知子たちの間を、静かに心地よい風が吹き抜けていく。

今ガルネオ島にいるのは、知子と、知子の両親と、圭介の、4人のみ。

全てが終わり心が落ち着いてから、4人は疲れを思い出して芝生に座っていた。

知子は泣きやんで、両親と一緒に海の景色を眺めている。

4月半ばに智と出会い今日まで、10歳の知子はいろいろな事を経験した。

王子智に恋をして、ノーベル物理学賞を受賞しタイムマシンを發明すると知らされて、命の危険にまで晒さらされて、知子は、まだ10歳なのに人生の半分を経験してしまったような気分になっている。

でも、本当の戦いはこれから始まるのだ。今後の知子の敵は時間。見る事も触る事もできない相手に挑いどんでいかなければならない。でないと、時間の彼方あつちにいる時の王子、智に会えないからだ。

そして、智が消える前に言った、15歳の知子に会ったという事

実。これはどういう事なのだろうか。詳しい事は分からないが、この先いろいろな事が待っている、というのだけは10歳の知子にも分かる。

「これからいっぱい大変だあー」

知子はポツリと呟いた。

父は圭介と今後について話し合いをしている。

父の表情は落ち着いて穏やかだ。暇を持て余しているようで、芝生を千切りながら言う。

「これから私たちはどうやって日本に帰るんですか？」

「未来の知子さんの話によると、芝生がある所で待っていれば未来から迎えが来るらしいのですが、こうやって座って待っていても迎えが来ないところを見ると、芝生がほかの場所にもあるのかもしれないですね」

キング圭介は、大らかにゆったりとした口調で言う。

父は手を止めて圭介に向き直る。

「ジョゼフさん。未来の知子さんから話を聞いて知っているんだったら、もっと早く言って下さいよ。うちの知子が拉致されたのも、ジョゼフさんが、知子の未来の事実を隠していたからじゃないですか」

「いえそれはですね、未来の知子さんから、未来の事をパパさんに

話すと、パパさんがマフィアに教えてしまつと言われていたので…」

父は急に怯む。^{ひる}

「いや、それは、その……」

圭介がタイムマシンのエンジニアだとマフィアに話してしまった父は、逃げ場が無くて芝生を撫でまくっている。今の父は、圭介に頭が上がらないようだ。

父の隣にいる知子は、だんだん黄^{こがねいろ}金色に染まっていく景色をボートしながら見ている。その途中で、宙に浮いている青い竜巻を見つけた。

「ママ、あれ？」

「あ、青い竜巻だわ」

圭介が確認する。

「お、やっと来た」

4人は立ち上がる。

竜巻は大きくなり、一台のタイムマシンを運んできた。

そのタイムマシンは新幹線の先頭車両と後尾車両をそのまま繋ぎ合わせたような形をしていた。

ボディには「TIME POLICE」の文字がある。未来の時間警察が所有するタイムマシンのようだ。

タイムマシンは芝生の上に着陸したあとに入り口が開く。これも新幹線のようにスライド式の入り口になっている。

中から制服に身を包んだ警官が出てきた。警官は4人を確認して圭介の前に立つと敬礼をした。

「相馬・ジョゼフ・圭介博士ですね？」

「そうです」

「我々は、2060年から参りました、時間警察イタリア支部の者です。時間犯罪人カプリツオを追って2008年に来たのですが、カプリツオが2008年の時間空域に特殊なバリアを張り巡らし、進入不可能となっております、さきほどそのバリアシステムの撤去が完了し、この2008年に到着した次第でございます」

「そうですか。それはご苦労様です」

圭介は慣れた表情で警官の話を聞いている。

その後ろでは、両親が目を爛々と輝かせてタイムマシンを見ながら話をしている。

「あなた、聞いた？ 2060年だつて」

「聞いた、聞いた。あのタイムマシンも、きっと知子が作ったんだよな」

「イタリア支部なのに、あの人、日本語をしゃべってるわ。頭いいのね」

「知子もいずれば、ああなるんだよ。きっと」

警官はチラリと両親を見るが、続けて圭介に説明を続ける。

「途中カプリツオの攻撃を受けて、時空内のバリア付近で立ち往生をしていた2047年のタイムマシンを我々が発見保護し、現在は牽引されて2047年に向っております」

「多分それは、2008年5月3日の0時に日本の岐阜県に到着する予定だった、私たちのタイムマシンだと思います」

「おっしゃる通りです。相馬博士」

自宅で知子たちが襲われた時、未来から増援部隊が来なかったのは、カプリツオの攻撃によるものだったのだ。

56：大変な労力と多額の費用

警官は何枚かの書類を手取る。

「我々が調査した結果、時間犯罪者カプリットと、軍用武器を不法に製造所持した件で、生田公雄博士に逮捕状が出ております。生田博士は先ほど逮捕されたと連絡がありました」

「生田公雄博士……。どこかで聞いた名前だな。どこでだったか……」

圭介は生田を思い出せないようだ。

警官は次々と書類を読み上げてく。

「あとはカプリットですが、この島に来たところまでは突き止めているのですが、カプリットは特殊なバリアシステムを装備しておりまして、タイムリーダーでの捕捉が不可能で、現在も行方が掴めず」

圭介は淡々とした表情で言う。

「カプリットは、時間エネルギーを浴びて霧散したよ」

「霧散ですか!?!」

警官の動きが止まり、警官は首だけを動かして4人を順番に見ていく。

「ああ。見ての通り、この島に巣くっていたマフィアも時間エネルギー

ギーに飲み込まれて、今はいない。残っている人間は私たち4人だけだ」

圭介は手を広げて別荘の端から端を示してみせる。

知子たち家族は、首をそろえてそうだと頷く。

警官は拍子抜けし、辺りを見回して、本当に4人しかいないのを確認すると、タイムマシンから降りた。

「本当だ。誰もいない。では、2台のタイムマシンが2008年にあるはずなのですが、それももしかや？」

「一台は私が壊し、時間エネルギーに変えてしまったからもう無い。現在あるのは、あそこの1台だけだよ」

圭介は芝生の上にあるカプリツオが乗っていたタイムマシンを指さす。

智が消えた原因となった大きな青い竜巻は、圭介が壊したタイムマシンによるものだろうか。

知子が考えていると、圭介は振り向いて知子を見た。

「智が消えたのは、私が屋敷内にあったタイムマシンを未来の技術で爆破し、時間エネルギーに変換したからだ。私の計算では、智のバリアは濃縮された時間エネルギーに100%耐えられるものだった。まさかカプリツオのバリアが智のバリアに悪影響を及ぼしてしまうとは……」

知子の脳裏に消えながら微笑む智の姿が蘇る。よみがえ 知子はまた涙ぐむ。

父は泣きそうな知子を見て、圭介に言った。

「ジョゼフさん、なぜそんな危険な事をしたんですか？」

「私はタイムマシンを未来に戻すか、できなければ破壊しなければならぬ使命を帯びていた。カプリツォが違法で作られたバリアシステムを所持しているとは思わなかったんだ。正直、あの時の私は追い詰められていて、そこまで考えが及んでいなかった。悲しい結果になってしまった事は、すまないと思っている」

警官は、咳払いせき払いをして圭介と父の間に立つ。

「とりあえず、ドン・ガルネオは記録によると獄死した事になっています。今いなければならないマフィアがない状態で時が進むと過去と未来の間で誤差が生じ、それに伴ともなって時空にも歪みが生じ、未来に悪影響を及ぼしてしまう。至急、手配をして、ガルネオにそっくりの有機ロボットを製造し、2008年に送り込み、過去と未来の誤差を修正しなければなりません。ほかにも調査をして、消滅した人数分の有機ロボットを製造する必要がありますね。こりゃあ忙しくなりそうだ」

警官はタイムマシンの中にいる者に声を掛けて仕事を手伝うように言う。するとほかの入り口もスライド式に開いて、次々と警官が降りてきた。新幹線の形をしたタイムマシンだけあって、降りてくる人数も2台の車両分いて多い。

圭介と話している警官は、イタリアの日差しが暑いのか警帽を被り直して中の空気を入れ替える。

「2047年の時間警察から相馬博士と警護のSP1名の身柄を保護するように引継ぎを受けております。それと相馬博士には、ほかにもお聞きしたい事がありますので」

警官はチラリと知子たちを見る。このあとの話は過去の人間である知子たちには聞かせたくないようだ。

「恐れ入りますが、我々のご同行願えますか？」

「その前に、カプリツオが知子さんの友人の名前を口にしました。もしかするとその友人の所にカプリツオの子分が潜んでいる可能性があるのですが」

「分かりました。そのご友人についても後ほど詳しく伺い、身辺警護の手配をします」

「それと、私に同行していたSPは、カプリツオと一緒に時間エネルギーに巻き込まれて霧散しました」

「それも詳しく伺う必要があるようですね」

圭介は人差し指を一本立てる。

「もう一つ」

警官はまだあるのかという表情をするが、圭介の顔を見て急に引き締まった表情になる。

圭介は振り返って知子たちを見た。

「できれば、この家族を日本の岐阜県にある自宅へ送って欲しいのですが」

警官の目が驚いている。だが圭介が警官を見ると、警官は凜とした表情に戻る。

「申し訳ありませんが、時空移動の法律により、どんな理由があるうとも、タイムマシンが存在しない時代の人間を、タイムマシンに乗せる事はできません。相馬博士なら重々ご承知だとは思いますが、未来の技術や情報が過去の人間に渡った場合、そのために生じた過去と未来の誤差を修正するために、大変な労力と多額の費用が必要になってきますので」

57：相対性

圭介は手を知子に向ける。

「こちらは、新相対性時空移動理論のノーベル物理学者、加藤知子博士なんですが」

圭介のいきなりの発言に、知子の両親は顎を落とす。

「あの、ジョゼフさん。10歳の知子に、ちょっとそれは」

言いかけた母に、圭介は鋭い視線を送って母を黙らせる。

事あるごとに警官の態度が変わるのは、圭介の鋭い視線を浴びるせいだからか。

知子も驚いて、キングの威厳とオーラを帯びた圭介の姿に目を見張る。

「加藤知子博士はまだ10歳ですが、タイムマシンに関わっている立場上、カプリッオの被害にあり、現在ここにこうしている訳なのです」

「そうとなると、加藤知子博士についても、お話をお聞きする事になりますか」

「構いません」

「分かりました。今からそちらのご家族のためにタイムマシンを手

配しましょう」

警官は外にいる警官に指示を出す。声をかけられた警官は走ってタイムマシンの中に戻った。その数2名。

タイムマシンは扉を開けたまま浮上し、ちょうど真ん中を境に二つに分かれた。両方のタイムマシンとも新幹線の先頭車両のようだ。

警官は知子たちをタイムマシンへ誘導する。

「ご自宅へお送りしますので、あちらのタイムマシンに搭乗して下さい」

知子たちは返事をしてタイムマシンに向う。

「相馬博士は、こちらのタイムマシンで私とご同行願います」

「わかりました。……あ、そうだ」

圭介は、中指と親指でパチンと音を立てて、父を呼び止める。

「そういえば、パパさんに言わなければならない事がありました。知子さんに関する、とても重要な事柄です」

父は立ち止まって振り返える。

「ん、それは？」

圭介は、歩いて行き父の前に立つ。

「実はですね、パパさん。知子さんは、大学で同じ年のある男性に出会います。その男性は、知子さんの自宅へ行き、パパさんに、知子さんと結婚させて下さい。と言います」

「結婚！！ 大学生で！？！？」

突然の娘の結婚話に、父は驚きを隠せない。

「そうです。正確に申し上げれば、結婚はそれから先の話になるのですが。その男性が、パパさんの前で結婚の話をして、絶対に「お前のような危険極まりない男に、うちの大切な娘はやらん」と言わないで下さい」

圭介の言葉はやけに力が籠っている。

「その男性は、パパさんが思うような危険極まりない人物ではありません。大変真面目で、いつも知子さんの身を案じ、知子さんをとっても大切に思っています。いいですね。これだけは絶対に忘れないで下さい。宜しくお願い致します。パパさん」

そう言う圭介はタイムマシンに乗り込んだ。圭介を乗せたタイムマシンはすぐに飛び立つ。

知子たちは、芝生の上で圭介が乗ったタイムマシンを見送る。

「あなた。さっきのジョゼフさん、なんか怖かったわね」

母はガルネオ島で起こった一連の出来事を思い出しながら言う。

「時々ジョゼフさん怖い時があるのよね。私たちより年上だから、

ジョゼフさんが上目線で話すのは仕方ないけど、知子に銃が向けられた時、急に大声になって汗を流してイタリア語で話し出したり。カプリツォに銃を向けられた時も、爆破させるって言って、本当に爆破させちゃうでしょう。それで智さんも消えてしまった訳だし。普段のジョゼフさんは、ハンサムで紳士で恰好いいのに……。きつとジキルとハイドみたいになん面性がある人なのね」

急に父が、喉が鳴るほど勢いよく大きく呼吸をする。

「そういう事が……」

「あなた？　どうかしたの？」

「これは娘を持った男親でないと分からない問題だ」

父は拳を強く握り、力強く足を動かして歩き出す。

「あなた？　何よ、あなたまで怖くなって」

母は訳が分からず父を追いかけて行く。

父はマフィアのように凄味を帯びた顔つきでタイムマシンに乗り込んだ。

「あなた、一人で分かってないで私にも教えて下さいよ」

母も父のあとを追ってタイムマシンに乗り込む。

知子は、また仲の良い父と母のじゃれ合いが始まったと思いながら、タイムマシンに乗り込むため外壁に手をついた。その時。

10歳の時から、ずっと先の未来を見ていたんだね

知子は声が聞こえたような気がして振り返った。後ろには誰もいない。青い芝生が広がっているだけ。

声は耳から入ったものではない。感じた、といったほうが正しいのかもしれない。

時の王子、智が知子に囁いたのだろうか。いや、男の声ではなかった。なら、時の女神の囁きだったのか。

58：平和

「知子、警察の人を待たせては悪いわ。早くタイムマシンに乗りなさい」

「はぁーい」

知子は母に返事をしてから、もう一度振り返って青い芝生を見た。そこはちょうど智が消えた場所。

「智さん。私またここに来るから、絶対にここに戻って来るから、それまで待っててね」

そう言うつと、知子はタイムマシンに乗り込んだ。タイムマシンのスライド式のドアが閉まる。

タイムマシンは、青く光る竜巻を発生させて、一瞬にして飛び立った。

2008年。6月。

今日も岐阜県の空は晴れていた。

自宅に戻り、両親との平和な生活を取り戻した知子は、いつもの如く佳枝と美里と下校し、今日も元気に学校から帰ってきた。

大人になったらタイムマシンを作り智を助けるという決心は今も

変わらない。

だが、勉強はとても大変だという事実もあるので、知子はとりあえず目の前の宿題から取り組んでいる。

今日も知子はランドセルから理科の教科書を出す。ちゃぶ台の上で教科書を開くと、鉛筆を握り真剣な表情になる。

母は暖簾のれんをそつと動かして知子が勉強している姿を見て安心する。

ただし、知子が理科の教科書に、一心不乱に智の似顔絵を描いているなんて、母は全く気づいていなかった。

終

エンディングテーマ

【題】 in this life

【歌手】 Delta Lea Goodrem

http://www.youtube.com/watch?
v=XzUNOVj8EVE
http://www.youtube.com/watch?
v=Jep1mFJKKJ0&feature="rela
ted

【歌詞】

I was nurtured I was sheltered

I was curious and young

I was searching for that some
thing

Trying to find it on the run

Oh and just when I stopped lo
oking

I saw just how far I'd come

In this life

In this life

You give me love

You give me light

Show me everything that's be
n happening

I've opened up my eyes

Following

Three steps fight an honest
fight (oh oh)

Two hearts that can start a
fire (yeah yeah)

One love is all I need

In this life (oh oh)

Yeah Yeah Yeah Yeah

In this life

Oh Whoa Whoa Whoa

I have faltered I have
stumbled

I have found my feet again

I've been angry I've
been
shaken

F o u n d a n e w p l a c e t o b e g i n

M y p e r s i s t e n c e t o m a k e a d i f f e r e n c e

H a s l e d m e s a f e i n t o y o u r h a n d s

I n t h i s l i f e

I n t h i s l i f e

R e p e a t

O h W h o a h W h o a W h o a

I n t h i s l i f e

Y e a h Y e a h Y e a h Y e a h

I w a s p u t h e r e f o r a r e a s o n

I w a s b o r n i n t o t h i s w o r l d

A n d I ' m l i v i n g I ' m b e l i e v i n g

I was meant to be your girl

In this life

In this life

Repeat

Yeah Yeah yeah yeah

In this life

Yeah Yeah yeah yeah

In this life

Oh Whoah whoa whoa

In this life

Yeah Yeah yeah yeah

【和訳】

イン・デイス・ライフ

デルタ・グッドレム

私は大切に育てられ、守られてきた

好奇心いっぱいであつた

その特別なものを探していた

必死で走り回って手に入れようとしていたのよ

Oh そして探すのをやめた途端に気づいたわ

自分がどれだけ遠くまでやって来たのか

この人生で

この人生で

あなたは愛をくれた

あなたは光りをくれた

これまでに起きたことを私に見せてくれた

私の目は開かれて

忠実に従う

3つのステップに、正々堂々と戦い

火をとす2つのハート

必要なのはひとつの愛だけ

この人生で

私は過ちを犯したことも、つまず躓いたこともある

でも再び立ち上がったわ

怒りに燃えたことも、信念が揺らいだこともある

でも新しい出発点を見つけたわ

変わろうと望む根気強さが

あなたの力強い手へと私を導いたの

この人生で

この人生で

”あなたは愛をくれた”の繰り返し

私がここにいるのには理由がある

この世界に生まれ出て

私は生きている、信じている

あなたのものになる運命だったのよ……この人生で

”あなたは愛をくれた”の繰り返し

この人生で この人生で この人生で

59：あとがき

ノーベル物理学者アルベルト・アインシュタインは、寝転がって空を眺めていると頭に数式が浮かんだそうです。

私はそれを知った時、天才とは考えるという感覚無しに、物事が頭に浮かぶんだな。と思いました。

こんにちは。雪鈴るなです。

「ノーベルにこんにちは」を読んで頂き有難うございます。

楽しんで頂けたでしょうか？

「ノーベルにこんにちは」は、ペンネームを鴨一雲霧から雪鈴るなに変更して初めての作品となります。

そして今回は「ムーンチャイルド企画」に参加してみました。

私にとって企画に参加するというのは初めての試みです。

期間中の私がどういう状態だったか申し上げます、

「ノーベルにこんにちは」の投稿に明け暮れていた私は精神的になり追い詰められた状態にいました。

私が毎日投稿し続けていた事は読者のみなさんもお存知だと思います。

投稿中も、普段の生活をしなくてはならなかったし、仕事もあったし、賞の応募用の小説を仕上げないといけなかったので、睡眠時間を減らし、見たいテレビ番組も録画して「ノーベルにこんにちは」の創作をしていました。

完成したプロットを見た時、長編癖が出てしまった。どうしよう。「ざ・ほもさぴえんす」のような、別の短編を適当に作って投稿して逃げちゃえ。

と、^{あゐるがし}狡賢い事を考えましたが、既に4月末。

長編を書くのが大好き。連載を止めてはならない。期間内に完結しなければならぬ。という私の性格もあり、逃げも隠れも誤魔化す事もできませんでした。

仕事と家庭と投稿の生活をする私は、日々のストレスから、来る日も来る日も、食べて食べて食べて食べまくりました。

ゼリー、寒天、^{いんげんまめ}蒟蒻、乳酸菌食品。

ダイエット食品も食べまくれば太る。というのを学び、6月から食べた分だけ体を動かそうと心に決めております。

「ノーベルにこんにちは」を書き終えたのが5月28日の夜。

今だから笑える話ですが、「ノーベルにこんにちは」というタイムトラベルに関する話を書いていたあの頃の私は、ニュースを見る時間も惜しんで投稿作業に専念していました。

世情の移り変わりを知らず、世の中の流れに取り残されてしまい、

製作期間は約1ヶ月半でしたが、書き終えて以前の生活に戻った私は、間髪を容れずに新しい情報に触れてしまったので、ちょこっとだけタイムマシンに乗って未来に来たかのような錯覚に陥りました。

未来に来るといふのはこういう感じなんだ。と仮想体験できたのは収穫だったかな。

今度は、予選に落ちた作品を推敲し直して、のんびりと連載していこうと思います。

次の投稿まで暫く時間がかかりますが、今後雪鈴るなをどうか宜しくお願い致します。

では、またお会いできるその日まで。

雪鈴るな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2127e/>

ノーベルにこんにちは

2010年10月8日21時45分発行